

513

354
621

羽太銳治著

珍獵
談奇

浮世秘帖

國民書院發行

×
複写



始



513

354

621

×

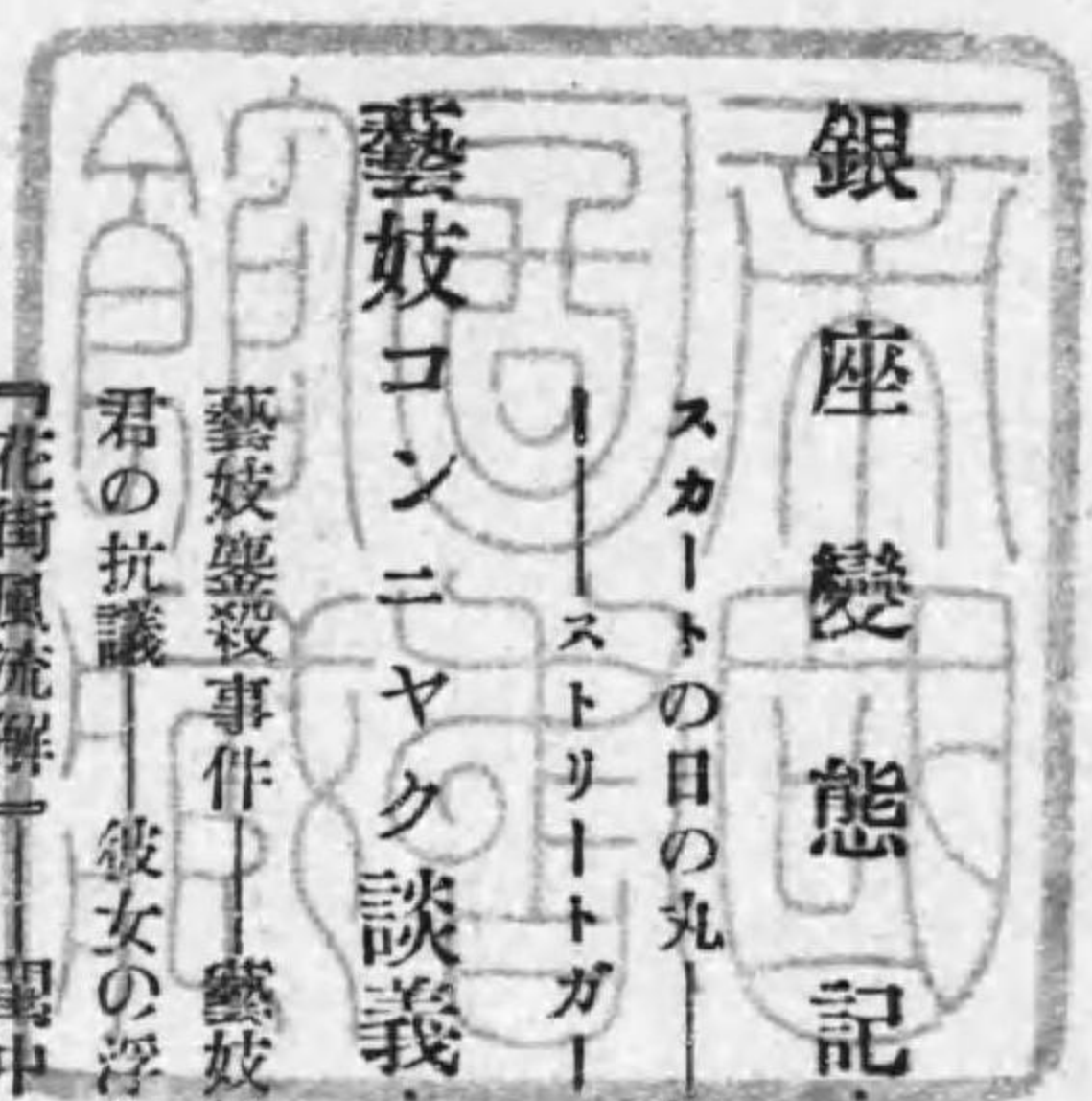
珍獵
談奇

浮
世
秘
帖

羽
太
銳
治
著

國
民
書
院
發
行

珍奇 獵談 浮世秘帖 目次



スカートの目の丸——銀座名物松屋風——病的銀座挿話——薄暗いカフェ
 ストリートガール——Aの話——Bの話——ステツキガール
 藝妓コンニヤク談義
 藝妓襲殺事件——藝妓撲滅祝賀會——女給の俄藝者——猫の繁殖——藝妓
 君の抗議——彼女の浮氣物語——色道虎の巻——戀愛の無政府主義者——
 『花街風流解』——團中の挨拶——再會の傳——三會目の傳——迷道の秘法——
 藝妓浮氣の典型



1 或る人肉市

ヨコハマ——チャブ屋の女——肉に飢へたエトランゼ——彼女等の生活

と収入——どん底へ落ちる迄——性の亂舞時代——制慾は有害か——不自
然的行爲——ダンスで性教育——誘惑の危機は月經中——戀愛のユートピ

女！ 女！ 女！…………… 101

舌——目——涙——美人——鏡——自惚

馬鹿げた話・途方もない話…………… 104

蚤と虱——猿の尻尾——權兵衛が種蒔きや——女房の疝氣——雕とミソサバ
イ——お菓子の家——強氣同志——蛙のお禱り——鼠の娘——何故犬は片足
上げて小便するか？——猫、蠅、松、風——鼻が伸びる——源五郎鮪——白
鼠と猫——三井寺の釣鐘——落語えつせんす——女學生の隠語——忠臣蔵十
二ヶ月——むげん地獄——辨慶の毒見——鳥二題話——二人權兵衛

あばら骨の悲哀…………… 105

婿選みの第一選手——金佛と金佛の睨めつと——天晴れ名吟——お次の候
捕者——あばら骨がない

酒嫌ひの酒豪…………… 106

白面一青年——呑みも呑んだり四升八合——大晦日の晩に半樽

昔のなんせんす…………… 107

秋の空——忠臣蔵料理——おけど忠臣蔵——忠臣蔵穴さがし——淨瑠璃
文句穴さがし——繪本太閤記——菅原傳授——本朝二十四孝——戀飛脚——
義經千本櫻——二代鑑——戀女房——お染久松——妹背山——双巴——と
ころ目慢

江戸時代の禁止好色本…………… 108

筆禍の元祖——江戸時代の發禁——發禁の刑罰制度——禁止春本淫書の數々

死靈の祟り…………… 109

毎晩驚される——布團へのしかる黒い影——死人が憑く——お岩様が來
る——氣魂しい叫び——易者の占ひ——死靈の言葉

歐米奇聞珍聞切抜帳

色魔業——ユーゴーへの戀文——一萬圓か貞操か——花嫁賣物四千圓——
愛する女の皮を表紙に——露西亞の結婚——女の極樂露西亞——羞恥を去
れ——ひとがた——外國の魔窟——結婚俱樂部——歡樂船——日本人歐米人
の雜婚獎勵

相撲總まくり

大男の記録——看板力士——片輪力士——非職業士——比丘尼の大力——
相撲で係争解決——力自慢

酒仙徳さん

九升呑んで家出——歸らぬ親父——親譲りの酒——酒生一如の境

一家和合鑑

人生教育・七ついろは——主人の心得べき事——女房の心得べき事——息
子の守る事——娘の守るべき道——丁稚と小僧さん——手代番頭の心得——

『へ』ものがたり

乳母の心得——下女の心得——良人讀本、かゝる妻は不貞なり——妻の不
貞診斷二十個條——數へ歌いろく

屁の語源——おならの語源——屁の化學的分析——屁はどうして出るか——
屁の効能——古今放屁名人逸話——屁の小咄——三宿の屁——風が腐る——
姑と嫁——代診——座頭——あぶく——狂歌屁づくし——都々逸屁づくし
川柳屁づくし

明治初期世相覗き眼鏡

娼妓の檢査忌避——明治五年には十二月なし——放屁して罰金——六人乗
の人力車——遊女解放餘譚——郵便箱を共同便所と間違へる——二千五百
圓で身賣志願の男——西洋人子胤取りの風説——西洋人妓樓で醜態を演ず
——最初の西洋人との結婚——切支丹魔法の電信——人と豚の合の子——
白鼠横丁——新島原遊廓——女乞食の醜狀——ザンギリ頭の珍談——猥褻
行爲の見世物——洋妾の濫觴——婦人乗馬の流行——牛鍋のはじまり——
日本最初の輕氣球——屍姦未遂者

銀座變態記

スカートの日丸

羽太銳治著

近頃は猫も杓子も銀座々々で横から縦から随分と書き盡された。殊に松崎天民などは早いと一冊の本にまとめ上げて金を儲けて酒を飲んで、女を買った。だが、書いても書きつくせぬ不思議な街は銀座だ。

京橋から新橋までブラリと散歩つても、何かしら話の種はあるといふもの、早い話が洋品店の前に立つて、三尺もある肉色の女靴下を眺めて、あれを穿いたら何こまで届くだらうと、その届き先を気に病んだなどいふのも一口癖にはなるだらう。

また前をゆく女の足下を注意して歩くのも暇つぶしにはなる。五十人に一人の割で、埃をもらいとふ白足袋の小はぜのあたりが鮮血に染んでゐる。ひどいになると、スカートに丸く染め

抜きが出来てゐる。

む、汚いねえ、だらしがないねえ、とは口先だけ、怖いもの見たさとは又別な心理状態で眼は執拗に彼女の、現はれを追つてゐる。

「けふも一つあつたよ」

「何が……」

「トンネル火事が吹き出してたよ」

若い男どもはコーヒーをすゝりながら、そんな話をしてゐる。日本の國は正に危い。

それにしても銀ブラをするほどの女が「何とか帯」と稱する文明の利器を心得てゐない道理がない。これは異性の眼を集注さすべく手段を選ばぬ彼女たちの露出狂的直接行動ではあるまいか、と眞顔で首をかしげた男もあつた。餘り精巧な男ではないと、この言や笑殺すべく餘りに穿ち過ぎてゐる。

健全な人が寢小便をしたら可笑いだらう。だが、病氣のせいの寢小便だつたら誰も笑ひはしな。

だらしのない女の、いとも汚らしい嬌態を意識的にやつてゐるのだらうと考へさせる銀座が、恰度寢小便をしても笑はれない病人と同じなのだ。それほどにも、銀座は變態的疾患の第三期に入つてゐるやうである。

銀座名物松屋風

名物筑波風の向ふを張つて銀座に松屋風といふがある。松屋と山口銀行との高層建築の間に發生する突風をいふので、如何なる穩かな日でも吹いてゐる。冬は本家の筑波風よりも苛辣に夏は溪谷の涼風のやうに、恐らく年がら年中吹いてゐる。

この松屋風はどんなに苛辣に吹いても、筑波風や秩父風のやうに直に炬燵やインフルエンザを聯想させるやうなことはない。そんな野暮ツたい、爺むさい名物では決してないのである。

可愛い風の悪魔が狎ころのやうに街上をころがり歩いて御婦人の藻裾にちやれつく春に於て松屋風は銀座名物の眞價を發揮する。街頭で狎ころのやうな春風も一度この人工的溪谷に至るや、猛然サラブレッド種の種馬のやうな勇敢さを出して、モダンガールのスカートをズロース

にまでまくし上げ、行ひすました若い奥さんのスタイルを寝みだれ姿にまで崩して了ふのだ。
 大戦前、アメリカでも未だショートスカートが許されてをらす、女の脚は夢おろそかに見せ
 べからず見るべからざるものであつた頃。電車の階段が高過ぎるために乗降の際にスカートが
 まくれてふくらつ脛まで見へるこれは由々しい社会風教問題であるとなして、婦人團體が電車
 會社へ、ステップを何時か低く改造するやうに談じ込んで大問題を惹き起したことがある。
 若し頑冥不祥なる當時の米國の風習に従ふならこの松屋風に對しても早速抗議すべきである
 が（尤も相手が風では抗議のしようもない）——幸ひにも當今はショートスカート全盛時代、
 脚は女の美の極致、極度にまで露出すべしとあるから、抗議どころか、昔風の風なら前をおさ
 へて

「あらいやな風」

としなを作る所で、當今の御婦人は突風の中に突つ立つて

「風よ吹けくもつとまくれ」

と、心の中で念じてゐるかも知れない。

まさかさうまでは念じなくとも藻裾がみだされて赤い蹴出しから白い脛の露出した瞬間。前
 後左右に男性の視線を感じて、羞恥よりも満足を感じてゐることだけは事實だ。

この人工的突風に甚だしく興味を覺へたある男が、電車や自動車に轢かれる危険を冒して、
 風の痴漢に襲はれて、得意然たる御婦人一百人を克明にも比較研究して一つの統計を作つた。
 その報告——

▽御婦人二百人、うち洋装卅三人、和装六十七人。

▽洋装卅三人、うち洗ひたてズロース十二人、きたないもの十六人、穿いてないと認め
 られる者三人、不明二人。

▽和装六十七人、うちメリンスの湯もじ廿一人、絹物廿八人、湯もじの代りに襦袢又は
 ズロース着用と覺しきもの七人、都腰巻五人、不明六人、以上のうち更に靴下を穿い
 たもの十二人に及ぶ。

彼は附言して「都腰巻愛用者の減少したのは春のせいだが、足袋の下に靴下を穿いた者の頑
 へたのは慨嘆すべきだ。彼女たちは自分の脚が、その顔よりも男性を魅惑するといふことを知

らないんだ。知つてゐて尙且さういふ生活？態度を取つてゐるものとしたら、極端に羞耻心が發達してゐるのか、或ひは一種の反動主義者だらう」

彼の憤慨はしばらく措いて、山ほどの買物を両手にかゝへて突如松屋風を喰つた第一公式の御婦人の姿を三分間ほど想像して御覽なさい。抱へた包を投げ出すことは人情として出来るものでない。だからといつて砂塵を捲き來つた狂犬のやうな突風に遠慮のあらう筈がない。

下から上へ吹き上げるつむじ風に、彼女の下半身が妊娠八ヶ月ほどにふくらむよと見る間にパツと碎けて紅紫とり／＼の長襦袢、湯もちが直線的に吹きなびいて性的爛熟期の兩の脚か太腿までも公開される。

うわーッたまらない、と、うつかり立ちすくんだ男が、帽子を吹き飛ばされて恍惚境から我に返つてみれば、帽子は駆け出す女の股にすつぱりと納まつてゐて、男も女も引ッ込みのつかない飛んだ喜劇を演ずる事もある。

脚の美を強調するのが近代風俗なら、大いに見てやるのが女性に對する男性の禮儀だとも云へる。何もおづ／＼見る必要はない。堂々と觀賞すべしだ。盗みでもするやうな氣持で享樂し

ようとするから、帽子を飛ばされたり自動車に轢かれたりするのである。この邊に交通事故の多いのは強ち往來頻繁のせのばかりではない。

病的銀座挿話

銀座ほど女の多く通る街はなく、また銀座ほど女の匂ひの充満してゐる街はない。よく云はれる銀座の匂ひとか情調とかも實は女性の肌から發散する内分泌の匂ひによつて形成される魅惑的な妖氣をいふのである。

慢性銀ブラ病者の中にはこの妖氣に憑れた一種の變態性慾者が多い様だ。彼等ほど眞の銀座を解し、享樂してゐるものはない。彼等が銀ブラをする時には必ず鼻をかんで鼻糞をほじくしつて穴の通りをよくするだらう。警察犬よりも尙敏感に彼等の嗅覺は活動するのである。

だから、彼等にいはせれば、懷にバツトか朝日もつてゐる癖に恰も日常葉巻を愛用してゐるやうな態度で、わざ／＼一本十五錢の馬糞くさいの得意氣にふかしながら銀ブラをする者の氣が知れないのである。

「犬のやうにクンクンしながら散歩するのも餘りほめた體たらくでないが、半分勿體なさうに、半分煙つたさうに葉巻をふかして歩く奴も銀座の風上には置けない。」

さて、この犬のやうな慢性銀ブラ患者の最もよるこぶ季節は五月セル着る頃の夕べで、そして女性の妖氣の最も濃厚な場所は尾張町の交叉點、山崎洋服店の前あたりである。バナ、が夜の店の屋臺で熟す夕べ、彼等は思ふ様に妖氣に浸るのである、一種の自演行爲、不全姦通ともいへよう。

自演行爲といふ言葉が出て来たから、ついでに病的銀座を物語るにふさはしい二三のエピソードをお話することにする。

A——カフェにしげくと通ふ青白い眼をした二十二三の青年があつた。いつも奥まつたボックスに一人で来て、カクテルか何かを舐めながら前を行つたり來たりする女給をぢいつと貪り眺めてゐるのが溜だつた。誰に戀して來てゐるのでもない、また餘計な言葉を使ふでもない女給たちは毎日のやうに青年の顔を見てゐるが、未だ名前すら知らないやうな有様だつた。所がある日、この變つたお客さんの女から見れば世にも奇怪なる行爲を年かさの女給が発見して

了つたのである。

そこは普通の女とは違ふ、その女給はハタと膝を打つてすか／＼と青年のテーブルに近寄つたものである。

「あんた！見つともないからお止しなさいよ」

なんといふ勇敢な女給であらう。叱りつけるやうにさういふと、男は青白い眼を上げて

「エッへ、、、」

と底氣味悪い笑ひを洩らした青年のさうした。行動はその後もしばらく續いたが、やがて姿を見せなくなつた。今頃は松澤病院にでも行つてゐるであらう。

次はB——カフェーに起つた話

「あなた、見られて」「え、いやアね」「何處の奴でせう」「今夜もゐるらしいわ」……女給たちが寄ると觸るとそんな話をしてゐた。前日から女給部屋の便所をのぞく者があるといふので、流石の女猛者連も怖氣ついてゐるのだつた。

風のやうに現はれて、秘密を楽しんで、風のやうに去る、犯人はなか／＼捕らなかつたが、

去年の暮、例によつて汲取口に頭を突ツ込んで盛んに享樂してゐる所を、たうとう引きずり出されて了つた。

警官やコツク達に小突き廻されながら、痴漢はエヘラ／＼笑つていつた。

「旦那方もやつて御覽なさい。活動を見るよりや餘ッ程面白うがすぜ。……ちつたア、いぶきはかぶりやすが、面白さに一度やつたらやめられませんか」

彼の告白はこれ以上に書くことを許されない。彼が一年間に亘つてのぞいた約五十人の若い女性の秘密、銀座ガールの裏面は一冊の書物になるだけの價値と興味と量がある。明るい食堂で孔雀のやうに振舞つて男性を悩亂せしめる彼女達も、その甚だ不潔なる猥漢、換言して穢漢の前には一分も頭を上げることが出来ないのである。

性的魅力を看板にして異常に發達して來カフェーには前にのべたやうな病的な事件がさらにある。青白い眼の青年のやうに女給環視の中で直接行動に及ばなくとも、カフェーの戀を漁る者は知らず／＼の中に變態的な満足を感じるやうになり、女給にも谷崎潤一郎のナオミ流になるものが多いらしい。

既に話は街頭からカフェーに入り、女給に及んだ。銀座のカフェーの最近の病勢をもう少しとつくりと診察してみるのも、悪くはあるまい。

薄暗いカフェー

鼻毛を読むに不便だらうに近頃出来る新しいカフェーにはいやに電燈料を節約したしみつたれたのが多い。

早晩または黄昏の落ちついた感じを出した照明なら野暮な筆者と雖も決して文句はつけないが、薄暗いのが流行だからといつて無茶に小さい電燈をつけられたのでは、まるで共同便所が刑務所の廊下のやうでどうにも我慢がならぬ。

それは筆畧のやうな聖人君子の仰有ることで、銀座をほつつき廻る人種にはこの薄暗いカフェーも満更捨てたものではないのである。捨てるどころか大いに珍重してゐる向もあるのだから、世間は廣い。

艶めく春の宵、細目にたいたガストロブが馬鹿にきいて酒場は温氣にむし返るやうだ、血

のやうに赤いカクテルがある、猥雑な芳香を放つチースがある、一間のソファに男、女、男女、男——八人も男女が目白押しに腰かけて軽く酔つてゐる。女の呼吸が男の頬にかゝる、擦り合ふ肩先は汗ばんでゐよう。……

それで三尺もさだかならぬほど薄暗いのである。實際問題として隣の男の指が何處にどう紛れ込んでゐるか分らんとしたたら、銀座病患者でなくとも人間叛逆氣を起してつひ入つて見る氣になる。この不景氣に薄暗いカフェーの繁昌してゐる所以である。

風壞問題で營業停止を喰つたことのあるバツカスや、話が早いと噂されるモミチなどの景氣がいゝのでも分る通り、一體カフェーだのバーだのは風紀がいゝとほめられるよりも悪いと評判される方が得らしい。そしてバツカスもモミチも貧弱な照明で薄暗いのだから世話はない。人間何事かを悪作をせんとする時には暗黒を欲する。これは人情だ。泥棒だつて晝間の仕事はやりにくい。娼婦だつて電燈を消したがる。上品向きの金のかゝつた間接照明でなく、たゞ徒らに暗くしたカフェーの多くなつたのも或はこの人情の弱點をつかんだものかも知れない。將來の銀座は大劇場と百貨店を背景にした飲食店中心の歡樂郷になるのではないかと思はれ

るほどに、カフェー、バー、喫茶店、お手輕料理などがどしどしと殖へてゆく。三日見ぬ間の櫻かなといふが、近頃は三日見ぬ間の銀座かなで、餘程の銀座通でも思はぬ所と思はぬ新店を發見して驚くほどだ。

だが何れもどんぐりの背くらべで、これはと思ふやうな變つた店が現はれない。大きい小さいか、給仕女が美しいか醜いかぐらゐの差で味もそつけない店ばかりである。飲食店中心の新銀座を作るつもりならつても、何とか頭のいゝ所を出して貰ひたいと希望するのは強ち筆者ばかりではあるまい——。

ストリートガール

さて、話を再び街頭に戻して頻りに噂されてゐるストリートガールに及ぼう。銀座に街頭嬢——(日本風にいへば辻君でござる)が現はれると噂され出したのは去年の春頃、所謂モダンガール問題の一番やかましかつた頃のことである。

好き者連は我こそ色男を氣取つて、初物食ひ、まつた初物食はれに出かけたものだつたが、

案内それらしいのにつつつからず、歩き損のくたびれ儲けに終つたものが多いらしかつた。これは街頭嬢に遠逝しなかつたのでなく、相手にされなかつたのである。そして惜むらくはあぶれた彼等は街頭嬢を看破する秘訣を心得てゐなかつたのである。

此處で街頭嬢と非街頭嬢を見分ける秘訣を公開したいが、之は尙研究中に屬するから滅多なこと公開出来ぬ。たゞ、時間は夜の十時人の出盛りの過ぎた頃がよく、彼女たちの服装は去年の秋を一轉機として和装が多くなつてをり、故なくして接觸する女が大抵さうであることだけをちよつぱりと洩して置かう。

この街頭嬢の多くは純然たる商賣人多く、筆者の経験したる約十名の婦人の境遇を聞くに、(勿論眞偽のほどは分らぬが)横濱のチャブ屋上りが三人、玉の井からのロケーションが二人踊り子二人、その他で咬へ込まれ先は上野と浅草と新宿の安宿屋、芝口あたりがよからうといつたら警戒嚴重で怖いといつて居つた。價は宿賃こつちもちで五圓から十圓――。

斷つて置くまでもないが、銀座通りに出るからといつて、なアに普通の女と變つた所がありませんでしたよ。

札つきの女給や、街頭嬢や、不良モガの外に、銀座には變則な戀をあさつてをる婦人の群がある。何處の奥様か知らない、脂ののりのいゝ美貌の年増で、しかも金があるのだから、男の側からいつたら至極格好な相手ではある。

名も明かさず、散々に享樂出來て、それでお小遣ひになるとなつたら男性の尊嚴なんか屁のやうなものだ。銀座で何が面白いといつて、この氣紛れの戀をあさる年増女を探しあてるほど面白いことはない。カフェーにチップ五十錢の陶酔を追ひ、街頭に笑婦をあさる暇があつたら水もしたゝる大丸鬚の伏目勝ちなる氣紛れ奥様に色目を使ふべしだ。

以下その事實物語りを二つほど紹介する。

A の 話

銀座の百貨店の食堂で、Aは飯を食つてゐた。と、Aの向側のテーブルへ、年の項二十七八の素晴らしく美しい奥様風の婦人がやつて來た。ぱちりと張り切つた黒い目、肩の附け根から鼻へかけての立體的な線、そして襟足の白さ、胸のふくらんだ工合、總てが爛熟した女性の美

しさをだつた。

婦人は給仕女におしるこを運ばせて、しとやかにそれを啜つた後、ハンケチで唇を拭ふ拍子に、ふとAの顔を見た。

ほかんと、婦人の顔に見惚れてゐたAは、慌てゝ目を外らしながら、テレかくしにポケットから、エヤーシップを一本つまみ出した。マツチを探してゐると、件の婦人が

「あのう、失禮でございますが、マツチでしたら、こゝにございますが——」といふのである。

Aは自分でも顔が眞赤になつたのが分かつた。そして婦人の差出す贅澤なマツチを擦つてエヤーシップに火をつけると、だらしなくどもりながら何やらお禮を云つて、そゝくさそこを出て行つた。

「なんて美しい女だらう。妾でもないとする、どこかの奥さんなんだな。それにしても何だつて見も知らぬ俺みたい男に、あんな好意を見せたんだらう」

Aは首をひねりながら、人混みの中を暫らく歩いて居たが、何時の間にか女のこととは忘れてしまつて、三四十分経つた後には、ある小さな貴金屬類を飾つた陳列棚を覗き込んでゐた。

と、ぶんといゝ香水の匂ひがして、横手に一人の、女が寄つてきた氣配がする。

何気なしにその顔を見ると、これはしたり先刻の貴婦人だ。Aは帽子を脱つてびよこんとお辭儀をした。

「あら、先刻はどうも失禮いたしました」

婦人は愛想よくさう云つてニツコリ、綺麗な齒並を見せて笑つた。

それから二時間ばかり経つて後、Aとその貴婦人とは、ある場末の待合の離れ座敷に、ちやぶ臺を挟んで座つてゐた。

「どうしてつれて来たつて、そんなこと聞きつこなしにしませうよ。たゞあたしは、あなたのやうな、活潑な若い人が好きなのよ、心配しなくつても大丈夫よ。あたし決して怪しいもんぢやアないんですから、それだけは安心して、下さいね」

それ以上、婦人は何も語らなかつた。彼女の身分も姓名も。けれども素寒貧の書生であるAから金なんか絞らうとする女でないことは、明かだつた。で、Aも冒険心に驅られて、その夜はその待合で、其婦人と息づまる様な、歡樂の一夜を送つた。

夜が明けると婦人はAにさゝやいた。

「あなたは、けふ學校へ行くんですよ、あたしはけふもすつとこゝに居りますから、學校が退けたらすぐにいらしてね」

その夜も、その翌日も、前後一週間といふもの、二人はその待合で暮らしたが、一週間の夕方に、學校から待合へ歸つて来たAは、その女將から一通の手紙を渡された。

Aは急いで封を切つて見るとさらさらと達筆な女文字で次のやうに書いてある。

あなたはさぞ妾を莫運ものと思召すでせうが、そんなでもないのですよ。女の氣まぐれなんでものは、貴郎のやうなお坊ちゃんにはわからないだわ。同封五十圓、お小遣ひにでもお使ひなさい。それからこゝの家の勘定は全部済ませておきましたから御心配なく。

名も云はぬ女より

名も知らぬ殿方へ

そして十圓札が五枚同封してあつた。

Aは狐につままれたやうに、一瞬間ほかんとしてゐたが、やがてその待合を出ると、魂の抜

けた者のやうな足取りでふらふら歩きながら、何時までも「女の氣まぐれ」といふことを不思議がつてゐた。

Aとその婦人との關係はそれで打切られたが、Aは長い間、その婦人の白く魔物のやうにうねる腹を忘れることが出来なかつた。

B の 話

新宿から築地へ行く電車が半路で停まつたとき、目の縁を黒くぼかした外人の様な婦人が一人乗つて来た。若い新しい婦人に特有の智的な眼眸で、素ばしこく車内を見廻した後、ふと彼女の目の前に腰をかけてゐるBの顔を見ると、何故か、しげしげと暫らく視線をBに注いだ電車が櫻田門附近を行く頃、長い瞼毛の底にメー・マレーのやうな色ッぽい女の目を全身に感じてへどもどした。

「別に見覺へのない顔だが、どうもおかしなをぶりだナ」とは思つたが、銀座裏のある商事會社に勤めてゐたBは、とにかく數寄屋橋で電車を降りて、會社の方へ行かうと電車道をよこぎ

ると、後から女の聲がする。

「あの、ちよつと待つて下さらない？」

振りかへると先刻の女が急ぎ足に追すがつてくる。緋の蹴出しをフェルトの草履で蹴りながら――。

「僕ですか」

「ええ、さうですの」

「何か御用事でせうか」

「ええ――あの――」

「？」

「ちよいと口では申上げ難うございますから、名刺に、書きますわ」

さう云ふと婦人はくるりと後向きになつて、名刺入れから名刺を一枚出し、細い万年筆で何やらコン／＼書いた後

「これを、御覽下さいまし」と名刺をBに渡したかと思ふと、ひらりと身を翻して、停留場の

人混みの中へ、姿をかくしてしまつた。

Bは呆氣に取られながら、渡された名刺を見ると――

「お差支へなかつたら、今夜九時に丸の内〇〇ホテルの支關へお姿を見せて下さいまし」
好奇心にかられてBは、其夜〇〇ホテルを訪れると、扉の側に晝間の婦人が立つてゐた。

「よくいらつしたわね。さあ、あちらにお室が取つてありますから参りませう」

Bは婦人に案内されて一室に通された。

「若しかすると、いらつしやらないかと思つて、心配してをりましたわ。でも、びつくりなすつたでせう」

「ええ」

婦人はベルを鳴らしてボーイを呼び Cocktail や果物を運ばせてBに勧めながら

「お呼び立てして失禮でございましたが、實は少々無理なお願ひがございまして――」
と一寸ためらつた嬌態をして

「これはお怒りになつては困りますよ、もう耻も何もぶちまけて申しあげるのですから」と云

つて語り出した。

それによると、婦人にもはや夫もある身なのだが、昔、娘時代に戀した男があつた。その男はまだ二十三にしかならないのに病氣で死んでしまひ、婦人は問々の情を押へて今の夫に嫁したのだが、けふゆくりなくも電車の中で出會したのは、死んだ戀人をつくりだつたので、實は驚いたのだといふ。

「で、大變妙なお願ひですけれど、毎週金曜日にこのホテルで會つて戴きたいのでございますが——」

「いや、それはどうも、飛んだことになつたもんですね」

こんな鹽梅でBとその婦人とは、金曜日毎にこのホテルに落合つて、一夜を共にするのだつた。Bにとつては世の中に金曜日ほど嬉しいものはなかつた。婦人は何時も氣前よくホテルの勘定を持つてくれたばかりか、毎週二十圓三十圓とお小遣にと云つて金をくれるのだつた。

が、半年ばかり経つたある金曜日の晩婦人は何時になく沈んだ顔をして、〇〇ホテルの一室に、Bと相對してゐた。

「ね、そんな工合でこの上御交際をつゞけて行くといふことは、お互ひの身に取つて危険なのです。その中また御縁があつたらおひひすることに、今度はこれきりで當分お別れしやうぢやありませんか」

女の目には涙が光つてゐた。

「嫌だなあ」

「だめよ。そんな悲しい顔をして、あたしを弱らせるもんぢやあないわ」

「ぢやあ、いゝから奥さんの名前だけ聞かして下さいよ、名前はお互ひに言はない約束でかうなつたのですけれどせめて別れのしるしに聞かせて下さつたつていゝでせう」

「それも今さら、云はない方が花よ」

二人はぼろ／＼涙を流し、暫らく泣いてゐたが、たうとう諦めて別れてしまつた。

よほど財産家の奥様だつたか役人とすれば局長、課長級の人の夫人だつたらうと、Bはくても思つてゐる。

ステツキガール

ステツキガールが銀座に現はれた。

ステツキガールとはモダン兄さんの新居格君の命名と承つてゐるが、筆者不幸にして未だ實地経験の光榮に浴さないから、茲では友人のKの受賣りをして置く。

「あい、昨夜ステツキガールに會つたぜ」

「フーン、此間新聞に出てゐた散歩同伴派出婦人とかいふ、つまり菊池寛の文筆派出婦人の模倣なんだらう」

「ありやフレンド社とか言ふのだが何でも許可にならなかつたさうだ、それよりもつと本物に打突つたのさ」

「へー、何處だね」

「いや、そりや天機洩らす可からずだ」

「チエツ、いやに焦らしやあがるな」

「何しろ走りなんだ、初物は七十五日壽命が延びるつてんだから、迂濶には洩らせないよ——とに角、銀座の尾張町を距る事三丁以内の圈内の某ビルディングの四階に、そのつまりステツキガール・ステーションなるものがあるんだ、そこへ行けば、どんなのでも選り取りお好み次第つて寸法さ」

「へー、さうかい、そいつあは素敵だな」

「まあ、さう血相變へるない（こゝでKは脂下つてニヤリと笑つた）そこには令嬢風、下町娘風、將又飛切りのモガ、或は粹作り等千差萬態ズラリと紅紫取々に商品が陳列してあるんだ、が、その中にも又種類があつて、観劇用とか、ドライブ用とか、音楽會用とか、單なる散歩用とか、又は戀人代用てな風に性格や趣味嗜好によつて分けてあるんだ、ウツフ、」

「して、料金は？」

「料金は自動車と同じさ、時間制と區間制がある。時間制は一時間二圓位だか半日か一日となれば割引になる、區間制と言ふ奴はつまり京橋から尾張町、尾張町から新橋まで幾らと言ふ式で、こいつは安値だよ、つまりチヨンの間だな、しかし、何れにしろ、自動車賃とか晚餐代コ

「ヒー代芝居活動の入場料等は勿論、行の負擔なんだぜ、その上時間が来たからつてまさか定めの料金はやれないから、チツブの幾らかは奮發まなくつてならない」

「フーン、處で夜は何時までだへ？」

「おいでなすつたね、夜は十一時迄の規定だが、そこんところは、そのウ、裏に裏ありでなア……」

「ほう面白いな、ぢや客との交渉だつて限度はない譯だな」

「いやある、握手、接吻までは許されてゐるが、それ以上は規定で嚴重に制限されてゐる、がそれが矢つ張り、さうは行かんのさ、何しろお互ひに人間だからな、そこんところがつまりステッキガールの最も興味をそゝる所さ！」

「ヒヤア、そいつは面白い、教へろよ、教へろよ」

「いや駄目だ、今の處嚴重な會員制度になつてゐて、會員三人以上の紹介がなければ入れないのだ、仕方がない、まあ諦めろよ」

「チエツ！」

「——てな鹽梅で、Bの奴意地悪くどうしても教へて呉れやがらねえ。誠に讀者諸君にも相済まぬ次第だが、不悪——」

藝妓コンニヤク談義

「藝妓蒔蕪談義」といつても、逸まつて下さるな何も藝妓諸嬢が蒔蕪の如きものであると云ふつもりは毛頭ない、いや〜、何かの砂拂ひをするから、藝妓は蒔蕪だらうつて？、飛んでもない、左様に深長な意味を有つて標題としたのでは御座らぬ、要するに蒔蕪は今昔をもちつただけ、こんにやく情を持ち込まれては、こつちがぶる〜いたす。

藝妓鑿殺事件

一夜にして一萬の藝妓が殺されたんだ、その翌日東京全部の騒ぎと來たら大したもの、彼女らの父や母、或は、何れは娘の爲めに左團扇や右扇で居られた連中は泣いたり、吠えたり喚いたり、それと一緒に彼女らの抱主は、正に大事な玉を臺なしにした損徳勘定から、わつしよいわつしよと、まだそれでも人間の胸慾さ、諦め切れずに萬一を頼みとして探し廻つたが、市民

が曉の夢を破つた新聞の號外の報道に誤りはなく、午前九時警視廳發表として出された第三號外には、全市、各花柳街別藝妓家別にした名前がちゃんと載せてゐる、それが恨みつこなしに一人残らず殺されてしまつてゐるんだから、泣いても笑つても及ばない。一かうとなると諦めも亦早いよ

「何うして呉れるね、あの妓のはまだ三千圓のうち、いくらも稼いでゐないんだが——」

「だつて、今がいまそんな事を仰有られても返答の致しやうがないぢや御座いませんか、娘の死骸も見當らぬうちにそりや餘り酷なお言葉ぢや御座いませんか」

「だつて、かうなつたら、過ぎ去つた事は何うもなりやしませんよ、あとの事、あとの借金の方を何とかして貰ひませう」

こんな問答が隨所に起つて來る。涙と金と、金と涙との押問答に火花は散つては消える、そのうち荒つぽいのは

「何言ひやがるんだいこの胸慾め、金どころの騒ぎかい、娘を元通りにして返しやがれ」といふやうなものも出來てくる。うわう、ぢやん〜やつてゐる最中に

殺サレタル娘ノ生命ハソノ親權者ノ損失トシ、貸シタル金錢ハ、抱主ノ損失トスベシといふ御布令が出たので、藝妓家といふ藝妓家は總て破産し、東京全市一時に粹な貸家が三千軒出來た。

藝妓撲滅祝賀會

この大騒ぎの翌日婦人矯風會が發企となりて「藝妓撲滅祝賀會」といふのを日比谷で開催しその夜は提灯行列でえらい景氣をつけた。その行列が鳥森から新橋へ抜ける時に、捻り鉢巻に白襟、まさに決死の勇を揮つた箱屋と幫間の一隊が、祝賀とは何事ぞと叫んで、各々最良になつた姐さん達の三味線を大上段にふりかぶり、行列の眞只中に突貫して、縦横無盡に暴ばれ廻り遂に流血の慘事を惹き起したが騎馬巡査の出勤でやつとその場は納まつた、だが、又もや行列の中央部隊が日本橋に差蒐つた折しもあれ、何處より現はれたか、お座敷着に姿を包んだ覆面の一行が突如出現して突き當るを幸ひ、藝者の脂粉の香いまださめやられぬ其お座敷着を提灯行列の人々の頭から打ちかぶせ目もあやな伊達巻でぐるぐる巻にして、さんぶくとばかり

橋の上から川へ放り込んでしまつた。

更に解散地たる上野公園に、行列の先登が到着する刹那、三味線糸を繋ぎ合せたる太繩を以て、數ヶ所にワナを設けて待ち伏せしたる一隊があつた、このワナの爲めに、祝賀に有頂天になつて足許のふらついでゐた連中、ぱつと打ち倒され、或はおでこをすりむき、或は鼻の先、頬の先などに砂をちりばめる者あり、膝小僧から血を出して泣き叫ぶ者その數を知らず赤十字救護班の急出動を以て、應急手当を施すと共に、犯人捜査のため全市の警察は非常線を張つたが、日本橋の上野のも遂に何者の仕業か分らず了ひになつた。

國を擧げて輿論囂々、物情實に騒然、種々なる運動種々なる言論は闘はされたが、そんな事には關係のないやうに、古道具屋の店頭は何處もお拂ひものの三味線で山を築き、柳原河岸は藝者の衣裳で一杯になつてしまつた、これを見込んで又早い奴があつたもの――

女給の俄藝妓

早いといふのは他でもない、銀座の或カフェーの主人公、柳原河岸へ飛んで行つて、哀れ古

着として吊しん坊の愛目を見てゐた藝者のお座敷着を、目星い處數百點買占めてしまつた、そしてこれを自分の店の女給に着せたものだ、勿論何々デーのお揃ひとはちがふ、ロハでお仕着せをする筈はない、随分割高に賣り附けたといふ話である。

かうして、そのカフェエはげげしいモダンタイプから一夜にして女給の藝者化となつた、忽ち大した評判、それ行けやれ行けで、珍らしもの好きの銀座マンが、押し寄せる事雲霞の如く、行列作つて、テーブルのあくのを待つ爲めに、交通整理の特別班が出動するといふ有様だが、如何せん、姿變れば風變る、いままでのハーちゃん、シーちゃん上りだよ、それ生、それが、カッ、テキー丁——といふやうな急調子に行かなくなつたといふのは女給さんお引きづりのお座敷着だ、襖をとつての上り下りだから、これ迄のやうなマラソン歩調に參らぬ、そりりとやつてゐるうちに、いつか気分まで和いで来て「アラーおいでない」ボンと肩を叩いてギューと手を握つてチップ頂戴といふやうな早業が出来なくなつてしまつた、自然「今晚アラー」とテーブルに三ツ指をついてから偕て——と來ると客の方も遂ひ釣り込まれて、どつかり据ゑた腰がなかく上りさうもない、チビリくとビールを日本酒に見立て、いゝ氣持ちになつ

てゐる、女給さん受持ちのテーブルを飛び廻らうとすると「オイ後口なら斷れ」
そして結局のところ、藝者と思ひ込んでしまつたからは、一兩二兩の小使をやるわけにも行かず、チップといふも氣分が壞される、とゞの詰りは一文も置かず玉祝儀なしで藝者買ひしたやうな至極いゝ氣持ちでアバヨだ、代りまして順々に、みんなこの調子代り榮のせぬ事夥しい折角の名案は、遂に女給から大反對を起され、主人は泣きツ面で藝者の衣裳を再ぶ柳原へ買戻しの交渉をしたが、柳原の方ではそれを拒絶した爲め、茲に問題がやゝこしくなり結局裁判沙汰になつた。

猫の繁殖

かうした藝妓撲滅はひとり東京だけでなしに、全國的になつて随分ふんだんの悲喜劇が醸された。まづ三味線屋さんは全滅となる、いかにその大部分が不見轉業のやうになつた現在の藝妓でも、さのさや都々逸の撥ぐらゐはかき廻すことが出来、商賣上の表看板をまさか標紙と花柳病豫防具で押通す譯にも行かぬから、やはり弾けても弾けなくても、三味線をかつき込ん

でゐた、その三味線が不要のものとなつて古道具屋の厄介ものとなり、従つて値段も一東三文となつた三味線屋さんはみな商賣替へ。

そこで自然に、猫の皮が不必要となつて、いやはや、この二三年間に猫の殖えた事全國でざつと六千二百萬疋、こいつが鼠取りを盛んにやる、その結果は毎年莫大もない費用をかけてゐた鼠取りデーの必要がなくなりベストは絶対に安全となつた、が然し、自然といふものは微妙な作用をするもので、餘りに猫が殖えた爲めに、鼠といふものは参考のため動物園に飼はれるやうになつたが、今度は猫のやつ、いままでのやうに重寶がられなくなつた、といふのは取るべき鼠が一疋も居なくなつてしまつた以上、猫は食物を鼠以外に求めねばならず、茲に於て臺所の被害頻々たるものあり、猫の生産制限令でも出して、捕鼠の代りに捕猫でもやらなければならぬと氣運が動いて來た。

かうなると猫の皮を利用してもつと有効なる發明を誰がするか？世の發明家は猫の皮の利用方法研究を始め、或雜誌社では懸賞金十五萬圓を投じて「猫の皮利用方法」の募集を始めるに至つた、或人は、どうせ藝妓を撲滅した結果に起つた猫の問題だ、藝妓の祟りだらうから、お

ん厄拂ひませうで、猫の皮千枚を張り合せた世にも稀なる大三味線を作つて辨天様に奉納しやいとしたが、入れる場所がないので雨晒ししておいたところ夜なく怪聲を發して家鳴り震動し、浮説怪談が飛ぶため、遂にこれを焼き捨てしまつた。するとその煙りの中から藝妓風を装つた大猫が一疋現はれて、あれよく〜といふ間に天に上つた、いやはや藝妓を猫とはよく言つた。どちらもどちら執念深いもんぢやナーと語り草になつたのは、何でもいまから數百年の後の事だつた——

これぢや餘り脱線しすぎるかしら？

實は假にいま即座に東京から藝者といふ藝者を追ッ拂つたら何んな結果をまき起すたらう？追ッ拂つた、で感じが出ないなら、あすとは言はせず今夜のうちに、震災の時の瓢箪池のやうな工合に東京中の藝者をみな殺しにするんだ、——とまアこれが、あんまり閑すぎる爲めにふつと浮んだ塗法もない空想なのである。

藝妓君の抗議

假りに空想が崇つて横濱の藝妓×君から飛んでもない抗議を頂戴した、彼女は小生が閉過ぎる退屈しのぎから、取り止めもない假定をした藝妓撲滅の愚談を、また御叮嚀に讀ませ給ふたもので、苟くも現代文化の指導となり、藝術家であるところの我々一族を、たとへ筆の上紙の上でなりと、侮辱したのは沙汰の限りだと、わざ／＼横濱から捨込んで来たものである、何と辯解してもいつかな諾を容れては呉れぬ、小生の研究室に頑張つたまま、藝妓撲滅なんかといふ危険思想をいまにして捨てざるに於ては、全國藝妓同盟の猛運動を起し、國法の制定を促して、斯かる悪思想の取締方を請願すると、かう彼女はまくし立てまくし立て口角泡を飛ばして、いまにも小生の横びんに、その織手が飛びさうな勢ひである。

段々と拜職してゐるうちに、たとへ「假りに」であつたところが、なるほど「假りに」でも一時でも、出来心でも、斯かる考へを起したのは重々小生がよくないとしても、抗議の仕方と反駁の勢ひが餘り猛烈過ぎる、そこで

「君は大分きこいめして御座るね」

と彼女の舌鋒を他の方に向けやうとしたら

「へんお氣の毒さま、酔ふてくだ巻くやうなお姐さんと、お姐さんがちがひますよ、見損つて下さるな」

と柳眉を更に一段吊り上げたかと思ふと、うーんと椅子の上にあつた倒れてしまつた、そして、ふう／＼いふ息の下から「先生、注射を、バントボン、早く、早く」と途切れ／＼だ、僕は商賣柄、これで萬事了解、即ちバントボンスコボラミンを一筒うつてやる。

彼女の名前はお預かりとしていま横濱で羽振りのよい姐さんである彼女は、もと東京の柳橋に出て踊りの名手として鳴らしたものである、それを引かして家を持たせたのは、いまは故人となつた鐵道省の某大官だつた山縣公のそれ、伊藤公のそれ、桂公に於けるお鯉、數へ立てれば際限もない藝妓と政界諸名士の濡れごと、日本の政治が待合から生れると言はれた時代、いや現に東京疑獄がいゝ見本、これも下谷の梶田家、新梶田はじめ、策源地はみな待合であり、待合であれば必ず藝妓がある、お鯉がその美貌と才氣は、或點まで桂公の政治的生涯を動かし

たやうに、このバントボン中毒の彼女も、かの鐵道省の某大官を左右した、彼女としては過去の全盛時代、その手には五千圓のダイヤの指輪が光つた、これが前後四年に亘る彼女の玉の輿時代であつた。

彼女の浮氣物語

ところが、藝妓といふもの元來浮氣稼業である。——と言つたらまた何處からか苦情を持ち込まれるか知れぬが、事實藝妓は浮氣なもの、これに抗議する資格のある者は先づ千に一位の割合であらう、お茶つびの赤襟時代から、彼女らは岡ぼれなるものを有たぬと氣が鬱ぐ性分を備へてゐる、このバントボン中毒の彼女も亦その御多分に洩れず、時めく鐵道省の大官に寵愛されてゐる間に、役者の下廻りとひよんなことが出来上つてしまつたものである。

藝者浮氣の原因は後に述べるとして、浮氣の見本のやうな彼女は、一方は某大官の御機嫌をとりながら、片方ではその役者の下廻りとトチ狂つてゐた、もちろん、この間の工合式は、彼女の殺さばきよりも鮮かに、舞の手よりも巧妙に、旦那いろを操つてゐた、その盡で行けば

或は彼女の黄金時代はもつと永く續いたのかも知れないが、どうも物事は左様にうまく參る事が少い。

たまく彼女の家に雇つてゐた下女が身體の工合が悪くなつた。その様子が普通名の知れた病氣とちがふので、よせばよかつたが彼女は素人考へから「何だか肺病のやうだから、家へ歸つてゆつくり療治を下さい」と歸したものである。ところが役割が草芝居式に揃つてゐるといふのはその下女の兄といふのが承知しない。

「何でい、俺の妹を肺病とは、ケチをつけやがつて……」と嘔鳴り込んで來たのが因縁の付け始め、さその下女から洩れた情夫引入れの一件を持ち出して、結局はこれも筋書通りに、彼女に二千圓といふ強請をもちかめたのだ。百や二百なら兎も角、二千圓と纏まつては何とも工面の仕様もない。値切りの相談は成立しない。

「へん、お氣の毒さまですがね、姐さん、あんたが出来ないといふなら仕方ありませんや、あの芝の旦那のところへ行つて頂く様にして頂戴いたしやせう」科白の尻はいつもこれだ、言までもなく情夫の一件を某大官に耳うちし、場合によつたらバツと世間の問題にしても二千圓

をせしめ様と掛つたものなのだ。

かうなると彼女も度胸を決めなければならぬ、二千圓が出来なければ、旦那との手はこの男のために切らねばならなくなる、かうなると女、落付いたら圖々しくなる——オツとまたその邊から文句が出さうだが、圖々しく落付くのが悪いといふのではない、こんな時は遠くも及ばぬ事、一そ圖々しいといはれるまで落ちついた方が勝ちだ、この戦法を、百も二百も彼女は承知してゐた、度胸定めた彼女はビタリと先手を打つて、急用がありますから、是非お越しを願ひます——と旦那である某大官を呼び寄せたものである。

先手を打つた彼女は、旦那である某大官の御來駕を御願して、さて

「旦那、誠に申譯も御座いせんが、實はあなたの御旅行中にふとした事から××といふ役者と懇になりまして、この上御厄介になつてゐましては、旦那の御顔を汚すことになりますからどうか御暇を戴かして下さいませ」と謝つてしまつた。

こう神妙に出られては地位あり名譽なる某大官、金ピカ服を着るお手前からでも、口惜し相な顔すら出来かねる、負惜しみにも残念さをチツと堪えて謝された罪は許さねばならぬ。

「さうお前から悪いと知つて謝られては、こちらは何も言ふまい、足掛け四年の間、よくこそ禿頭を世話して呉れた、それを感謝する、その下女の兄の無頼漢が何と言つて来やうとも、もう縁を切つた女、わしには關係はない——と突つばねてやるから安心するがよい」

といふやうなことで間男二件は落着、二千圓の強請をもちかけた下女の兄は結局一文にもならず、彼女は晴れて情夫と思ふ存分な快樂に耽ることが出来るといふ戀の幸運が巡つて来た。

だが然し、戀に生きるのが彼女の本願ではない、戀だの愛だのとたまに面倒な繩に縛られること、餘りに彼女の生活が奔放で自由である、彼女は要するに藝妓を代表する浮氣者である。

惚れた、はれた、好いたらしい位でその身の運命をさへ無視する大膽さに馴らされてゐるのでその役者には一時、裸になるまで注ぎ込んだが、いつか嫌氣がさしてあばよといふ事になつてしまつた。

その昔のお鯉、いまの安藤照子の「お鯉もの語り」を見ると彼女が桂公に仕へたのは、公の日常を慰めて、間接にお國のために奉ず、まことに以て健氣なる心持ちであつた、その筆法で行くと、彼女が鐵道省の某大官の妾として圍はれたのも、或は間接に盡忠報國の烈婦的態度で

あつたかも知れぬ、然し、この彼女はそんな考へを露ほども起した事はない、たゞ時めく大官の思はれ者として、その指に五千圓のダイヤの指輪が光り、その身が安逸であることを感謝したに過ぎない、誠に徹底した藝者氣質そのものであつた。

そして、その日／＼の出来心である浮氣を、この上もなく尊いものゝやうに思ひ込んでゐる彼女は、その當時まだ二十二三であつた、本質的には彼女の今日も、その後の彼女も、何の相違はなかつたのだが、浮氣の修業がまだ足らなかつた、だから哀れにも下廻りの役者一人のために旦那との手を切らねばならぬ破目に陥り、その男のために指に光つた五千圓のダイヤも行方不明となり、木の葉の落ちる秋の末に浴衣の重ね着で顛へなければならぬやうなへまをやつた、へまだ、ほんとうにへまなやり方だ、それから年月にすれば五六年であるが、いま、二十九歳になつた彼女は、そのへまさを獨り苦笑しながら、どうして、なか／＼に凄腕を揮つての御發展だ、そして

「ほんとうに、あんな男のどこが良くつて裸になるまで惚れたんだが、考へるとバカさ加減が分らなくなるわよ」

だと、あゝ藝妓のいろにはなる勿れ、なつてもよいから捨てられるな、別れた後はみなこの筆法でケナされる。

旦那と別れ、情夫と手を切つた後の彼女は、やはり藝妓は藝妓かなで、下谷にも出た、田舎にも落ちねばならなかつた、玉の輿から再び轉げ込んだ憂つとめの間に、彼女はいろの修練を積んだ、體驗は何ものにも優つて彼女を渾然たる代表的藝妓としたは勿論だが、それを助けた有力なものがこゝに一つある。

色道虎の巻

重井筒の文句に「楽しみなくては勤まらぬ」といふのがある、禿茶瓶の某大官よりは若い美男の役者の方が色道の三昧には遙に優つてゐる事疑ひない。彼女は勤めは勤め、旦那となれば遠慮もあり、窮屈さもある。その鬱血を若い情夫との人目を忍ぶ楽しみによつて慰めてゐた、それがバレてお拂箱となりその結果は情夫とも別れねばならぬことにもなつた、愛慾の葛藤の果てが、裸になり、獨りになつた苦い味、それが苦味丁幾のやうであれば少しは胃病に効もあ

らうが、彼女には何がなし熱湯を呷つたやうな苦しさばかりが感じられた、丁度此頃どこから手に入れたか、彼女は「花街風流解」といふ珍本を讀んだものである、これは昔の女郎教育の金科玉條とされたものであるが、當時の女郎といまの藝者と見立て直しをすると、その儘通用する面白い本だ。

「翠帳紅闌に枕をならぶる夜の夢にも、浮川竹のうきふしに情を商ふ遊女ほどいと哀れなるはなし、されどもその身のいたづらよりなれるは稀にして多くは父母のため或は夫の爲めに百年の身を僅かの黄金に幾瀬の汚名を忍び、一双の玉臂、萬客の枕をなせるはせん方もなき身の宿因といふべし」といふ書き出しから先づ勤めの辛氣さに同情してかゝつてゐる、藝妓といふもの、必ずしも臂を枕の仕事ばかりが商賣の本義でない事言ふまでもないが、それをやらねば身が立たぬのが多いのだから致し方ない、仕方がないが通例となつて、斯くも不見轉駄扈、淫賣藝妓萬能時代が現出するに至つたのだ。

いかさま、彼女も下つた目尻を釣り上げて

「先生、さうぢやありませんか、いまだきの客で、ほんとうに藝妓の藝を買つて下さる方があ

りますか、藝妓が淫賣するといふのは、畢竟男が悪いからでせう、誰が好き好んで淫賣をする女がありますかい」

憤慨するが、さう申されると、男子專制に馴らされた世界、女の悪いところは、或は總て男が負擔せねばならぬ債務かも知れぬ、然し、さう考へてしまつたのでは、面黒くない、小生はいま藝妓浮氣の研究をしてゐるんだつた。

「傾城に誠ありとは誰が言ふた、金もて来いが誠の戀」といふ言葉がある、この文句の傾城といふ文字を藝者と代へても、別段に無理でもあるまい、一千九歳になつていよく浮氣の本性を現はし來つた彼女が、愛唱おく能はざる「花街風流解」には「傾城にまことなしといへども實なきこそまことなれ」と云つてゐる、これも傾城を藝妓と代へて、いまだきの藝者、千萬人に情を商ふその片つ端から、ひとり／＼に實を盡したんでは、實が實にならなくなる。

「ネーさうぢやありませんか、先生！」

彼女が得意になるのはこの邊のことなのである。

なにも藝者の總てが、手管手練の虚偽ばかりでもないのだが客といふ唐變木は遂に阿呆な代

物だ、空言と知りつゝその空言を求めたがる、藝者は藝の商賣人——左様神聖視する人々は別問題として、藝者は情の賣人客はその買人といふことは知り抜いてゐながらも、藝者いかに浮氣の修練を積んだとて、やはり女、千萬人に賣る情の中には、一つの實がある筈、その一つを買ひたいものとの野望を抱くからこそ、裸で跣足で通ふやうにもなる、まるで富籤を買ふやうなもの、當つたらこれ以上のまぐれはないのだが、商賣となれば賣口上も進歩する「お前さんばかりにやたんとく」てな據ろない空言を聞くが否や、エヘンと咳拂ひして、早くも他人は客、自分は間夫、どんなもんぢやといふ面構えになるから事は往々に間違ひを惹き起す。

「花街風流解」の著者は、これをいかにといふに、男女に限らず、美醜によらず、自惚といふものよりしてはまる事也、第一男自惚の自惚、金持の自惚、粹がりの自惚、深切顔の自惚、身柄身分の自惚、切れ自惚の自惚、みな自惚がする所業だと言つてゐる。

「先生、妾やこの自惚心理の研究をしましたの、偉いでせう、藝者だつて女ですもの、男に惚ぬ筈はありませんさ、然し男といふものはこつちの惚れぬ先に我身に我身に惚れ込んでサアこゝろといふやうな仕向けるから嫌になるのさ、だけどね嫌だと見せては商賣になりませ

んや、藝者が利用するのはこの弱點でせう、こゝへ突つ込んで行くんです、いかにも筈まつたやうな顔をしてね」

「まアこゝを讀んで御覽なさいよ、あの當時これを讀んだ時はバカなやうだが初めて、ア、さうかなアと思ひましたよ」

こう言つて彼女が開いたところにはこう書いてある。

「物體客といふもの、粹も不粹も老若にかゝはらず十人に九人までは助平の甚太郎と知るべしその證據は青樓に来て女郎買するといふものは、まだ嫁のない青二才といふか、又は若手代、或はおもてむき女房ぜんさくの出来ぬ入道か隠居か、畢竟内證の遊さん場所にて、煩惱晴らしに来るところなり、扱また女房子供のあるものが、稀らしからぬ女郎買するも、いづれみなみな助平の甚太郎ならでは来ぬはづその助平や甚太郎を相手にする商賣なれば、床おしみしたり不動をするときは、たとへいか程美しい玉女郎でも次第に寂しうなるは知れた事」

「だがね君、これは女郎の事だらう、君等のやうな藝妓は、左様一概に言ふ譯にも行かねぢやないか、ピンからキリまで、藝妓買は女郎買と同様とは、いくら何でも申されまい」——と言

と彼女の言ふことがいゝ「そりやねえ先生、先生は或はさうでせうさ、そんな方も一割五分や二割位はあるかも知れませんがねそれだつて、若し御意に召したのがあつたら、やつぱり結果は同じ事ぢやありませんか、だから、客は助平——こう思ふことが當世の藝者のイの一番に頭に入れておかなければならない事なのよ」

戀愛の無政府主義者

なるほど、さう言はれれば左様なものかも知れぬ、僕の友人の或俳優が、随分遊びもやつただが、堅くいましめて藝者といふことはせぬ事に決めてゐた。彼に言はせると、役者といふやうな人氣商賣の者がひとりの藝者とあつくなつたと知れたら、他の藝者たちの人氣がおちる、彼はいかに酔つ拂つても、遅くなつても、待合泊りをやつた事がなかつた、假りに役者であり、殊に美貌の評判の彼に、憎た藝者はふんだんにあつた、然し一度も濡れ事を聞いた事が無い、誠に綺麗なる遊びをする役者だ、感心なものだと云はれたが、僥々或晩一所に赤坂へ行つた折、といふ藝者に彼の方からぞつこん参つてしまつた、そしてこれまでの禁を破つて「彼

妓を何うにかして呉れ」といふ御執心、まさにいかなるお客も助平なりの原理を事實にした譯だ。

そのTといふ藝者、野暮天の小生とはお座敷でたゞ二三度の顔馴染といふだけ、彼の俳優が御執心の趣きをお傳へするだけなら何の事はないが、或ことをウンと承知させるだけの自信はない、だが、止せばよいのに年甲斐もなく小生の茶目氣分が躍り出して來た、といふのは、Tは赤坂で指折の藝者、かれは子守ッ兒まで名を知つてゐる役者である、繼ぎ合せて見たら、何かまた面白い場面も見られようかと、そのT子とは親子のやうにしてゐる醫師のあるのを幸ひに、それに頼んで役者が御熱心のほどをTに通ずるやうにバカな親切ぶりを見せたものだ。

この間二三日経過、そして或夜その返事が是非か他人のことを氣に惱んで行つて見ると、駄目です——と來た。

「他ならぬお父さんのお頼みだから承知しなければ悪いのですが、あなたも人が悪い、妾の身の上は千萬御承知ぢやありませんか」

その身の上話といふのはね——

こう友人の醫師のいふことにはTには末を約束した一人の男がある、Tはその頃二十一、男はまだ二十四歳、そしてある大學に入つて勉強してゐた、その男の學資や總てを貢いで、行末の楽しみに勤めの憂さを晴らしてゐる彼女であつた。

「その役者ばかりといふんぢやない、いついかなる場合、どんな人の言ふ事も諾かぬ女なんだ折角だが悪しからず」

悪しからずどころか、いまだき感心な藝者と引下るよりほかない。

藝者浮氣の飛ばつちりが、飛んだ硬い藝者の話になつてしまつたが、堅いと言はれ、粹と呼ばれ、通と名をつけられるお客ですら、この談義の今までの主人公、二十九歳の浮氣藝者にかゝつては、一律一體に助平にされ、甚太郎と見られる一つの實例を擧げたに過ぎぬ。

「そうれ御覽なさい、男を片ツ端から腎助野郎と思ひ込んで了つた妾の方が目が高いでせう、男をだますなんて屁の河童よ、先生だつて、これからだまさうと思へば屹度口説き落して見せるわ、でもよすわ、今は廻しのとれ切れないほどベケスを澤山持つてゐるから」

いやこの徹底したる戀愛の無政府主義者にはかなはない、際どいところで、あくどいのろけ

だ、それにしても、これまでに彼女を教育した「花街風流解」には何と書いてある、一つ諸君と共にそれを讀んで味ふ。

「花街風流解」

初會の傳

初めての客の座敷へ出る時は、若し大勢連中あつていまだどの客人に出るといふ事のわからぬときはともかく、すでにわが客と定まる上は其人の傍を離れざる様手水などに立たれる時は勿論付いて行べきなり、但し此連中幾人あらうとも悉くその顔に目印して覚えてゐるやうにすべし、これは後に他の家にて、えて此連中が呼出すことあるものなり、たとへその時の客で、再び線香に行かずとも、うか／＼此連中に出るときは後で笑ひを受くる事あるべし。

さて聞中の挨拶、それ／＼の客どりにて用捨あるべし、然し最初より、あまり馴れ／＼しくはべつたり過ぎて悪く、また一向よりつきあしきも悪く、たゞ工合よく客の立居に氣をつけ、

随分と粗相のなきやうしめやかに語らふべし。たとへ客はたはひもなく寝るとも、其身は決して寝るものにあらず、心も知らざるうち、我を忘れて寝るときは、どのやうな異粹をせられんとも計り難く、又あしき評判が直に廻るものなれば初めての夜は別して寝ることを慎むべし。客と別るゝ時は、又いつ〜といふこと堅く話しすべし、その時、客は多くちやらつきて去るものなり、されどそれを誠に受けし顔して別るべし、しみじみと顔をながめ、しばらく後姿を見送つてゐるなど極上の手、客は四五間、或は十間も行くと必ず後を見返るもの、此時ちよつと手招きなどすれば、ぐにやりと参ること必定、これ秘術の發端と知るべし。これは初會の客に對する大體論だが、更に微に入つて、閨中の秘語までこの著者は教へてゐる、その全部は憚りあつて記す譯に参らぬが、差支のない程度までを傳授いたす。

閨中の挨拶

初會といふは互に心を知らぬ同志だから何となく手もちぶさたのもの、閨に入つてからの挨拶も大ていお定まりのものではあるが

「もしあなた、おなじみさんが御座いませうなア」

「おまへさん方にお馴染かなふてすむかいな」

「お馴染があつても無いと言ひなさりやこそ妾がやうなものでも、ちつとの間傍にゐられるとさふものぢや」

「おまへさんは、何うやら見たやうな」

「そんな事したふても、妾がやうなものに誰れが相手になつて呉れるものかいな」

「妾がとこの妓が、さるよそのお客に凝つてゐるが、妾らは格別そのお客を好い男ぢやとも思やせぬ、惚れるといふものはおかしなものぢやなア」

「あの男が好いといふて惚れる妓は、どのやうな氣ぢややらおかし、男に惚れるのはあだ惚れといふて、根のとげるものぢやない、妾らは顔には惚れぬ、とかく氣に惚れる性ぢやさかい常にお客にだまされて笑はれてゐます、あゝ眞實で深切なお客が欲し」

【註】これは男ぶりの良くない客に言ふ文句なるべし。

「あんな見つともない男に、誰が相手になるもので」

「妾や飯はたべないでも構はぬ、粹な男になら眞底打あけてつき合ふ氣ぢや、どうぞ、そんな
好い男が欲しい」

「××さんは（役者の名）お前にそつくりやなア」

「嘘なもんかいな、それ、その様に笑つた目元わいな、ほんによう似たもんぢやなア」

【註】 これ等はまづ好い男と言はれる程度の大ていの男に言ふ文句と知るべし。

この外随分澤山の初會客挨拶教訓の文句があるのだが、遺憾ながらこゝに記す譯に行かぬ、
さて裏を返した二度目には何となる？

再會の傳

大方の女郎を見るにいかにも初めは大切に勤めてくると見えて相應に返りもあれど、多くは
二度か三度限りに頓と後のなきものなり、いつも同じ調子には勤まらぬものと見へたり、何れ
勤めにおろかはなけれど、別して二度目が大事と知るべし。

さて二度目が大事といへるその勤め方といふは、萬事初對面の時より、格別にしつぽりと打

とけ、随分張込んでもてなすがよし、客により一度會ふたまゝ、去ぬ〜といふものあるもの
なり、その時どのやうになりとして、是非も一度會ふて去なすが秘密事なり。

客の癖として、初心客は遠慮にて去ぬ〜といふもあり、又女郎の氣を引いて見る爲めに去
ぬ〜といふも有るべし、夫を覺らずして本意なふ去してしまふては、頓と後のきかぬものな
りされど何の差別もなく幾度も會はふとする客や、又いろ〜に無理いふものは、いと加減に
勤めておかねば方圖もなきものなれど、是もその日の悪星と觀念して大がいな事なら請て戻す
が徳なるべし、左様な人を不勤めにして戻す時は、いつでも茶屋は客びいきのものなれば、客
の悪き事は言はず勤めの悪い妓だと言ひふらし、その後は寄せつけぬやうにするものなれば、
いかやうに無理いふ客とても不勤めするは判らぬものと心得べきなり。

さて二度目から、そろ〜爪を出す猫文句といふものは

「何ういふ氣で、妾がやうなものを呼びかへしておくれだ」

「そりや、先度の時はどのやうな眞實でいふたとて、ほんまぢやと思やなさらんけれど、よう
思ふてみや、なんぼ勤めじやといふて女ぢやもの、好いたお方と好かぬお方はあります、さう

かといふて、最初から好いたと言ふてもほんとうにはなさらんし」
 「これからちつと、妾にもたまされてみてお呉れ」
 「そんならこれから氣ちがひのやうになるよ」
 (とかく初會よりはしつぱりとして、じり／＼惚氣をもたすべし)と此先生は平凡にしてあぢな一句で再會の巻をとめてゐる。

三 會目の傳

さて三度目からは馴染、いろ／＼身の上話にも秘傳がある。それは後で傳授するとして、三度目から秘事といふて一々別段の奥許しといふほどの事もないが、再三申すやうに何れ客はベケス、馴染となるにつれてその點も無遠慮となるもの、殊に人の氣質は百人百色、老人客の汚げなる田舎者のむくつけき、せりふがりのしつこさ、疳癪持の荒事、男自慢のなめくさり、金持ち顔の太平樂、生物識りの仙人顔、坊主客の白湯臭さ、いづれ千客萬別其さま／＼を考へてそれ相應にあしらはねばならぬが「我許り色でゐる氣は千人か萬人なるべし、年が明けたらお

前の女房になりたいも、これまた千人が千人にいふ文句なり」とこの本は教へてゐる。

「そりや馴染といふても一月や二月のことちやよつて、さう思ふも無理じやないけれど、先度もいふた通り嘘にも惚れたとは言へません、お前だつて、嫌だと思ふ女は何ば何でも嫌だらうがな」

「おまへはお客のうちには入れておきやせぬ、ほんまに」

「ゆふべの客が、定めて好いた男があるぢやらう——と言ひおつたが、心の中ではどのやうにおかしかつたか、お前はどう思ふてゐる、え、言ふて聞かし」

「この頃はどうしたものか、よそへ行つてゐてもお前のことが心にかゝつて——」

「いま頃は何うしてゐなされるか—それを思ふてゆふべも眠られなんだ」

「そりやこんな勤めをしてゐるうちは、疑はれるのは無理でないけれど、もう大がいが知れさうなものだに」

「いまのうち氣まゝさしておきいな、女房になつたらこんなものぢやないわいな」

この他種々雑多、殺し文句の手本に數限りがない、然しこうした罪な文句を教へた後から、

二本棒客が本氣にして、文句に文句をつけられるやうになつたら、その時はこう——とこの先生は教へてゐるから要心深し。

以上のやうな筆法で、猫は爪をかくして狐となり狸となり、時には狼ともなつて客を取つて喰ふ、喰はれるとも知らずに客の方では舐められるやうな氣持で有頂天となりちやん／＼燃やして通つた揚句は何となる。「客も初めは何吐すやら、定木板の文句とは思ど、煽てともつこには乗り易いもの、さては満更でもないのかな、と自惚れてこつて来る、さうなつたら随分氣をつけ、そろ／＼逃げ道の掃除すべし」と教へてゐるが、その逃げ道の奥の巻といふのは……

逃道の秘法

悪しき客は云ふに及ばず、良き客とても何のやうな事で退て欲しい事の有まじきものにもあらねば、豫て逃道の工夫をしておくべき事也、これもその身に深い望みもなく、客も身をもつた人ばかりなれば頓と要らぬ事なれど、馴染が重なると客の方から一色か二いろの難題を言ひかけるものなれば逃道を拵らへおくがよし。

さてこの難題を正直に受けてゐては拔さしならぬ譯ともなり又、受けざる時は不興になるは勿論の事也、そこを難くせなく逃るといふは、かねて實親と義理の親とを二人も有體にいひ置か、但しは悪き持病などの有るよしを言ふておくか、いづれ何なりと一つの嘘を言ひおくが秘傳の一つなり。

これはその難題の品により、いかやうにも文句の附けらるゝものなれば、たとへおとなしき客とても、餘り正直に身の上を打明けて仕舞ふては、後で否應の言はれぬ仕儀も間々あること也、されば餘り正直にして客をだまさぬやう注意肝要、義理と恩との二親を作ることとはどんな言ひ抜けでも出来るもの、もう一つは

「入れぼくろをしたり、指を切つたりする浮氣な色事の根の遂げたためしが無い、随分その位の事は何時でもするけれどそんな事でお前、氣が済むかいな」

こうして相手を粹ごかしに逆上せ上るも、又惻巧なる逃路の傳と心得べし——だと。

なるほど、讀んで見れば、藝妓娼妓と限らず、ありとあらゆる女、假りにも男をたぶらかさんとするには、以上のやうな戦法は、教へなくとも自然にやつてゐるやうだ、二十九歳で浮氣

彼の藝妓も「先生、こんな事は妾も百も承知、二百も合點であるつもりだつたんですが、これを讀んでから俄に自信がついたのよ、どうせ男はメカチヨンといふ斷定を下し、その虚に乗じて手玉に取るといふ公定式を發見してしまつたんですよ、アラ、生意氣なことを言つて御免なさい」

はい／＼左様で御座い、御免なさいどころか、うんとおやり遊ばせだ——

すゝめるまでもなく、惚れた男のために大切な／＼弗箱を失つて、そのまた惚れた男ともアバヨをしなければならぬまで、苦勞をしてから後「彼女『花街風流解』の教訓を身にしみ／＼と味はつて、勇敢にも猛然と當るにまかせて男をなぎ倒し始めた、凄、とても凄、いまでは或老作家から月々莫大もない御手當を頂戴しながら、自分の身は自由のきく横濱の一抱妓としておき、バントボン中毒のそれよりもひどくいろいろ男中毒症を嵩じさせ、注射の數よりも男と會ふ數を多くさせてゐるかに見へる、つまり注射一筒、男一人——といふやうな主義主張の下にでも行動してゐると思はれるほど、或飛行家、或銀行家、或若旦那、決して心から惚れるんぢやない、通りすがりに「あゝいゝ柄なこと」と呉服店の飾窓に目を取られると、すぐ

その時に「あ、今度はあいつに買はせてやらう」電光石火の如くに一人の男が、彼女の犠牲の壇に上る「もし××さん先刻ね、今晚は用事があるつて言ひましたがね、もういゝの、あんたの爲めに都合したわ、来て下さる——あゝさう、嬉しいわ、そんならお待ちしてゐることよ嘸ついたら殴るわよ」男こそ哀れなるもの、電話一本で急にいろ男になり濟まし、無理しても俺に會ふ可愛い、奴といそ／＼飛んで行つて、いゝ氣持ちで彼女の冬着の一枚を買つてやるといふ段取りになる、歸した後で彼女の科白「これで着物は出来たが、羽織と帯は、どの野郎に仰付けやうかしら……」

二十九歳の彼女の浮氣談義も大い此邊で切り上げやう、讀者の前にいままで現はれてゐた二十九歳の彼女は、實に土地も横濱でなし、何處の何家の何子といふ名前はある、それをお知らせした方が興味はあるのだがさうすると小生が恨まれる、そればかりでなしに當人はまづとしても迷惑を蒙る人が少くなさ相だからみな變名とし、匿名とした、これも變名の一つ、新橋の藝妓家「小紫」の女將、尤もいまはその業を娘分に譲つて餘生を靜かに送つてゐるが、此女なども完全に藝妓浮氣の典型となる代物だ。

藝妓浮氣の典型

根が吉原の藝妓である彼女は藝道にかけては、いま時の民衆的、八木節的、さのさ的藝妓とは腕がちがつてゐた、彼女が或會社の社長の寵を受けて藝妓家を出したのだ、抱への仕込みはとても酷しかつた。

「お前さんは藝妓になるんだらう、そんな事で藝は賣ります候はすさまじいや」

一から十まで藝だ、時には暇を盛んで活動も見たい、みつ豆も喰べたいが、そんな事を許すほど藝道修業には寛大でなかつた大ていの抱へは泣いた。

この女將、いつも言ふことが振つてゐる。

「お前たちは浮氣なんぞするんぢやないよ、藝妓の浮氣とさかりのついた猫は、わたしや大嫌ひさ」

こう言つては若い妓たちを警めてゐた、現に若し自分の家の妓が泊つてども來やうものなら「お前さんは淫賣かい、淫賣は妾の家に用がないんだから千束町にでもお行きよ」こんな程度

はまだ蟲の居所がよい時の話で若し臍がちと捻れ加減の時でもあつたら

「この淫賣！お前みたいないひよつとは藝妓の名折れた、夜鷹め、地獄め、惣嫁、草もち、さるそば、おたんちんのドク白め」悪罵嘲笑、面の皮から身の毛まで剣くほどの見幕を見せたものだ、だがこの女將、人を責むるは甚だ得意だつたがさて御自分はどんなことをやつて來たかこんな調子で、抱へ妓は泣くほど辛い思ひをさせられたものだが、この藝者とは何ぞやの原理にばかり生きてゐるやうな××の女將だつて、自分のやつて來た事を考へたら、餘り當世の藝妓ばかりを罵倒する譯にはゆかぬだらうと思はれる節がある。

この女將、吉原の廓内で親から貰つたのとと三味線一丁で鳴らした藝妓、それは實に立派な藝妓様々だが、彼女が藝妓家の女將となつた頃から、御面倒を見て頂いたのが、或會社の重役様だ、それは當然なことで、旦那を控えてゐる事が決して藝妓の耻ではない、生じなま中、男の爲めに意地を張つたり苦勞をしたりする事は、それこそ當世も往昔もあまり流行つた事ぢやないかも知れぬ、ぼんたのやうな苦勞をして貞女の鑑とされたつて、まさかノーベル賞金も呉れやしないし、貞女博士なんて學位も貰へる事ではない、だから彼女がいゝ旦那を持つたのを

何の彼のと申し上げる譯ではないが、犬の糞のやうに浮氣を敵視し、毛蟲やゲヂ／＼のやうに浮氣を嫌ふかに見へる彼女も、この旦那をもつてゐながら實は浮氣をやつたんだから驚くのはかはない。

浮氣の對手が何者だつたかを言ふと、ハ、ンあれかと、それに關連して御迷惑を掛ける人々も小くなささうだからやめとするが、とにかくいゝ男を作つてしまつた、所が藝妓の浮氣沙汰ぐらゐる世間にバツとするものはない、いつか旦那の耳に入る——といふ御定法通りの筋になり手切れの幕まで話は進んで來たが、この女將の浮氣はちつとばかり寸法が狂つたもので、自分が浮氣をして手切れ話を持ち出されながら「そんなら手切金を頂戴」と出たものだ、本來ならば「誠に申譯も御座いませぬ、お顔を潰しまして」とか何とか一應は世間に通る言葉の相場がきまつてゐるのに、あべこべに出たところ、この女將なか／＼に愛嬌があり過ぎるが、これを聞いた旦那なるその重役殿がまたいゝ氣なものである。

自分が面倒を見てゐる女が浮氣をして、別れる話のドタン場に、その女から手切金を寄越せは先づ以て圖々しい言ひ草と辭書に載せても間違ひのないところ

「何を言つてやがるんだ、こつちこそ損害賠償を貰ひたいや」

と出るのが普通なんだが、この重役殿は何と思つたものか

「さうかい、一體その手切金といふのは何程だい」

と出たのだから、お人よしなのか、二本棒なのか、但は偉過ぎるのか見當がつかなくなつたそこで彼女は

「五百圓！」

一金五百圓也、いまから二十何年も前の話ですよ、當時の五百圓決して今日の貨幣價值ではない、浮氣をされた上の五百圓到底たゞの五百圓ではない、流石の重役

「二百圓に負けろ」

と言つたが何の不思議がある、二百圓でも出さうといふのは佛さまか神さまの心もちだ。ところがいけない、普通の算盤玉で弾ける女ではない。

「五百圓がビタ一文缺けてもいやです」

とお出でなすつたものだ、浮氣をした上に手切金をビタ一文負けないといふ度胸骨は、随分

浮氣藝者の話も聞いたが、先づこれが前代未聞かも知れぬ。

「何だい豪さうな顔をして、手切金を負けろとはケチぢやないか」

これは彼女が一點張りの押し言葉、盗人猛々しいとはこんなことを言ふのだらう。

「手切金を値切る位なら、別れ話など持出すのはおよしなさいよ」に至つては、科白の出来のよいのに感心するのほかない。

この押問答、遂に果てしのつかぬこと、間に吉原の顔役が入るといふ騒ぎになつて、たうとう二百五十圓で手をうつた、女將は

「親分の顔に免じて——」

といふやうな恩を着せて旦那と綺麗に手を切る事となり、一札を取り交したか何うかは知らぬが

「左様なら」

「左様なら」

と二人は別れた、そして親分の家を出て右と左へ、背中と背中の距離が段々遠ざかつて、別れ

別れになつた、これでお終ひになつてしまつた——と諸君はお思ひでせうが、右と左へ別れても、道といふものは曲り様によつて又一つの辻で合さることがある、女將と重役とは「左様なら」から十分と経たぬ間に、兩方の爪先きがバツたり出會ふやうな歩き方をした、故意にはないほんとうに偶然に——

「あら！」

「おや！」

とお互に口に出さうになつたが、待てよ、いまのさき、手切金を受渡して、綺麗に別れた身だ、いくらくもで鉢合せをしやうとも、聲を出したら、その「あら」と「おや」にはまさか仇討のやうな氣合がこもらう筈はない「あら！」の次に思はず「あなた！」と出やうものなら先方は「おや！」の次に「お前は！」といかなければ呼吸が合はなくなる、こゝで呼吸が合つたら變なものになる、別れた二人だ、ちろり、ちろり、お互にだんまりの場面よろしく左と右に道を譲り合つた。

そして又二歩三歩摺れちがひの距離が出来たとき、ほんとうに自然に、どつちが早い遅いな

しに二人は後を振返つた。

「――」

「――」

無論ニコリと笑ふやうなことはしなかつた、そしてまた二歩、三歩、
其儘になつてしまへば一寸いゝ無言劇の一節が出来るんだが

「ちよいと、あなた」

再び振り返つた女將は沈黙を破つてしまつた。

「一寸待つて下さいよ、あなた」

こうなると聲音にせよ、神経にしる、とにかく「動」の行爲を先にとる者が負けだ、何用だ
い――とも言はずにふり返つた儘で歩みを止めた旦那の傍まで彼女が足を運ねはならなかつた
「ネーあなた、別れたと言つたとて、元は敵同士ぢやなし、何だか變ですから、その邊で清く
一杯飲んでお別れしやうぢやありませんか？」

かうなると意地にも、いやなこつた、とか、そんな必要はない、とか一言あるべきが普通さ

うなると女の方も意地さ、あ左様でござんすか、で第一巻を終らねばならなくなる、ところが
わが愉快なる浮氣女將に配するに、この重役なる人物の出来がまた誠に釣合つてゐる。

「さうかい、それもよからう」

と意地も二もなく早速の御承知、とある料理屋で、清くあつさりといふ條件で飲んだ別れの
酒がまことに申上げにくいほどこつてりしたものとなつて了つて、別るべき筈の二人はまたも
元通り「ネーあなた、わたし酔つちやつたわよ、家まで送つて頂戴」

まつたく見ちやゐられねえ圖で御座んす。

さて斯様にして、女將は二百五十兩の手切金を取り徳、浮氣をした事はその景物となつた、
バカを見たのは旦那のだが、この旦那は決して二百五十兩を返せなんてケチな事は云はな
かつた、藝妓の旦那となるにはこれ位の度胸が要る 彼女らは到底そろばん玉に乗る代物ではな
いのだ。

それから以後、彼女と旦那との間には、一度ならず二度までも別れ話を持ち出す様な事件が
起きた、然しその度びに、いつもこの女將の腕の凄いのか、旦那の人が良く出来てゐるの

か、とう／＼離れることは出来ずに旦那は此世を去り、彼女はいま商賣を譲つて餘生を靜かに送つてゐる。

浮氣を責めるに苛酷その度を知らなかつた彼女ですら、その身にはこんな事實があつた、いはんや、浮氣をすゝめる姐株様や女將たちに至つては、口に筆にするにあまりにやゝこしいほどの浮氣話に終始してゐるのだ、この話の説き出しに出場した二十九歳の彼の浮氣藝妓は、ほんのダンに使はれたやうなもので、それと知つたら嘘や怨まれることだらうが、つらくこの藝妓稼業なるものを經濟眼から觀察すると、彼女等も亦被搾取階級に屬する可憐なる一族、浮氣の水管が、彼女等を壓迫する特權階級に對する唯一の武器なのである、鬭争心理を彼女等に培はせた男達が、その不知の反抗に泣かされ、搾られて、浮氣者だの、下淫賣だのと、彼女等を足蹴にし、或はベツをかくのは、自分自身を打つたり殴つたりすると同じことなんだ、がそれとは知らず痴話に明け、痴話に暮れて、ゆくところに、人生の面白味はある。

名づけて藝妓蒚蕪談義、談義坊たる小生が唐變木の無粹者と來てゐるので、餘りに味も素氣もないお話しに終ることを謝して、この稿の筆を擱きます、ハイ左様なら。

或る人肉市

藝妓でもない。花魁でもないといふて龜戸や玉の井では餘りにも端的過ぎる、情調がない、彼は肉に飢てゐるのではない、肉だけ食したいのではない、ザクが欲しいのだ、肉のあぶらの滲み込んだネギが欲しいのだ。シラタキが食ひたいのだ、だから龜戸、玉の井は欲しくない。さりとしてネギやシラタキでは飽きが來た。

そこで蕩兒の××伯は、その脂ぎつた身體を、この頃よく横濱まで運ぶやうになつた。

ヨ コ ハ マ

横濱——そこには何があるのだ？この好色な貴族を魅惑して色を漁るあらゆる施設を備へた東京から、彼をひきつける何があるのだ。

『ヨコハマ』

××伯が口をゆがめて、舌なめづりするやうなその『ヨコハマ』それは生誕わづかに六十年到底三百年の歴史を有つ江戸情緒とは比べ者になる都市ではない。

それも震災前の横濱なら其處にお濠を固む石垣や、堤土に聳え立て老松古木、そうした千古無言の語り草ともなる城址や、京都、奈良等に於て見る様な、神社佛閣の何一つ眼に付かなくとも、その代り他の都市に於て見る事の出来ない横濱特有の情緒、或一種の匂ひが、何處となく色濃く漂つてゐる事に氣づいた。私たちも眼にはハッキリと見えない、横濱情緒と云ふものを、不思議な程懐かしいものとなし、又たまらなく尊いものとして愛してゐたものであつた。

けれども一搖れに揺り崩されて後の横濱のどこに××伯をひきつける力があらうか、美があらうか、或ひは醜があらうか？

「わかるまいな——とうしろうどもには、銀座だのモガだの、ダンスホールなんかは巴里の乞食街にも及ばぬ『ベテン近代』さぢやないか、といふて、いつまで藝者でも女郎でもあるまいぢやないか、横濱といふと彼奴等變な顔をするが、まだ横濱を知らないのがこつちの幸ひさ——」

！と××伯はニタリとする。

チャブヤ屋の女

いま僕はこゝに、××伯から聞いた横濱の前後について語つてゐる閑を有たない、いな、語りたいのだが讀者はおそらくそれを許して呉れないだらう、何が××伯が待つのか、それを一刻いや一字も先に知りたいであらう。

好色の伯爵を喜ばず横濱にはチャブヤ屋街といふ或變り種の人肉市場があるのだ、大震災のた

めに一なめにされた横濱復興の先驅をつとめたのもこのチャブヤ屋街であつたのだ。

唯一つ茶巫屋街のみは、焦土の中から眞先に、復興して震災前に勝る殷盛を極めて居る、元より此の茶巫屋街も、平等的な自然の破壊力の前に、一樣に其の災禍を蒙つたのであるが、其の災禍を免れて焼け残つたハウスが二三軒あつて、夫れが、震災數日を経ずして蓋を明けると或本能要求に苦しんで居た人達は其處に殺到した、未だ一般の雨露を凌ぐバラツクさへ建てられず、物質の供給なくて、貨幣の價値を失つた際に、其處では大びらに、貨幣による人肉の賣

買が行はれ、假面を脱がれ、野獸性を露出した恐ろしい情慾の争闘が演出された。

人類が、恐ろしい大天變地妖に際して、一切平等の世界となり、どん底に落ちた場合空腹を満し得た次に起るものは、情慾に外ならない、震災の唯中でさへ、忌はしき暴虐と、凌辱とが行はれた、而して、大天變地妖の後には、人心が動もすには、自暴自棄的な享樂に傾くとか、眞理はともあれ、本牧の茶巫屋街の跡には、忽ちに堂々たる建築が始まり、横濱復興は、眞に茶巫屋街よりの觀を呈し、震災後一二ヶ月にして震災前に勝る復興を見るに至つたのであつた。而も其處に雇はれる茶巫屋女の數も、震災前に倍し、恐るべき人肉の市は、益々露骨となつて來て居る。相當教育ある女性が、自ら茶巫屋を希望して、其處に押し掛けて行く様な奇現象も、震災後著るしくなつたと云ふが、茶巫屋女周旋業者などの誘惑の手段も益々露骨となり、新聞廣告や、歡言、誘拐等、あらゆる方法を以て、誘惑の網を蜘蛛手に張つて居る。彼等の爲めに可惜、處女の誇りを失つて、永劫浮ぶことのできぬ淪落の淵に墜ちた女性も少くはない。本牧十二天の海岸波打際一帯に、緑や、紅の色ペンキで飽どく塗り立てた、洋館建の家屋が軒を並べて居る、何れも玄關口や、電車から見へる屋根の眞上に、何ぞホテルとか、何ぞハウ

スとか云ふ羅馬字で書いた看板が掲げられてある家が、本牧へ足を踏入れると、すぐに眼につく、其の家こそは、震災後の横濱の暗黒面を色彩する人肉市、人呼んでチャブ屋街と云ふ。

肉に飢えたエトランゼー

其處には、天賦の黒髪を惜氣もなく紅く縮らせて、耳隠しに結つたり、此頃一部新人間に流行する凄い様な斷髪の女がウヨウヨとして居る、音に髪形が違ふばかりではない、其處の女達は衣類も紅や紫のゴテ／＼した華美な、あくどい色彩のものを身に付ける。

洋装の女も見へ、巧に英語を操り舞踏を心得、男と云ふ男に一樣に媚を賣り半夜の爛れた享樂を強るのである、此の茶巫屋街を中心に、古往今來、茶巫屋女の間には、幾多の戀のローマンスが織りなされ、更に綴られつゝある。本牧茶巫屋街、これ程あらはな、そして深刻な性慾の天地が、又とあり得やうか、茶巫屋女、洋妾、異人娘、混血兒……それは何れも茶巫屋街の副産物である。

母國を遠く離れて、哀寂の心のやり場のない異國人の眼には然うした種の強烈な女の色彩が

如何に美しく映ずるであらうかそして一夜の艶しい女のさゝやきが、假令、それが瞬間的であり、人種の差があるにせよ、彼等の心を強く捕へずには置かないのだ。

憊うして茶巫屋女が、外人と接觸する事が、より多いだけ、換言すれば、外人の或種の本能慾求の爲めに提供された一つの機關である以上、其處の女連が髪飾りから衣裳のすべてに底深い藝術味の薄い外人の嗜好に添ふやうに苦心し、歐化しやうと努めるのも止むを得ぬ成行きであつた。

「銀座のモガが何だい」

と××伯が吐き出すやうに言ふも無理はない、所謂モガの先頭に立つて開拓者の役をつとめるのは、實は種を明かせばこのチャブ屋女なのである。斷髮の最初ケバくしい服装——みな勇敢なるチャブ屋女によつて先鞭をつけられたのだ。

波止場稼ぎの悪車夫と結託して外國船員から飽くどく掴み取らうとする、埋地界限のハウスには、日本人無用の立札さへ掲げられて居る處もあるが、金遣ひのよい日本人を歓迎する事は此の社會の常である。

或物は、オーロラの光淋しい西伯利の果ての雪を背景としたバーにも似て、或は又、土人の歌聲かなしい熱帯地に見る様な肉感的な、あくどい色彩が施され、各ルームには、夫れく感能的な色彩裡に、人間の魂を蕩かさすには止まぬ、美しい音楽のメロデイが絶えず奏されて居る。

爛れた女達の、さうした惑溺の間にも、人間の魂はすゝり泣く——

此の種の家には、家の構造設備や、其の規模の大小の差はあるが酒場があつて、別に女達に與へられた一つ宛のルームがある事は、何れも一樣である、酒場はチャブ屋の生命とも稱すべく、従つて各戸共此の構造設備裝飾には、最も苦心し全力を注いで居る。

豊満な肉を持つた、さうした異様の服装をした女達は、卓を圍んで、帽をうりつゝ酒間の相手をするのだ、爛れた女達の咽喉からは「君戀し」とか「カルメン」とか「モンバリ」「東京行進曲」などの俗悪悲哀な音律が絞り出される。

其處には、眞理に憧がれて得られず、信仰を求めて救はれぬ惱みに泣く人間の生命の流動はない。

一瞬の夢にあこがれ、一夜の靡亂した歡樂に酔ふべく、肉に飢ゑた狼の様な男が、此處に群がり来る。斯くて茶巫屋は、世の中の世界を覆へす様な、時代思潮の過激な潮流が、逆巻かうが、生か死かの物質難の荒波に、不景氣の風があれ狂はうと此の社會許りは、何時も春酣に殷盛を極めて居る。

彼女達は、その紅燈の下に、一夜を踊り抜き、唄ひあかして他に見る事の出来ない異國情緒は漲り渡る、本牧×ホテルなどの一流所になると、十五六名の女達が、洋装や、和装に美しく着飾つて舞踏場に出で、ステツプも鮮かに踊り抜き、會話も巧にやつてのける。

彼女等の生活と收入

酒場には、洋酒が並べられてある、ビール一本×圓、サイダーが××錢と、云ふのが此の社會の通り相場である、卓の上に盛られた紅いボート・ワインは小さいグラスに一杯××錢、其他洋酒は、市價の二倍三倍の高價である、物即生命を眞理と心得て居る營業者から刻み出された相場である以上、適當な評價であるのかも知れない、夫れでも、一夜に×××圓以上も要求

する埋地方面から見れば、本牧界隈は、夫れに比しなほ安價なのである。

彼等の間には、オール・ナイト何圓、シヨート・タイム何圓と云ふ詞を使用する。それは時間的に忙しい海上生活者や、一般外人相手の爲めに、さうした制度が生れた譯であるが、震災後吉原でさへ、遂に時間制度を應用せねばならなくなつた。それほどチャブ屋は遊制改革に於ても先驅者なのである。

斯くして、久しい間、海と空より外何物にも接せず、荒みにすさんだ生活に何か強烈な、刺戟を求めて止まぬマドロスや、流れくつて國から國へ渡り歩いて居る外人達の魂は、此處にすひ込まれる、斯くして肉は、黄金に換へられ、黄金はたゞれた肉の一片と化するのである。

朝にA國の碧眼の紳士を迎へ夕にB國の金髮青年を送つて、夢よりも果敢ない浮雲の様な生活状態に置かれた彼等チャブ屋女——夫れは酒間に入り亂れて三筋の糸に悲しい宿世を歌ふ藝者達や、狭い一廊に金で縛られて、宿世の悲しい因縁を唄ふ事も許されず、泣き寝入つてゐる娼妓達とも、寒い夜風に吹かれて立つ、所謂、辻君とも恚うなりはてた運命の徑路は自ら達つて居た。

怒うした境地に赴く、幾百幾千の彼女達のさうした運命の到達の中には、物質的窮迫の爲め一家の犠牲となつた者も多少はあるが其處には、もつと複雑した、もつと繁雜な人間苦が藏せられて居る。

彼女達の多くは、相當學識を有ち、女禮女技に通じてゐる、高等女學校を出たもの、裁縫女學校を卒業したもの、或は曾ては宗教學校の學窓に學んだものなど、調べて見ると全く想像以上である。

家庭の狀態も從つて想像される、中には立派な素封家の娘、資産家の子女達が見出される、が、彼等は一様に彼等の前身を固く秘して一瞬の歡樂に酔ひ、果敢ない享樂を追求めて居るのである。

遂げ得ぬ戀の懊惱の爲めに、一度は死線を越えた女が、男を呪ひ、世を呪咀して、我から此の社會に足を踏入れたと云ふ様な哀話も少くない。

外國婦女の胸間に輝くダイヤに魅せられ、外國の風土に憧れ新歸朝者といへば猫も杓子も期待される處から、浮薄な歐化思想アメリカンイズムに浮されて或は又、淺はかた現代思想の渦

中にまきこまれて、地方の比較的拘束された家庭にあつて、或時はハイネの詩の甘い男の接吻を夢みて、紅い戀に憧れ、充たされぬ惱みの爲めに、フリーを叫んで此の社會へ流れ込んだものもある。

中には遊學の目的で故郷を飛出して、悪車夫、悪桂庵……所謂其處の暗黒面に描かれた人肉の市のわなにかゝつて、清い處女を無残にも蹂躪されて仕舞つた様な事實も、數へきれぬ、茶屋女になるまでの動機は、全く千差萬別である。

茶屋女が他の社會の夫れと全然性質を異にしてゐるのも此の爲めであつた。

一方には紅い豊醇な甘酒に陶醉して踊狂つて居る女があるかと思へば、ジブシーの女のやうにデカタンな性格を持つて、媚と秋波とを唯一の生命とし、華やかなその紅い唇からは、ハイネを論じ、トルストイを語りゴツホを稱へ、ミレーを讚美する、或者はスピノザとクラ、の熱烈な戀を嘆美し、瀬口入道の眞實をたゞへ、ニイチエ、カントの哲學を語り、さうかと思ふと糸の様な春の雨の降るうら悲しい夜半に、ふるへる様な聲をヴァイオリンに合せて、セレネードや、シヨパンの夕の一曲を唄ふ音楽家も居る。

更に彼等の収入の點を調べて見ると、遊客の飲酒代は全部主人の所有で、宿料と稱する分とチップが女の手に入るのである宿料も四分六分とか、七分三分とか云ふ割合で主人に取られる稀に半々と云ふ處はあつても、其の内から食料だの、寢具の手入れ費用だのと差引かれる、其他化粧料や、自分の衣類を整へねばならない、夫れだから此處へ一度足を踏入れると、忽ちに五百圓や一千圓の借財が出来て逃げやうと自覺した時は、既に身動きもならぬ境遇に置かれて仕舞ふ。一ヶ月の稼ぎ代が一千圓以上だと、誇り氣にキヨホテルの女は語つて居たが、夫れは極めに稀であらう。

人種的偏見が強く、マテリアリズム以外に人生觀を持たぬ、彼等外人に、元より眞實の愛がありやう筈がない、夫れは肉肉的利己的の愛より外何物もない。地位あり、相當の恒産ある外人は、矢張り偶々遊びには來ても恚うした女を蔑んでゐる。茶巫女が、外人と續々同棲し結婚した時代は遠い過去であつた。

自己の高價な魂と、肉と生命を投出して購ひ得た首飾と指環が何んで尊からう、華やかでありながら、恚うした女の大半は、或充たされぬ惱みに、或は悪性の病に犯され、或は空虚な淺

骸を抱いて泣いて居る……。

「ネー君、これ位で本牧のチャブ屋といふものゝ輪廓だけは判つたらう、判らぬかい？一度足を踏み入れて見る、直ちにその空氣は分るんだが、君のことだウカツに誘ひの手には乗るまいそこで實例を二つ三つ話さう、こんな話もあるんだ」

どん底へ落ちる迄

東京市神田區××町に宏大な邸宅を有する、豪商某氏の令嬢あさ子(二六)は一つ橋高等女學校二年生であるが、小學生時代から文學に親しみ、浮薄な文學から來た新しい思想にかぶれ、華やかな理想を夢見て、我れと我が身を小説の女主人公に見る様な、さうした空想を楽しんで居たが、遂に學業を捨て、音楽と、佛蘭西語を學んで立派な女性として、社會に起つ決心をした。そして兩親に希望を述べて見たが、兩親はあさ子の希望を許してくれなかつた。

のみならず夫れ以來彼女を危険視して、今まで耽讀して居た文學書類を手にする事さへ嚴禁し外出さへも容易に許さないと云つた監視振りを示した。あさ子は自分の希望が何一つ容れら

れないばかりでなく、不良少女扱ひにまでして監視し、壓迫を加へて居る周囲が俄に呪はしくなつた、そして古いタイプを備へた家庭の中が、たまらなく厭しくなつて來た。彼女は毎日一室に閉ぢ籠つて、鬱々として居たが、或日何氣なく手にした新聞紙の廣告に、電氣にでも打たれた様な戦きを感じた。彼女の蝕まれた心を、浮立たせる様な心地よい文字が、書列ねてあつた。

本牧の立派な西洋館で、外人の小間使をしながら、佛蘭西語も習へる、音楽も稽古が出来る……と云ふ様な廣告文が夫れであつた。彼女は飛立つ程、よろこんでもう何もかも打忘れて兩親へ宛て、書置の手紙を書いた。

お父様！どうか不孝な罪は、お許し下さい。私は、本牧の或る外人の家へ小間使となつて、奉公しながら、豫ねての希望通り、音楽を習ひ、佛蘭西語を覺へて、立派な女性となつて、世渡りをいたします、どうか私の成功をするまで、私を見逃して下さい、お願いです、お父様！お母様！どうかお身をお大切に居て下さい、成功の後再びお目にかゝります、どうぞ夫れまでは……

お父さま、お母さま——と書き納めて彼女は逝く春の野に騰つ陽炎の、夫れよりも淡き暈が、果敢ない夢を追ひながら、其の日の三時頃、省線電車を櫻木町驛で捨てた。横濱の土地は初めて、彼女には、勝手は判らなかつたが、兎も角も、其處から更に、緑い文字で本牧と書いた市内電車に乗つて、フランス語や、ピアノが習へると云ふ家、夫れが恐ろしい人肉市とも知らず、茶屋街へと足を踏み入れた。

其處には、本牧の海岸波打際に添つて、堂々たる西洋館が並んでゐた、彼女は再び懐中して來た新聞紙を擴げて見た。本牧小湊何番地Xホテル、彼女は心のうちで悠々讀んで、美しい西洋館を恍惚と眺めながら茶屋街を一軒々々探し歩いた。總て彼女は見上げる様な西洋館の前へ立つて居た。高鳴る胸を押へながら、其の門を潜つた。彼女の前に永劫浮ぶことの出来ぬ淪落の淵が、大きな口を開けて待つて居やうとは、知らう筈がなかつた。

彼女が玄關を這入つて行くと夫れと入れ變りに、恐ろしく酔つた荒くれ男のマドロスが二三人の女達に送られて出て來た。嫌らしい媚を其の西洋の船員と惜氣もなく投げやつた女達は、再びどや／＼と室内へ這入つて來た。女達は、何れも毒々しい装ひをして、髪の毛を赤く縮ら

せて居た、中には後をぞつきり切り落した斷髪の女も居た、眉毛を長く引染て、眼の縁を薄墨でぼかし、まるで、毒花の様に唇を紅く染めて居る。

女達は、新米が又來たな、と云はぬばかりに、彼女の姿を、蔑む様な眼付で穴のあく程ぢろく眺めた。彼女は、はつと思つた、そして逃げ出さうとした時、彼女は大きな手で遮られて居た。

「もうかうなれば此方のものだ騒いだつて、藻掻いたつて、わなにかゝつた小鬼、籠の鳥も同様だ！」

男は、重みのあるどつしりした聲を放つて、彼女の優しい手を驚掴みにした。彼女は全身に水を浴た様になるくと打顫へながら、其處に立ちすくんだ。

隣室では、女達がお客を相手に笑ひ興する聲や、捨鉢的な俗語が一と頻り騒がしく聞えて來た。

あさ子の家出を、書置きによつて知つた××家では、俄に驚愕した、そして父は、其の夜、店員と共に自動車を飛ばして來濱し、本牧の洋館を捜して見たが、深夜の事でもあり手の付け

やうがないので、止むなく山手署に彼女の捜索方を願出た、其の時は娘の一身を案じてた父は、殆んど狂氣の如くであつた。

山手署では、時を移さず、本牧一帯に巢喰ふ茶屋街の全部に亘つて、捜査した處、正しく××ホテルの一室に、小さくなつて打顫へてゐる彼女を發見して、一先づ本署に保護を加へ懇く説諭の上父光三氏に引渡したのであつた。

斯くして、彼女は漸くに救はれたのであるが、これはほんの最近の一例に過ぎず、私は其の他女子大學の家政科に、一ヶ月前まで學んで居たと云ふ婦人に出逢つた事もあつた、その婦人は二三日中に此の家を逃げ出す覺悟であるが、若逃げ出すことが出来たら……

「ねえ君また話すよ。どうです、ちよつと喋つて見てこれ位だ。まだく面白くことが澤山あるんだよ、だから横濱は面白いのさ、まず近頃には面白くところだね、どうかい君、行つて見ないか？」

伯爵はニタリと好色らしい瞳をかどやかした。

漁色の大家××伯が、近ごろ有頂天になつてお通ひ遊ばすところのチャブ屋街の話し、それ

をその儘に語つてゐたのでは、到底いつ絶ゆべしとも思はれぬ。僕は、この××伯に聞いた或人肉市場の話に就いて、その基調をなす人類の性慾といふものを考へさせられた。

性の亂舞時代

ブロッホが喝破したやうに

「君はいま迄、一婦人以外に關係した事がないか？」

と問ふたしたら誰か「然り」と答へ得る者があらうか、同じやうにこの質問を現代の職業婦人とか女工とかに向けたら、やはり男性と同じく「然り」と答ふることは不可能だらうと言つてゐるがこれをその儘現代日本の男性、女性に向けてもその率の何パーセントかの相違だけで、やはり「然り」と答へ得る人幾人かと言ひたくなる、これは赤い、怪しからぬ思想をその儘、日本に移さうとする無謀よりは、無謀の度がすつと少いことだと信ずる。

そこで二夫一婦制とか、節制とか、貞操といふやうな言葉は傳統的の觀念だけで片附けられるものではないので、今日この頃のやうに、道學者でなくとも男女關係の放埒になつて來た事

は、實はかうした事をさせる社會的基調の變移があるらしい、誰かの言葉に「不自然の暴富、不自然の貧血」といふのがあつたが、これを男女の性的關係の上にも應用できるのが現代であらう、或者は飽くなき性の放埒に堪能の底をはたき、或者は正常なる性慾の満足を得ることが出來ずに、その結果はアブノーマルな性慾の發現となり、極度の制慾のために精神病または神經衰弱の原因ともなつて來る。

こゝに於て制慾の適當の窓といふものが生れたのであるが、それさへ當初の目的は果されずに、今日では淫に亂する人々だけの享樂機關となつてしまつたのだ。

七面倒な議論は避けやう、僕の言つておきたいのは、人肉の市の話しをきいたついでに放埒無限な性の道場に亂舞して、性慾のために身を亡ぼす人と共にその反對に、かうした現象を美しい果實とも眺めて、よだれをたらしながら、禁慾のやむなき人々も亦身を亡ぼす種々の作用をもつといふことである。

制慾は有害か

「制慾は神経衰弱及精神病を誘致する」といふ學説はフロイドが研究の結果の唱道であるがその説によると、文明と道徳とは人類に制慾を強ふるが性慾を完全に節制しようとするれば、その制した性的精力を他の精力に形を變へなければならぬ、といふのだ。

ところが、これは非常な困難なことで、ニイチエの如きはこの制慾家の代表として他から種々と取沙汰されるが、彼も亦極度の神経衰弱者だつたといふ説もある、假にニイチエが性慾を他に轉換することに成功したものだとしても、このやうな成功者はまことに稀なことで、若し性慾を他の精力に變形する事が出来なかつた時は、これを制せんとする腦の力に疲勞を來して神経衰弱を誘致するに至る、そして結局はこれを制し得ずに、押へられた性慾は却つて病的なものとなしてしまふ。

諸君も御存知の性慾學の大家エリスの研究のうちにも、バラスベットレーといふ婦人科醫の如きは、二十年間七千餘人の患者に付いて檢べた所に依れば、婦人生殖器の病氣は制慾の結果

であるといふやうに説いて居る。ブラチットは婦人が制慾を強ひらるゝ時は肺病の徴候を現はすといつて居るが其の證として次ぎのやうな例を擧げて居る。

夫婦の間には三人の子まで出来、家庭も非常に圓滿であつたのが、妻の方が時々家に入らず一青年に戀するに至つたが、勿論其戀は顔にも現はさなかつた。それ以來其妻は肺病のやうな徴候を現はして來たが三四ヶ月の轉地療養も何等の効果がなかつた。身體は次第々々に衰弱して死期が次第に近づくやうになつて來た。女は遂に耐へられなくなつて其青年と墮落して了つた所が驚く可し、肺病の徴候は全然消えて了つて、一ヶ月の間に以前の體になつてしまつた。

ペトログラードのジャコブラン博士は、露國及び獨逸の専門學者二百人に對して禁慾は有害なりや否やと問合せた。返答を送つて來た者は僅四十三人に過ぎなかつたが、其内四人は知らずと答へて來たのであるから都合三十九人返答を送つて來た。其返答は大抵或場合は有害といふのが多く、害ありとか絶対に無しとか答へたのは誠に少かつた。

皮肉なある一人は禁慾と見せかけても、或者は自らを瀆してゐる。或者はアブノーマルとな

つてゐる。従つて禁慾の有害といふ事はいはれない事になつて来る、何故なれば絶對の禁慾といふ事はない事だからといふやうに述べてゐる。

エリス自らも放埒が有害である如く、禁慾も有害だといつて居る。然しながら現今の男女關係は、極度の放埒か、然らずんば不正の社會組織の結果、不當不自然の制慾又は禁慾を強ひられて居るのであるから、フロイドの説く如く精神病又は神經衰弱を誘致し或は多くの學者の説く如く種々なる有害の原因となつて居る事は拒む事は出来ない。

不自然的行爲

佛國の生物學者メチニコフの「人類の天性」に説く所に依れば、現今文明國に於ては春機發動期の年齢と結婚期との年齢が文明國に於ては十年以上の差を生じ、此差違は男女をして不自然的遂情に耽らしめ、精神的肉體的の兩方面に於て社會に忌むべき害毒を及ぼしつゝあるばかりでない、生殖機關も亦害を蒙つて居ると。

人類の生殖機關と動物の生殖機關との差違は、男性に於ては局部の或骨の消失で、女性に於ては處女膜を新に得、月經といふ現象が起つた事である。月經は婦人諸病の原因たるのみならず、處女膜は又これに月經が溜つて悪い微菌が寄生し、種々な害を醸すので、メチニコフは之を稱して人類生殖機關の退化と稱して居る。

不自然的行爲は動物に於ては動物園に飼養さるゝ猿鹿等に於て認めらるゝ事ありと雖も、之は唯壯に於てのみ稀に認めらるゝ所であつて、主として人類間に行はるゝ遂情である。不自然的行爲即ち自瀆は精神上に非常なる有害の結果を及ぼすのであつて、英國の醫學博士オーサーシツプリーは「性と青年」に於て自瀆の二種の危険を擧げて居る。

博士は多數の少青年の自瀆を研究したのであるが、其説に依れば自瀆の害は、第一は人爲的刺撃であつて、第二は其れに伴ふて生ずる性に關する思想の醜汚化であると。第一の場合に於ては強健なる身體を有する者は其旺盛なる發育が能く消耗を補ひ得て、其實が顯著でないが、然らざる者は生存競争場裡の悲惨なる劣敗者となるのみならず甚だしきに至つては不幸短命に終る者も多いのである。

プロツホも「現代性慾生活」に於て、自瀆の機械的刺撃は、後には其れに満足するを得ずし

て心理的刺撃となり、其怪想が種々なる病的犯罪となり、又犯罪の原因となるを説いて居る。之等の弊害は凡て現代の社會組織の缺陷の爲めに、性慾の衝動が青年男女間に於て正當に充たされざるの結果と見る事が出来る。

第二の場合に於ては強健なる者も虚弱なる者も等しく之に侵さるゝのであつて、思想の汚濁醜化の爲め誘惑に對する抵抗力を全然喪失し、人格の純潔を保持するを得ず、假令一度結婚生活に入るも高潔なる家庭の樂しみに安んずるを得ずして、再び墮落生活に陥る危険があると説いて居る。

ダンスで性教育

エリスは戀愛の術に關して大いに説いて居る。其説に依れば戀愛の術といふ事は古昔は大いに重んぜられて居たので、羅馬希臘には其れに關する多數の著述があつた、然るに基督教が勢力を得るに従ひ悉く破棄されて、今は殆んど傳はつて居るものはない僅かに地中から掘り出されたポンペー市の壁畫などに依りて漸く其の一端を窺ひ得るに過ぎない。

印度などには現今も存在して巴里などに於ては其翻譯が大いに珍重がられて居る。古昔に於て如何に盛んであつたかは、現今野蠻人間に於ては、此等の事は神聖の事として經驗に富める老婦人に依つて神前に於て教授さるゝに徴するも明かである。其の教授の方法としては踊りの形式が取らるゝのであつて、歐米に流行する舞踏は、其源を野蠻人間の此踊りに取つて居るものが多い。

男子にはそれを見る事を禁ぜられてゐる。此の踊りを三ヶ月なり、五ヶ月なり一定の期間習得した後非ざれば結婚の資格なしとされてゐる。卒業式は誠に嚴肅なものであつて「お前は是れに依つて夫の歡心を得、平和の家庭を作らねばならぬ」といふやうな事が懇切に説かれるのであると。又現今の既婚女子に性の不感の多いのは男子に該技術なきため結婚の初夜に於ける女子の恐怖其原因たりとは多くの學者の證する所である。

現今文明國に於ては、戀の技術が全然顧みられず、唯一部賣春婦に依りて、汚れたる手練手管として保存獎勵さるゝが故に却て男子の遊蕩を促し、非常なる弊害を社會に及ぼして居るので、之れ亦性慾が冷酷なる道徳に束縛さるゝの結果である。人肉市の盛んになるのもこの理屈

が潜む。

誘惑の危機は月經中

エリスは又、女子が月經中性の要求強きを説き、女子にして誘惑さるゝ者の多くは月經中の期間であると云つて居る。これは戀の技術とは關係ない事であるが、月經中は汚れたるものなりとの迷信及び習慣に性の衝動が束縛されたものと見ることが出来る。而して月經中女子がヒステリカルとなるは、この衝動が満足されざるがその一原因たるは言ふ迄もない。

男女の關係が不正なる習慣又は社會組織に束縛さるゝ爲め、人類の生活を不幸苦痛の深淵に陥れ、人類退化の原因となりつゝあるは、多數學者の眞摯なる研究に依つて明白にされつゝある所で、一々之を擧ぐれば際限のない事である。

之等弊害の救済策として自由戀愛論の唱へられて居る事は世人の熟知して居る所であるが、エレンケ―女史の唱道する如き現今の社會組織の不正を其儘にして置く、社會政策的の自由戀愛では決して、現今の男女關係より生ずる各種弊害を除去する事は出来ない。

現今は表面は一夫一婦制であるが、裏面の實際は物質的賣買的の汚れたる自由戀愛である。

之は女子の貞操が商品たるを得又は結婚が經濟的事情に支配さるゝ現今の社會組織が續く限り止むを得ない事で、現組織が改められたる曉に非ざれば眞正の自由戀愛は望む事は出来ない。

女史の説く自由戀愛は、戀愛を基礎とする嚴格なる一夫一婦制で、若し結婚後戀愛存せざるに至れば、子供は凡て母の手にて十四歳迄養育さるゝも、良人は養育費の半ばを負擔する義務あり、尙子供の保護局より子供を有する母に一定の補助金を支給され、子供の爲に女子の離婚結婚が妨げられないといふに過ぎない。

之に依つて一部の母は救はれるかも知れないが、賣春婦及花柳病を絶滅する事も、結婚を經濟的束縛より解放する事も出来ないのは明かである。凡て不徹底なる社會改造は唯束縛の鎖に鍍金を施すに過ぎない事になり却て自由を妨碍する事になるのである。

戀愛のユートピア

人類は過去に於て多夫多妻であつた、多夫多妻の形式の一種として現に残つて居るのは濠洲

野蠻人間に於ける一トテムと他トテムとの結婚で、即ち團體結婚と稱すべきもので、一部落數十人の男と、他部落數十人の女とが結婚するのである、されば甲部落數十人の女子は悉く乙部落一人の男の妻であつて乙部落數十人の男は甲部落各一人の女の夫といふ事が出来る。

現今濠洲野蠻人間に於ては人に妻を貸したり又は交換したりするやうな事が行はれて居るが之れは濠洲野蠻人間ばかりでない。マサイ、南ハワイのヘロララゴン、コンゴ河河口等に於ても行はれて居る所である。又亞細亞の東端に於ても行はれて居る所がある。

パンフォルトの説に依れば多夫一妻も亦團體結婚の變體と見る事が出来る。即ち一部落に男が多く、一部落に女が少かつた場合に其端緒を發して居るといふのである。歴史の父たるヘロドタスの記す所に依れば、アフリカナフモニーの土民間に於ては結婚當夜は、知己は各土産物を持參して花嫁を拜見に行く、そして各土産物を贈呈して、其花嫁と關係する事を許される即ち花嫁は其一夜全然娼婦となつて了ふのである。

斯くの如き風習は其他各地に存して居る事が種々の學者に依りて記録されて居る。メリンコ一の記す所に依ればシベリヤのバイセットは、祭日の日には男女の關係が解放される。彼等

は盛んに相伴つて踊り廻はつて居るが、手を携へては森林中に隠れて了ふと。

凡て斯くの如き風俗は多夫多妻の遺風であつて制度は一夫一婦になつても情慾を漏らすべき機會なく色々な弊害を醸す事となるので斯の如き方法が其緩和方法として遺つて居るのである野蠻時代に於ては女性が中心となつて居り子孫は父系に依らず母系に依つたので、多夫多妻であつたのであるが、男子が暴力を以て女子を屈服せしめ、或は掠奪結婚が行はるゝやうになつてから茲に家長制度の父權を基礎とする家族が形成され、又一夫一婦制を誘致するやうになつたのである。

然しながら此等古昔の多夫多妻主義や、團體結婚等を現今復活せしむるの不可能であり、又有害なるは言ふ迄もないが、人類の此天性は唯之を壓するの困難なるも亦言ふ迄もない。

そこで、將來に於て社會が平和と自由と正義を基礎として組織さるゝ事になれば、生存の必需品を得る爲の機械を動かす労働時間は二時間位となり、残りの時間はワイルドがいふ如く總ての者が藝術を樂しみ、藝術家となる爲に費さるゝやうになつたら、即ち人類は一週五日一日二時間位の極度の快樂化されたる労働時間以外は何樂の束縛を蒙らざる自由人となり、獨りで

樂しむと他と交はるも自由であるが、斯くの如き社會に於ては實際は藝術趣味を同じうする者の、藝術的交際か、學術の研究會か、男女の戀愛關係以外には存せざるに至るは言ふ迄もない。男女の關係に於て争鬭の起るやうな事はない。何故ならば戀愛は互に他の人格を尊重し、他の苦痛を自己の苦痛とし、他の快樂を自己の快樂とする同情を基礎となすものなるが故に、他が愛せざるに係はらず他の愛を求めて他を苦しむるといふことはあり得ないからである。現今が愛せざるに係はらず自己の愛を強ふるのは、物質的であり權力本位であつて、他の個性を尊重するの習慣を缺くより來ることである。されば將來藝術本位の社會となり、自己の個性と共に他の個性を尊重することが凡ての習慣となれば相手に愛を強要する如きことは跡を絶ち従つて戀愛に關して争鬭の起るやうなことはない。男女關係は平和にして清い自然の一夫一妻制が、それを希望する者のみに依りて行はるゝやうになると思ふ。

女！ 女！ 女！

舌

「ねえ君、汽車にも電車にも自動車にもオートバイにも、およそ旅行するものには必ずブレーキといふ安全装置があるのに、最も危険で、最も怪速力を有つ女の舌に、ブレーキの無いといふ無法なことがあるかね、一つ誰か發明する者はないものかね」べら棒な話とは思つたが、味つて見れば、なるほど感心されぬことでもない。

就てはまことに世間さまが不景氣の折柄相濟まぬ吞氣千萬なことではあるが、こんなことを考へて見た、假に、女の唇と舌の作用が、現在よりも特別な装置になつてゐて、口角の兩端が同時に別々の話が出来るものになつたら？果してどんな結果を歴史の上に齎すであらう？

かとナ

常識的に推理しても、世界中の男の三分の一は神経衰弱となり三分の一は自殺をし三分の一は狂人となる——さうすると結局は女ばかりの世界になつてしまふ、世話はない政友會が持出さうとする婦選案などは反對も賛成もあつたものかい、男といふものは完全に征服されるのだ何と一つ誰かその發明をして見ないかな、今のうちに、さうしたら特許局に猛烈な運動をして握り潰して貰ひ永遠に特許を興へないで、せめて男の溜飲を下げる事かな。

印度の話に、昔トワレトリといふ神様があつて、始め世界と男とを作つたがそこに一丁女といふものも作らうとし、さてその材料を何にしようか、木造か薬ぶきか、それとも鐵筋コンクリートかと随分考へ抜いた末に、これは非常に凝つたもので月の圓さと、蛇のうねりと、樹の枝の撓さと、草のそよぎそれは蘆の葉のか弱さに花の觸覺、若葉の輕快さ、おまけにかけらふと浮雲、風の浮氣と兎の臆病孔雀の虚榮と鳩の胸毛、もう一つ景物に金剛石の堅さを蜜の甘さに練つて虎の残酷さを火に焙り、それを雪で冷して、これに椋鳥の饒舌と雀の鳴き聲をたゞき込んで、丸めて粉にして團子にして、オブラートに包んで屁で飛ばして見たらびよこんと立つたのが女だつた——といふがいやさうかも知れない。

それほど苦心して練り合て、出来上つた女といふ代物を、男に興へて見たところ、八日になつて

「先日頂戴いたしました女といふ私に似た、そしてまるつきりちがつた動物は、どうも餘り饒舌り過ぎて何ともかんとも仕末に終へません、最初のうちは興味もありましたが、のべつ慕なしに饒舌り續けられたんでは不愉快で堪りませんから、折角で御座いますがお返し致します」と返上して來た。

するとそれからまた八日経つて

「あの手に負へぬ女といふ動物を、お返し申しは致しましたがまだ壊さずにありますたら戴きたいのですが？」と男がやつて來た、あゝ左様か——と神様は呉れてやつた。

ところが今度は三日目に又ぞろ返して來た、流石に氣のいゝ神様も餘りのことに怒つてしまつて

「何といふ我儘なことなんだ、返したり貰つたり、貰つたり返したり一體どうする氣なんだ」といふと男は「いやはや恐れ入つた次第では御座いますが、實は無くて困りますし、有つて

も迷惑なものなので……」と答へたといふ。

物言へば唇薄きかゝあなり——といふ川柳がある、あにひとり唇の厚薄に關はらんや、嫌のみにあらざらんや「アーサー王でも女の舌は馴らされぬ」といふ英國の諺があるが、これまたあにひとりアーサーのみならんや、いかなる英雄でも豪傑でも女の舌が馴らさりよか「女二人に舌一枚で十分だ」といふ諺の通り「鰻を尻尾で持つのと、女を言葉で押へることは六ケし5」といふ訓への通り、いやはや厄介なは女の舌。

といふと、女の方から苦情が起るは必定である、起らぬ前に男の饒舌家をいつておこうか、男の饒舌は饒舌とは言はずに雄辯と名づける、雄辯に非ざる饒舌をなすの男があつたら、それは舌の構造が女の材料で出来たものだ——とナボレオンが言つてゐる。三人寄れば姦しいは女フランスの諺の「舌は女の廁」などはまだよい方で、ジョンソンのやうに「女の演説は犬が後足で歩くやうなもので、褒めたことではないが誰でも驚く」と言はれても、まだく女の舌の根は縮んでは來ない。

目

目が口ほどに物を言ふ——ところが現代に於きましては、目が口よりも物を言ふ——に改められねばならぬことになつて来た見よ銀座街頭とは言はずとも、往き交ふ女その種類の如何を問はず小娘ですら目であなどれば忽ち竹藪返しの電光に射すくめられる現代の女は表情がよくなつた——といふ、表情とは何であらう、表情を構成する第一の分子は目だ、ところがこの目から出る涙は何うだ。

涙

女性を罵倒することを以て有名なる青柳有美氏が、曾てこんな歌を作つたことがある

「無いぞや、何が無い、女の頭に智慧がない、泣きの涙の愚痴ばかり」

いざとなると涙だ、これには到底敵し難い、項羽が虞氏の涙にとろけて起つことが出来なくなり、新田義貞は勾當の内待の涙にあれ野人の叢鎗を受けなければならぬ破滅となつた、英國

の或詩人は「女は魔物、無数の武器を持つてゐるが、一番鋭くて最も恐ろしいのは涙だ」と歌つた、なるほどさうかも知れない。

「女の涙は手管の源」(伊太利の諺) 「女の涙と犬の跋ひくのは嘘だ」(西班牙の諺) 「女の泣くのは鸞鳥が徒跣で歩くのを見るより可哀な者だ」(英國の諺) 詮議立てすれば限りもないが、とにも、かくにも、女の涙といふものは始末のよくないことを言はんとしたもののばかりである。

「屁の論に泣くのもさすが女なり」といふのや、誰か閨秀歌人の歌に「女われ、泣くにもまづぞ小ぶすまを、静かにたつることを忘れず」なんていふのは同じ女の涙でも同情もされ、可憐の點もあるが、涙を武器にするから「女とは凡ての悪と、無智と弱さと、劣等との化身だ」(ワイニングゲール) だの「女は嘘つきで、不實で、思を知らぬその上、音楽も詩歌も、美術も解らね第二等の人間だ」(シヨペンハウエル) などとコキ下されることになる。

美人

一 體美人といふものゝ標準が何處に置かるべきものであるかこれほど面倒な問題はまたとない、時代によつて違ふ、人によつて相違する、むかし希臘の理想の美人とは身長五呎五吋、胸圍三呎四吋、腕の太さ一呎三吋、股の太さ一呎四吋半、體量十六貫七百匁——といふことになつてゐたが、これは體格に於ける美人で容貌のことがない。

一 瓜實に二丸顔、三平顔に四面長、五瘴痕、六目つり、七頬焼けに八眇、九禿、十缺唇——といふ備後地方の諺、一瓜實に二丸顔、三に角面、四長面、五盤臺、六目つかち、七みつちや、八でぼちん丸願なし十しかみ——といふ上方方面の諺いづれも第一に瓜實、次に丸顔といふことになつてゐるが、これは顔の形體だけの標準でその造作にまで及んでゐない。

立てば芍薬、座れば牡丹、歩む姿は柳腰——なんていふのはモダンガールに輕蔑される體格だ、スペインあたりでも「女と獵犬は腰の細いのがいゝ」といふ諺があつたが、現代の西班牙の女は、やはりヤンキーや英佛の女などと同じに、腰は太きに任せ、尻は大きいまゝ、腰骨は

有りのまゝの頑丈さを露骨にしてゐる。尤もポルトガルの諺には「鷲鳥と女と山羊は、瘦せたのは厭だ」といふのがある、そんなら太つちよが美人か——と申されても、まさかテレル夫人の九十三貫は閉口頓首だらう。

獨逸には「世界中に美人がたつた二人ある、一人は死んだので一人はまだ見つからぬ」といふいとも皮肉なる言葉が残つてゐるが、これならまさに間違ひなし、死んだ一人は誰なのか詮議立ては野暮、あとのまだ見當らぬ一人にならうとして否、なつた氣で、世界中の女は化粧する、自惚れる、そこで床の中でコーヒーを飲み、起きて一寸顔を洗ひ、微温湯の糠の湯に三分チツと浸り、湯の中で牛乳で顔を洗ひ、浴後二十分間は靜かに落着いて、さてそれから鏡に向つて化粧を終つたらドンが鳴る——といふやうなことに立至るのである。」

鏡

そこで「鏡に親しいほど家事に疎くなる」といふ英國の諺「女の好きな女は鏡の中の女」といふ獨逸の諺などが生れて來るのだが、全く鏡は女の一番の相談對手で、たとへ何が何うなら

うと構はぬものだつたら、猫に小判、女に鏡、鏡さへ與へておけば女はおとなしい、フランスの或統計家の調べた結果によると、女が一生に使用する鏡への時間は、まづ鏡の使ひ初めを六歳と平均して、六歳から十歳までは毎日七分間、十一歳より十五歳迄は日々十五分間、十六歳より十九歳までは二十分、二十歳以上は少くとも一時間以上六十にして始めて日に十分も鏡が不必要になる。

といふのだが、これは極く内輪に見積つての計算としか思はれない、コンバクトなどいふものが出來て、片手で買物を漁りながら片手で鼻の先きをお叩き遊ばす婦人のある現代だ、電車の中、便所の窓、街頭の柳のかけ、自動車の中、突き當る心配さへなかつたら、彼女は懷中鏡と向ひ合つて歩いてゐたいだらう。

山東京傳が客を招んだ時、茄子の鳴焼きを出したところが、客が「茄子とて瓜實顔にまけじとて、くしをさしたり、油つけたりとやつたところ、京傳何條黙すべき」「油つけ、くしをさしたはよけれども、色の黒いに味噌をつけたり」とやつた話は有名なもの、茄子だか、唐なすかぼちやだか或はだばはぜだか今土焼のめんこみみたいな御面相でも、御當人さまに見れば

また捨て難いものらしい、鼻はあぐらをかいてゐても、口元が何う？色は黒いが目付が何う？さうですともく部分品で継ぎ合せることが出来るものならどんな夕福でも百人も寄せて切り盛りすれば、完全な一人の美人は製造することが出来るかも知れない、あゝ神様なんと百分の一美人の多いことよ——だ、フォード自動車ぢやないが、女の部分品販賣をやる方法はないものか、部分品で組立てられるものだつたら世界に醜婦がなくなると共に、随分商賣繁昌、男の楽しみが是に集中され、世界は平和、國際聯盟が閉店して、不戰條約なんて昔話になつてしまふんだがナ。

自 惚

かくまで苦心慘膽、いかにせば零細ほとんど検微鏡でも尙かつ發見し得ないやうな自分の美しいところを探し當てやうと苦心して、やつとこサと美人である自惚を持つところの女も「美人薄命とか

美しき柿に澁ある浮世かな

大 津 丸

なり美を誇つた人々の行末のほどを並べ立て、これが實證とするまで、男は執拗に美人を追

美しや毒といふなる草の花
 人を取るきのこ果して美しき
 目の毒と知らぬうちこそ櫻哉
 錦着て果てのかなしき落葉哉
 手折る間に秋風だちぬ女郎花
 美しいものに味なし雞の菓子

千 影 茶
 一 茶
 同 大 江 丸
 同 破 笠

などと折角の美人が臺なしにケナされてしまふ。
 美女に子はなし八重は大方實を持たず
 美人の笑は財布を泣かす(伊太利)
 女の美しさと森のこだまと虹は直が消える(獨逸)

なんかと世界中いづこも同じく美人を罵倒することに於ては共同一致お手をつないでだ。そこで英國の諺の様に「頗る美人だと賞めてやりさへすれば直ぐ馬鹿になる」といふことになり美を誇つた人々の行末のほどを並べ立て、これが實證とするまで、男は執拗に美人を追

跡する、但し断つておく、その美人をわがものとするこの出来ぬ男だけの寝言繰言で、若し彼にして相手の美にぞつこんと参られたら、決して斯様な罵言は出て来なかつたものなのだ、——とこゝらで女の味方を一寸しておかぬと命が危い。

さてそこで、一體美人といふもの果して薄命か否か小野の小町の末を見ろと言はれる代表的な物語りは別として、やゝそれに當てはまるやうな話をしよう。

當時の歴史家が「人間の姿をなしたる者の中で、彼女は最も美人である」と書いたほどだから、羊人である點は沈魚落雁などと形容のできる程度の生やさしいものでなかつたに相違ない俳聖芭蕉が「松島やあゝ松島や松島や」とのけぞつたのと同じく、おそらく言葉や筆に表し得なかつたスコットランドのメリー女王、これほどの美人も革命家ノックスに「さても驕奢なる女よ、人間の生涯がいつまで續くものでもないのに——」と咀はれ、數年の後には人の爲めに殺されてにまつた、完全に美人薄命である。

大提督ネルソンを迷はして、名譽ある彼の一生の頁に道德家のいふ一汚點を残さしめたハミルトン夫人は、美人であつたのはいふまでもなく、並に權勢を有つてゐた、こうなつたら全く

鬼に金棒、美人に名譽だ、當時の人々は一度ハミルトン夫人にお目通りを叶ふことを此上もない光榮とし争ふてその機嫌をとる爲めにあらゆる方法と術數を用ゐた、ところがこれほどの美人で權力家であつた彼女もネルソンが死んだ後は人から棄てられて顧みる者すらなくなつてしまつた、そればかりか、數年の後である、彼女はカライスの町の或牛肉屋の二階に詫住居をしてゐることが判つた、そして彼女の死後に残されたものは質屋の通帳ばかりであつたといふ。

政治家ビットの姪であり美人であつたが故に朝野の人々に媚びへつらはれてゐたヘスター・スタンローブも、老ひて零落し病みほゞけてその命を終つた。そして彼女は人生の果敢なきことを悟り「あゝ自分のやうなものは味氣なき浮世の見本のやうなものだ、豐滿なる肉も考へれば骨と皮だけだ、眞珠の飾りよりも尙美しいと嘲された自分の頸も、今はゴボーのやうに醜くなつてしまつた」と言を残して死んだ、悟れば悲惨である、悟る勿れ女性よ皺だらけになつても「これは縮緬皺だわ」つてな調子で、出来るものならコテでもあてゝゐた方がよからう。

馬鹿げた話・途方もない話

日々諸君の日に映じ、耳に入るは血なまぐさい刃傷沙汰か詐欺横領だ窃盗だ強盗だ、見まいとし、聞くまいとしてもこれは社會の事實なんだから致方ない、そこで息詰つた窓を明けろちつとはのんびりと取りとめもない話もしたい聞きたい、古今東西の漫談をあつめて、肩ひぢ張らさず、舌なめずりをして見やう。

虱 と 蚤

さて諸君よ諸君、諸君の蚤が如何なる理由で赤き色を帯び、虱が何故は臍の邊りにねばり付いてゐるかを御存知か？おそらくこんな途法もない質問に逢ふたこともあるまいし、こんなバカ氣たことに貴重な考へを無駄使ひしたことはあるまい、だが、斯様な質問をされた爲、諸君

は頭をひねらざるを得ないであらう、そして、いかに沈思黙考したところで、正確なる回答は出来ないだらう、種を明かして御覽に入れる。

虱が蚤に手紙をやつた、先づ拜啓時下——とやつたらしい、次に

「偕て我が親愛なる蚤君よ、隣に善くし災を恤ふは先哲の訓弱きを救ひ扶くるは聖者の戒めである、これに順ふ者は盛え、これに逆らふ者の亡ぶは、古今興廢の跡を見れば歴々たるものである、いま、君と我とはその境を接して共にうまき血を吸ひ肥たる肉を分ちあつてゐる、骨肉同胞とはまさにこのことで、誰かこのやうに仲よく共同戦線に働いた者が古今にあらうか、それは醜い泥合戦をやる政治家や内輪同志の斬り合ひをやつてゐる支那のやうなものではない。

然しながら君は天性快足を有す我々同族は此點はなはだ鈍なために湯灌の慘に會ふて天折しなければならぬ、此差まさに宵壤も菅ならざるものである、殊に人間の毒手一度び動き、苦き爪至るに及ぶや君は跳躍一番電の如くに飛び、影の如くに跡無く一瞬千里、何ぞそれ神速なる。

ところが我輩に至つては、蹣跚として汗流れ、氣息喘ぎ、まことに行動遅々、忽ち毒手苦爪の禍ひに遭難する、そこで、お願ひだが、今後は、バルチザンよりも、支那暴兵よりも怖ろし

き人間の手が動いて危険身に迫るときは、直に出兵——ではなかつた、君は同胞の好しみを以て我等と提携し、君我を前に挽き我れは君を後に推すの策戦に出で、頻出する難を脱れやうでないか」

風からの提携申込みに對して、蛋の返答は實に政治家的であつた「お手紙は正に拜見いたしました、貴翰の如く君と相提携し以て人間の毒手を避け、同胞繁榮の實を擧ぐるは、まさに千歳的美談と申すべきでありませう然しわが敬愛なる風殿よ、翻つて思へ——こんな風にいと懇篤なる書き出しで、さてその次ぎが餘りにも政治家的であらう。

「然しながら風閣下よ、人間の毒手たるやその動作あだかも暴風の如く、往き來るや倏忽倉皇の間に瞬息を容れざるものである、その間に於て君を扶けるの暇のないことはよく御存知であらう、お互に命の惜いことは、代議士が敵味方ともに解散を恐れるよりも甚だしい、突嗟の間に、我れひとり本能的に人間の毒手を脱れんとするの際、到底、君を挽いたり推したり、手をつないだりの暇はない、それをやつてゐたのでは、二人とも毒牙の餌となり、徒らに人間輩に笑はれるの愚を貽すのみでないか。

即ち、風閣下よ、君の今回の申込たるや君にも何等の益なく小生等一族にとつては損失があるのみだ、そこで小生はつらく君のために考へて見た、そして一つの名案が浮んだ、といふのは、君は徒らに天性の行動の遲鈍を敷くことなく、毒手一度び來ると見た時には、直に彼人間の腰間深く潛み、更に禪中に退くの方法である、斯くすれば容易に發見されることなく、禪の中はなかくに捜査の手の行き届かぬものである、而して、手爪、去ると見るや再び出で、西に聲すると見せては東を嚙み前に没しては後に現はれ、暴虐なる人間をして終夜奔命に疲れしめるのだ。

この術を繰返したならば、眠りを必要とする人間どもは、心身困憊して遂には君を捉へ難きものと諦めてしまふだらう、そこで思ふ存分に血肉を吸ふの手はとりも直さず君がために萬全の策である、此儀如何？草々頓首再拜。

蛋 之 助

風 左 衛 門 閣 下

この返事を受けとつた風は、はたと手を打つて、これなる哉これなる哉と非常に喜び、早速酒肴を用意して蛋を招待した風、が嬉しまぎれの大歡待に、蛋は酔ひつふれて、全身まつ赤に

色が變つてしまつた、そして、その後蛋の色は赤くなり、虱は常に腰間に棲むやうになつた—
何うだ諸君分つたか。

猿の尻尾

第二課題を讀者諸君に提出しやう、諸君よ諸君はなぜ猿の面が赤くて彼の尻に尾が無きが如くに短いかを知つてゐるか——尾長猿もある——など、半壘を入れてはいけない、普通の猿はみんなその面赤く、尻尾短きものである、そのいはれいんねんはかうである。

或日、もろくの獣どもが一所にピクニックかなんかと洒落こんだことがあつた、ところがこの歸り途に俄雨に遭つて、先を争つて傍のあばら家のひさしに逃げ込んで雨やどりをした、その時に、家の中の主人は獨り言して

「あゝ雨漏りといふものは恐ろしいものだ、家中逃げる場所もありやしない、ほんとに雨漏りといふやつは虎の狼や狂暴よりはまだ恐い」といふのをきいて、群獣どもは顔を見合せ

「おい、狼さんや、世の中にお前ほど亂暴な者はないと思つてゐたら、今聞くと雨漏りとい

ふ上手の奴がゐますぜ」

「ほんまにナ、虎さんや、わしも世の中にお前ほど強いものがないと敬服してゐたのに、雨漏りといふ化物が出て来たんでは敵はないね」

といふ、虎と狼の間答を耳にした此あばら家の主人は

「こいつは面白いぞ」

とばかり

「それ雨漏りだア……」

大聲で叫びながら外へ飛出した、驚いたのはもろくの猛獣ども

「やア——雨漏りが出て来る！」

といふと我先にと逃げ出した、こいつはますく面白いと、圖に乗り調子づいた主人は、一番最後に逃げ遅れてゐた猿の尻尾を掴まへてしまつた、さア大變なことになつた、とうく雨漏りに捉まつてしまつたと思つた猿は命あつての物だねとばかり一生懸命うんとこしよと力を入れて離れやうと満面朱をそゝいで引つぱつたところ尾は絶たれて繩に逃れ去ることが出来た、こ

れより後猿の面はまつ赤に、その尾は短くなつてしまつた——といふので御座る。然るに此説と反對論が一つ出て来た、それに據ると狐が極寒の時節に、よく鼈を捕へてこれを貯へ、そして冬を凌ぐことを見た猿公が

「おい狐君、君はうまいことを知つてゐるが一體、鼈を捕へる術は何うすればいいんだ」

と羨まし相にして聞いたものだ。すると狐はまさか同族の猿公をだます氣は夢すらなかつたんだらう「そりやね君、わけはないんだ、黄昏時に自分の尾を水中に漬けておくと、鼈がそれを御へるんだ、その時にそろ／＼引出してふんづかまへるんだ」

そこで猿公は狐の言葉通りにすると、時は嚴寒の折である、猿の尾は水に漬けたまゝ氷が張りつめてしまつた、いかに引こうが抜こうが動かばこそ、遂に滿面朱の如くにして漸く尾を氷中に残したまゝ去つてしまつた、即ち此時以後猿はその面がまつかに尾が短くなつたといふ。

權兵衛が種蒔きや

「權兵衛が種蒔きや烏がほじくる」といふ言葉は随分と人々の間に有名である、此出どころを

永いこと調べてゐるのだが、何村の何の權兵衛といふ者が、何がために蒔いた種を烏に啄ばまされてしまつたかの文獻を得ることが出来ない、ところが、これと相似た話で「權兵衛の蒟蒻骨折損」といふ話を見つけた。それによると、

權兵衛といふ男が蒟蒻を商賣として大そう利益を得てゐた、ところが、彼の妻君といふのが無類の悍馬な上に、べら棒な齧つたれで、權兵衛には一錢の金も使はせるといふことがなかつた、そこで權兵衛は

「あゝ、世の中に何がバカらしいといつて、金がありながら使へぬほどのコケな話はない、人生の貴いところはせめても出来る範圍で、氣まゝなことをすることでないか、それなのにこの俺は朝から晩まで働きづめで、しかもその儲けた金は使ふことが出来ない、何たる情ないことであらう」

と幾度か痛嘆したがその度毎に嬖左衛門から

「何を言つてるのサこの唐變木野郎」てな調子にやつつけられてべしやんこにならねばならなかつた。

権兵衛そこで愈々ますます人生のあぢきなきを考へるやうになり

「若しも自分が、此家から飛出し、あの八かましい嫌の傍から脱れ、何の拘束もなくなつたら随分のん氣に我儘自由が出来たらう」さうだ／＼とばかり或日妻君の外出した時を狙つて家出してしまつた。

即ちわが権兵衛どのは、それまで苦勞した總てを捨て、飄然どこへか姿を消してしまつたのだが、これを権兵衛の蒟蒻骨折損とは申してゐる。

この物語りの作者はこの一篇に對して、何の批判も加へてはゐない、しかし明かに権兵衛の骨折損を嗤つてゐると思はれる節がある、なるほど自分が汗を流して働いて儲けた總てを捨て去つて姿を消した権兵衛は、只に骨折損をしたばかりであるが、現代人からすれば権兵衛の苦惱は當然のことで若し権兵衛に日本の小説家ぐらゐな物をひねくつて考へる術を心得てゐたならば、彼は告白小説を書いて文名を轟かしたかも知れない、やはりこの話は内容から見ても権兵衛が種蒔きや烏がほちくる——とは若干の相違がある様だ。

女房の疝氣

無いもの盡しをいふときには坊主の髪、裸で尻つばしより、女の疝氣と並べ立てる、この頃の坊主、オールバックや七三分けなどのハイカラを生じたので、先づ坊主の髪は無いもの盡しからバイのバイのバイとしなければならぬ、裸で尻つばしよりも無理が通れば道理が引込み長いものにはまかれるといふ一面があつた見れば、あながち一概に無い——として片附けられるものでもない、殊に此頃いやはや途法もないことが法として通る、裸でケツを捨てる様な亂暴者も浪籍者もある世の中、裸ツ尻も時に無いことはないといふことになる。

然しながら、女の疝氣に至つては、これ生理學上に有り得べからざること、何ぼう女が太陽の落し兒であらうが男より偉かつた筈だと絶叫されやうが、割引して男女同權だとわめかれやうが、疝氣だけには罹らうたつて罹れまいといつて何も男が疝氣といふ病氣を持つが故に威張るわけではない、何が故に女は疝氣を患つて男と何等の權利を主張することが出来なくなつたか？

「バカなことをいふなよ」

と諸君から叱られるかも知れない、然しながら、そのお叱りのバカなことを申上げるのが本篇の目的なのである、女になぜ疝氣が無くなつたか？何と愉快なる課題ではないか。

病氣を神様といふもおかしいが、由來疝氣の神といふものはあま酒が大好きで、その反對に芥子が大の嫌ひだつた相だ、そこで疝氣の神一度下體中に鎮座しますの時（體中の何處に彼疝氣の神が宿るかは既に諸君御承知）患ふ者があま酒を飲めは胃腸の間に彌蔓するあま酒の匂ひを慕つて疝氣の神はそろ／＼と這ひ出し腰から腹へと入つて来る、若し芥子を喰ふ時はその辛辣さに堪え兼ねて彼は陰囊に潜み隠れることにしてゐた。

さて、こゝに一人の疝氣患者があつた、その友達に非常に頭のいゝ者があつて、

「そりや君、芥子を喰ふに限るよ」

と教へておいて、一方その妻君には

「あなたは、あま酒を飲みなさい」

とケシかけた、さてこの夫婦、一方は芥子を喰ひ一方はあま酒を飲んで、その夜夫婦が當然の

いとなみを行つたらしい、男の體中に巢を喰つた疝氣は芥子實めに會つて顔をしかめてゐる矢先きに、妻君の方にあま酒の匂ひがしたので、得たり賢しと、亭主の方を脱出して、妻君の方へもぐり込んでしまつた。

癒つてこれほど喜ぶ亭主と、あゝら今度はわたしに傳染したワと悲しむ細君とを見比べて、ヤリとした件の頭のいゝ友人は

「それ／＼、早く芥子を喰ひ給へ」

と今度は細君に芥子を喰はせた折角あま酒の香にむせんで悦しがつてゐた疝氣の神は、俄然としてお見舞を受けた芥子の猛攻撃に、アツと驚いたが居堪たたまらず、例の手で陰囊の中に匿れやうと逃げ出したところ、これはしたり、細君には陰囊がなくて、彼は忽ち足を踏み外して墜落して瀕死の重傷を負ふた。

幸ひに疝神は手當の甲斐あつて一命はとりとめたが、これ以後子々孫々を戒めて、再び汝等忘れても婦人を襲ふなかれと家憲を作つた、即ちいまに至るまで女に疝氣のない理由である。

雕とミソサザイ

「おい雕君」

かう呼びかけたのはミソサザイである彼は

「僕はきのふ猪を食つたが、とてもうまかつたよ、君は猪を喰つたことがあるかい」

と山くぢら讚美をやつたものだ、勿論われ／＼が牛肉屋、馬肉屋で、あのあぶらこくて、しかも臭味のある赤い肉片を舌にするやうな譯でなく、彼らの仲間における此質問は、ミソサザイが猪を生け取つて食つたことを意味するのだ、そこで雕なるもの首を捻らざるを得ない。

「へエ、それは初耳だが、一體君は何うして猪を獲つたかね」

これで得意になつたミソサザイは「そりや君、智慧のある者となない者とはちがふよ、僕はね猪の耳を潜つて腸に入り、ぐり／＼とそれを啄んで噎してしまつたのだ、そりや實に容易な業だよ」

といふのを聞いた雕眞赤になつて怒り出した。

「生ちやんをいふなよ、お前のやうな小ぼけな野郎が猪を噎せるなら、俺さまだつて苦勞はしやしないや、——然し、お前が獲れるものを俺が獲れない法はない、よしッ俺と一所に來い手前の目の前で獲つて見せるから」

かうした譯で、雕はミソサザイを引つ張つて山谷を翔まはつたところ、偶々、二足の猪が並んで岩の上に臥てゐるのを發見した。喜んだのは雕

「おい、ミソサザイのチビ公、お前はたつた一疋だが、俺はいまあの二疋を一度に獲つて見せるからよく拜見しなよ」

と勇躍一番、翼をさめて下りむんづとばかり二猪を攫んだ。

驚いたのは猪、折角晝寝の、夢を結んでゐたところを、やつといふ氣合もろ共つかまれたので、ガバとはね起きるや否や走り去らんとした、さはさせじと雕はうんと力んで離さばこそ、

——だが、つもつて見ても雕の力と猪の力では、その差幾ばくかは判り切つてゐる、惣ばつた雕は、遂に双方にのがれんとする猪の爲にその股を裂かれて無殘の最後を遂げてしまつた

二兎を追ふ者一兎を得ずの諺と同じで、惣ばり雕股を裂かるといふのはこれから始まつてゐ

る「おだてともつこに乗りたくない、その癖もつこに乗りたがる」といふこともあるが、ミツサザイは果して彫が煽動したものとすれば、これ古今に絶する煽動家で、うつかりその手に乗った彫のバカさ加減は、そんじよそらにゴロ／＼してゐる飛上り者と同様、物笑ひの種にはかりなつてゐる代物である。

お菓子子の家

世を擧げて不景氣といふ、現はれる事實と統計とは全く懸値なしに不景氣である、然し骨董の賣立ては意外な景氣を呼び、實際の役には立たぬ代物が一品何萬圓で競ふて買はれる世の中でもある、えいまゝよ、お話だけでも景氣のいゝ所をお目にかけてやうか。

ある男 あんまり金があり過ぎて、遣つても費つても使ひ切れぬ、ゆふべも第十三番目の妾の許へ行つたが、それも鼻について、別段これぞと面白いこともない、ところが、ふとした調子にその妾がブツと一發失禮なことをやらかした、この失禮なブツは實は愛嬌のあるもの、時も時として、妾にとつては腹の鬱晴らし、彼にとつてはへい凡を破凡にする役には立つた、然し

俄に賞める譯にも行かず行儀のよくないやつぢやナ」

とへい凡にやつたところ、妾の方は眞赤な顔

「ほんとうに失禮いたしましたして愛憎がおつきになりでせう」とべそをかいた。

これは却て失禮なことをいつたと、彼は

「何の、それしきのことと愛憎までつきるものか、愛嬌があつていゝよ」と極めて軽い氣持ちになつてゐると

「お、嬉しいこと」

といはせもはてすに又一發、あれ！と顔をかくす妾に

「おい、お前それぢや餘り疑ひ深いといふものだよ」

といつて歸つて來たが、何うしてそんな事件ぐらゐで彼が有り餘る金から來てゐる倦怠は癒りやうもなかつた。

ところが、先日から工事を急がせてゐた彼の「お菓子子の家」といふ奇想天外の離れ座敷が竣

工した、何せ金に糸目をつけずに、チョコントの柱だのキャラメルの庭石などといふのだから、彼も若干退屈凌ぎにはなつた、そこで、これだけでは、まだ幾らも金ばかりぬから、このお菓子の家新築祝として、友人を招待して一々大宴会を催したものだ、讀者諸君、その招待に筆者も出席したと思つて下さい。

いや驚いた、疊建具一切が、内外の珍菓で出来てゐるんですから

『いや誠に結構な思ひつきで』

と申上げるより言葉も出ない、そのまた招待の料理が、一切菓子づくめと来てゐるんで、御馳走になつたはいゝが非常に気分が悪くなり、堪らなくなつたんで、一寝入りゴロリ横にならせて貰つて、さて家に歸つて来たがどうもいけない。

すると筆者の家内が『あなたそれは風をお召しになつたんでせう』といふ、商賣柄どうも風邪の氣味らしくもないと首を傾げてゐると、家内は餘り高からぬ鼻の上に小じわを寄せて『だつて座敷がお菓子なら、布團はせんべいだつたでせう』

諸君、いかゞです、これ位のん氣な話では——まだ足りませんか。

強 氣 同 志

勝氣と勝氣とが寄り合ふと、鐵と鐵とが合した様にそこに火花が散らすには濟まない、悟り濟ましてしまへば何でもないことだが、人間といふ動物は、生れぬ前に既に精蟲時代に生存競争強肉弱食の理によつて勝つて生れて來たほど強氣なもの勝氣なものである、僕の家の中身に負け嫌ひの女がゐる使ひにやる時その家の道順を教へたら、何うしても合點せず、だつて奥さんは路次を入つて左り左りと仰言ひますが、向から來たら右でせう——といった女があつた死んだ文士岩野泡鳴君が、餘り得意でないフランス語の翻譯を頼まれ、疑問の箇所があるので、大杉榮君の許に聞きに入つたことがある、岩野君の譯はまるで誤譯なので

『君これはこういふ風に譯さなければならぬよ』と大杉がアゴ髯を撫でつゝドモリながら教へると、岩野は聞きに行つてゐながら容易にそれをハイ／＼とは承知しない。

『だつて君、僕の譯したのだつて、やつぱり意味は同じだらうぢやないか』
といふ調子だつたといふことだ

この岩野泡鳴君が或黄昏時にお濠ばたを歩いてゐると、先に行く職人風の男が尻をぶつと一發やつた、風下だつたかどうか知らぬが、先に行く奴に尻をかゞされた泡鳴先生、例の勝氣がむらくと起つて、スタ／＼その職人を追ひ越すが否や、無理に製造した一發を復讐した、するとその職人がまた負け嫌ひの男と見へて、急いで泡鳴を追ひ越し、又も一發やつた、泡鳴何條黙すべき、今度は駆け足で彼を追越し、實に苦心慘膽の一發をやつてのけたが、どうも後が續きさうもない、若し更に職人に追越されて見舞はれては到底敵し難しと見てその儘トットと駆け出して逃げ出したといふ話がある、以ていかに彼の負け嫌ひかを證するに足る。

この泡鳴に舌を捲いた大杉君と雖も、決して何事にも負けてゐる男ではなかつたらしい、その生前の行動を聞くと、彼れまた徹頭徹尾、勝氣と強氣の一點張りで通した男らしい、大杉君が野枝君と同棲の最初、本郷の菊富七にゐた時分、同じく本店に陣取つて「遊蕩文學撲滅」で大いに文壇を震撼させた赤木桁平君がゐた、筆の次手に大杉を攻撃したことがあつたので、負けてはゐない大杉、同じ家にゐる赤木だ、何も筆を向て喧嘩をせずとも、直談判で行け、とばかり赤木君の部屋に案内を乞はずにズーツと入り込み、大いにドモリの雄辯で反駁したらしい

ところが何せこの赤木君が又大の負け嫌ひらしく、ドモル大杉を押へつけて、大いにまくし立て結局、

「あれは僕の偽らざる表現だ」

とやつた、すると大杉目を白黒させながら、ドモつて遂に言葉が出ない、いきなり、立つて行つて赤木君を蹴飛ばしてさて曰く

「ア、ア、あれが、キ、キ、貴様の、ヒヨ、ヒヨ表現なら、コ、コ、コ、これが俺のヒヨ、ヒヨ、表現だ」

イヤはや恐れ入つた強氣同志ではある。

蛙のお禱り

蛙のお禱りといふ話がある、柄にもなきことを願ふなかれ、己れを知れ、分を守れ、謙讓であれといふことを諷刺するに以て妙なるものであるが――

「ネー君、我々蛙たるもの、四肢百骸、耳目口鼻すべてこれ人間と同じなのに、血のある動物

の中で人間が萬物の靈長なんかと威張つてゐるのは、人間は立つて歩くからぢやないか』
と一疋の蛙がいひ出すと、どこにもあるノー天気な奴が

『さうだともく、苟くも我々蛙に於きまして、若立つて歩けるやうになつたら、彼奴人間輩に名をなさしめるんぢやねえ』

といふやうな啖呵をきる。

するとまた一疋の奴は

『そんなら靈顯あらたかな清水の觀音さまにお祈りして見やうでないか』

といふやうなことになる、彼等は連れ立つて清水寺へと祈願をこむること七晝夜、立たせ給へ歩ませ給へ、南無清水觀音菩薩と、この時ばかり酒蛙くでなくガアノと禱り立てられて面喰らつたのは觀音さま、根が佛性のことゝて、頼まれて見れば捨てゝもあけず、その至誠に感じて、蛙が立行の願を聞き届けてしまつたから、サアことは面倒になつて來た。

七日七夜の滿願の朝、あら不思議やそれまでは四ツん這ひの蛙が立つて歩けるやうになつた喜んだ蛙ども

『あゝ難有や觀音さま、御利やくを授け給ふた』

とばかりもとの古池に歸つて行かうと喜び勇み

『やーい、これ見る人間どもよ、お前ばかりが偉いぢやないぞ、おいら蛙さんもけふこれから立つて歩ける、ツータ、タタツタ、ター……』

足拍子そろへて歩き出したまではよかつたが、さて御承知の通り蛙の眼といふものは後向きに付いてゐる、折角祈願をこめた手足は前向きだが、眼が後のために、彼等は往來まゝならず古巢の池に歸らうとしても歸ることが出來ず、いまさら觀音様も聞えませぬと怨じ立て、口説き立てたが遂に及ばず皆な瘦せ枯れて日干になつて死んでしまつた、俗にこれを『蛙のお祈り』といふが蛙の眼が後方に付いてゐることから起つた話はこの他にまだある、だがそれは總て人か動物同志の出來事で、このやうに佛さまをもつて來たのは稀らしい、大體觀音さまといふのはこれほど人が悪い——ではなかつた佛が悪いことをするお方か何うか知らぬが、いまの世、權勢か金力か、智恵か、觀音さまの代理をする偶像に向つて、身のほどをもわきまへず、飛んだお願をした結果が、恰もこの蛙のやうな憂目を見て、お話もならぬ人々がその邊にもおいで

鼠の娘

にならぬかナ?

「ネーおら」

「何です、あなた」

「何ですぢやないよ、こないだも話した娘の一件さ、もういゝ年配、娘もさぞや、さぞだらうと思ふから、對手を見つけてやらなくちやね」

「だから、あの時もお願したぢやありませんか、妾は一切口出しをしませんから、あなたにお任せする……と、いゝえ、決して四の五の苦情は申上げません、あなたのお目がねに叶つた婿でありますたらー」

年ごろの娘をもつた兩親はけふもこんな話して背筋を立てた、それも娘可愛ゆさから——但しこの會話は人間ではなくて、鼠の兩親のチユウ／＼話なのであります。

さてそんな工合で、この子煩悩な鼠の兩親は、娘が一生安樂に暮せるやうな好配偶を得んも

のとあれか、これかと物色して見たが、そこはそれ帯に短し、褌に長しのたとへの通り、慾目
が加はつては尙更のこと、この兩親はほと／＼考へあぐね、尋ね疲れてしまつた、がそこで、
つく／＼と頭をしぼつて考へついたのは、お天とう様のことだ、このお天道さまを婿にしたな
ら、天下何ものも怖るゝ對手はない、よしこれなんめりと勇みに勇んで父鼠は天道さまを訪問
したものである。

「えー天道さま、小生ことは粟倉の中に住する鼠輩であります、貴下の高名をお慕ひ申して
推參な仕まつた次第でございます」

てな調子で持ち上げておいて、どうか我が愛娘を貰つて頂きたいと結論した、これを聞いたお
天道様は

「鼠殿とやら折角の申越しながらそれは大きな了簡ちがひといふもの、天下無敵の如く思はれ
る小生といへども、昔は阿修羅といふ者に追はれて、危く食はれ相になつたことがある、その
際は最後の術を使つて幸ひに逃れることを得た、それから蝦蟇の精は、屢々我輩を蝕んでしま
ふ、然しこの二つの奴は常に在るものではないからその来る時は逃れる術があるとしても、あ

の雲を見給へ、彼奴は常に来つて小生の明を掩ひ、あまねく下界を照さんとしても依姑輩の
結果を齎すやうになる、いかに切齒扼腕しても如何ともすることができない、君の可愛い娘に
憂目を見せても氣の毒だ」

なるほど——と思つた父鼠は、その足で雲の所へ行き、同じやうに娘を貰つて呉れと頼んだ、
すると雲之助は

「いや、我輩より強いものに風といふ奴がある」

といはれて又もなるほどと、今度は風の許を訪ねて懇々と頼み込んだ、と、風の曰く

「いかさま、我一度び怒つて疾走するや萬物悉く恐れおのゝく、わけて女は、袂を掩ひ、眉を
擧めて深く家の中にかくれる、此時、さらに突き入つて女を見やうとすると、そこには牆とい
ふ奴がゐて、マア〜待つて——と防禦する、僕はいつも彼の爲めに手を空しうして歸つて來
なければならぬ」

「あ左様か」

ボンと手を拍つた鼠は牆の所へ行つて、縋々と申し立てた上、娘を貰つて呉れといふや、牆の

らふには

「いやお話によく判つた、だが鼠君、僕は暴虐なる風の助を防ぐが、一體足下鼠輩は、僕等の
手足を食つて押し倒すでないか僕の力は到底足下の徳に及ばないよ」

いやなるほど、足を棒にして娘を賣らんとした對手は、遂にやはり鼠でなければならなかつ
た。この話はよく昔からある話術の一つの種である、然し理があつてトボケてゐない、次は一
つ飛んでもない所をお目にかけてやう。

何故犬は片足上げて小便するか？

僕の知人のある婦人が、日頃生神さまとして信仰する或坊さんの所へ行つて、奇抜な質問を
やつた。

「もし和尚さま、地獄、極樂、現世、未來のお説教は、漸やく分つたやうな氣がしますが、そ
の現世を楽しく送るために、何とか金儲けをしたいのです、何と和尚さま、金儲けの術を教へ
て下さいませんか」

とやつたところ、流石は高僧、たちどころに

「そりやお前さん、片足もち上げて小便をすればよい」

坊主に金儲けの相談も素頓狂だが、その返事に、片足あげて小便をしろ——は又あまり禪問答的でないか、これには婦人も面喰つて、その意味を何う解してよいかに苦しんだ、片足もち上げて小便——しかも婦人に向つてのこの答へは、ますます謎を深めるばかり、和尚さんにたづねても、笑つてそれ以上を答へない、それが解らぬ位では金儲けもあぶないものだ、とばかり不可思議な答案を説明しては呉れない、そして遂に僕のところへまで訴へて來た。

片足もち上げて小便をしろ、これが女に對しての教義とすれば、甚だ怪しからぬ連想まで沸く、然しその坊さんは僕も知つてゐるが、まことに文字通りの高僧である、まさかそんなこと……そこで、小生も首をひねつて考へて見た、その結果

「は、ア」

と感づいた、片足もち上げての小便、それは犬の眞似をしろ、といふことでないか、犬の眞似をしろ、金儲けするなら犬の眞似をしろ、さうでなければ金は儲からぬものだ、そこで婦人と

共に大笑ひをしたことがある。

それで片足小便の方は解決されたが、爾來小生の頭には、犬がなぜ片足もち上げて小便するかの大問題である、種々と生理學、物理學、さらに哲學上からまで研究したが數年間は何等の發見を得なかつた、ところが、最近に至つて或文獻によつてそれが鮮明された、惜いやうな氣がする、苦心の研究の結果を、たやすく發表することは惜い、然し思ひ切つて讀者諸君に御披露することに致さう。

何故に、犬は片足を舉げて小便をするか、それは、そも／＼——と開き直りたいほど我輩を苦しめた研究なのである。

僧空海が唐土に行つて修業の道すがら、麥を干してゐるのを見つけた、その頃、日本には未だ麥がなかつた、といふことだが、果して空海が唐に赴いた當時、麥が日本に無かつたかどうかは未だ研究の手が届かずにゐる。

「東土未だ麥種のあらざるを思ふや」と書いた本がある、即ち空海は「こうしたものを持歸つたなら、嗚かし國を利することができらだらう」と「鈔ふて之を袖にたし」といふ、が茲で一

言さして貰ひたいことは、眞言の開祖ともなつた空海が、いかに路傍に乾してゐたとは申せ、誰かその所有主のあるべきその麥種を、斷りもなく袖にしたとはこりや何うぢや。

手つ取り早くいへば、空海上人は泥棒を働いたことになる、如何に國家の爲とはいへ、泥棒は泥棒である、勿論支那の犬だからとて、日本の高僧空海が、天下國家、萬民の幸福のために泥棒を働いたと勘づく筈がない。

「こりや怪しからん賣僧だぞ、麥の種泥棒だ、ワーン」

と一聲吠え立てると、虚を吠えてさへ萬犬これに和するの犬族である、いはんや實を吠えたのだから堪らない。

「そりや泥棒だぞ、ワーン」

ワーンとばかり群がつて吠え立てたので、村の人々が寄り集まつて、泥棒の空海をつかまへてしまつた。

ところが、さすがは空海上人である、奇蹟を行ふ術を知つてゐた、それ泥棒とばかり村人が嗅き立てた時、空海は奇蹟を以てこの麥種を日本の國へ歸つてしまつたのだ、村人が彼を泥棒

として捕へて見たが、空海を素裸體に見ても、盗まれた筈の麥種は一粒も見當らなかつた村人は粗急を詫び、隠つて吠え立てた犬が悪いといふことになつて、この畜生ども！とばかり居合せた犬の一足を折り取つて、空海に謝罪の意を表さうとした。

この時の空海のことである、彼は麥種を盗んで居りながら、證據物件がない爲めに、却て發見者であり告發者である犬が足一本を折られる破目になつた時空海おもむろに衣の袖をまくり上げ

「いや／＼諸君よ、相手は犬である、何かの間違ひをすることもおぢやらうぢやないか、愚僧への疑ひさへ晴れ／＼ばもう結構犬の一本足など所望はいたさぬ助けておやりなされ、それが慈悲と申すもの、情は人の爲ならず、のう皆の衆、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」

といふと極て涼しい顔をして行き過ぎてしまつた、おかげで一本足を斬られずに済んだ犬族はその後、この一本の足は空海さまの授かりものだといふので、汚しぢやならぬと尿する時は必ず一本の足を擧げることを決議して之れを實行するやうになつたのだ。

猫・蠅・松・風

三味線が猫の皮で、鼓は猿の皮であることは諸君既に御存知のところ、これは猫がよく膝にもたれたがり、猿が肩に乗りたがることから、その皮を利用したものだといふ、然らば、その三味線一丁で商賣をする藝者をネコと呼ぶのは、その邊から出たのかと思ふと

「うんにや、藝妓はよく人の膝によりかゝり、ネーあなたニヤーン」といふやうな姿態を演ずるからだといふ。

藝者がネコといふのは餘りに普遍的なことであるが、諸君は藝者をヤブと蔑稱する以外にまだ一つ、何と呼んだらいゝかを御存知か、我輩いやくも藝者の分際として、折角世の中からかくれてゐることをほごくり出し同業のアラをさらけ出すの愚をやらなくともよさ相なものだ

が研究の飛ばちりはどこへ行くかそれを止めてゐては、何もならぬ、諸君よ、昔は藝者のあだ名を「蠅」と呼んだものなのだ。

何が故に藝者を蠅といふか、或本にかうある。

「それ下俗に醫を蠅となすは、蠅は常に脚を以てその翅をかひつくらふが故なり」と明記されてある、昔は藝者が羽織を着、坊主が袈裟を纏ふは常例としてゐた。

「ハ、ーンこれは疝氣が頭に上つたので御座るナ」

てな調子で、しかつめらしく羽織の襟を直す仕ぐさは、歌舞伎之居を見れば如實に表されてゐる諸君よ何うだ、以後はこれを復活して、ヤブをやめて藝者を蠅と呼ぶことにしたら。

事の序だから花魁をなぜ「松の位」といつたかを御披露に及ばう、昔秦の始皇帝が道で俄雨に會つた時、彼は松の木の下に雨やどりをした、何かな皇帝の雨やどりの宿である、その松に對して、太夫の位を授けた、そこで太夫は松の位だ——といふのだが、是はどうもチト怪しいところがこの話を聞いた僕の友人が

「太夫が松の位なら、淫賣は風の位か」

と聞いた人がある。何故? だい、と聞き返したら、だつて淫賣は安もの、はなを散らすぢやないか——と澄ました顔をされたには、小生シャツボを脱ぎ申候次第である。

鼻が伸びる

ナショナルリーダーの第何巻かにソーセージを鱈ふく喰ひたいと祈つた夫婦が、餘り慾ばつたので、鼻の先にソーセージがぶら下つた話がある、これは無論あちらのことであるが、日本にもそれに似た幾つもの話がある。そのうちの一つ。

ある男が、働かず、借りず、何とかして坐ら百金を得させ給へと清水の観音さまに七日七夜の祈願をこめた。

【筆者註】 かうした話は、どうもお祈りする對手が観音さまに多く、その日数は七日七夜が多く、そして観音さまがお聞き届けにならぬとお話にならぬ。

この願ひの筋を、聞届けたといふのだから観音さまといふ方は、何でも屋だ。どうだ諸君も一つお願ひして見たら……

坐ら百金を得たいといふ輩のいゝ願ひをお聞届けになつた観音さまは、小鼓一面をその男に與へて、

「お前の願ひは一度だけ聞届けてやるが、この鼓は、こう、こういふ風に使ふものなのだ」と耳うちしてその姿を消してしまつた。

その男は、有りがたや〜と三拜九拜して、その鼓をもつて家に歸らうとした時、道で一大名がお通りだ「下に寄れ〜」の聲だ。その男は「占た〜」とばかり、傍のら木陰に身をひそめ観音様に教はつた通り、鼓を一つボンと打つた。するとあら不思議や大名の鼻は忽然として隆起し、乗物のカゴの戸を破つて突き出しあれよ〜といふ間に二丈ばかりもセリ出してしまつた、驚いたのは大名ばかりでない、お側の衆は槍槍なすところを知らず、たどろろ〜と立ち騒ぐばかり、勿論醫者はこの奇の治療法のあらう筈なく、あつたのでは面白くない。そこへ現はれたのは件の男である。

「いかに方々お騒ぎあるな、若しやつがれに百金を給はらば、忽ちにして殿の病氣は癒して御覽に入れる」

としやあ〜と出たものだ、勿論困り抜いてゐる矢先である、一議に及ばずこの見も知らぬ男も時にとつての神様とばかり

「どうぞ、そちらは救ひの神百金はおるか——」
といふやうな事になつてしまつた。

そこで、この鼓をもつた男はまた樹蔭に入つて、今度は鼓の裏の方をボンと一つうつた、その聲に應ずるが如く、大名の延びた鼻はだんくと縮まつて再び人々があれよくといふ間にもとの通りに癒つてしまつた、喜んだ大名は

「そちらは不思議な醫術を心得てゐる、殊勝の至り、早速、褒美の金を與へよ」
と即座に百金を與へた。

喜んだ件の男はかねて希望の百金と、その鼓を大切に携へて家に歸り、今日の出来ごとを、得意になつて妻君に話した、するとこの妻君は豫々自分の亭主ながら働きのないのに呆れ返つてゐる折なので「何を癡言をいつてゐるのさ、お前さんは夢でも見てゐるんだらう」

とそつぽを向いた儘とり合はふともしない、そこで口惜くなつた亭主は

「そんならお前その鼓をたゝいて御覽よ、どんなことになるか目の前で見せてやる」

やりますとも」といふので妻君ボンと鼓をうつや否や亭主の鼻は延びるく、止め度もなく

延びる、びつくりしたのは妻君

「あら大變だわ、あなた大變よ、早く縮めて頂戴よ」
と惶て出した。

そこで亭主は徐ろに

「それ見たことか、どうだ恐れ入つたらう、いゝかい、今度は鼓の裏の方を一つ打つんだ」

英雄の如き心持でいひつけたが、妻君の方はいくら働きのない亭主でも天狗さまの十倍などの鼻になられたのでは大變と氣が顛倒してゐるところなので、裏だ裏だといふ聲も耳に入らばこそ、又もやボンと打つたのは鼓の表面の方だつた。

間違ひとはいひながら、鼓の方に遠慮はない、打たれたからは正直である、今度は妻君の鼻がせり出し初めた、驚いたのは妻君、亭主も共々

「それだから、あれほどいふのに、表面を打つてしまふからそんなことになるんだ、早く裏を裏を——」

と叫んだが、然し氣狂ひのやうになつてゐる妻君にはその見境と餘裕とがなくなつてゐた。し

きりに鼓を打つのがみな表ばかりだったので、二人の鼻は延び延びて相もつれ、遂に鼻が絡み合つて死んでしまつた。非分の願をする勿れと、この話の作者は附け足してゐる。

源五郎鮎

源五郎鮎といふのは鮎の一種類かと思つてゐたら「奇談一笑」といふ本に據ると、源五郎といふのは鮎の別名らしい。時代が分つたのではお話の理につむ、これも時代は分らぬ、江州湖中といふからは琵琶湖であらうが湖中に潜んでゐた龍が、さて之れから天に昇らうとする時に湖中の鮎どもが數萬寄つて来て何うか私たちも一緒に天へ連れて行つて下さいと頼み込んだものだ、そこで龍は「よしよし、そんなら鮎の衆よ、君たちは俺の鱗を啣へてゐろ」と言附けて鮎の望みを叶へてやつた、そして中天に至つた頃龍は鮎どもを警めて「おい鮎君、君達はしつかりと啣へてゐなければいけないよう上天も間近くなつたんだから、しつかりと離さぬやうに僕の鱗を啣へてゐなよ、決して口を開くんぢやないよ」と注意を發した。

すると鮎どもは

「ハイ」

と返事をしたからたまらない、忽ち紛々として雨の如くに中天から眞ッ逆様に落ちてしまつた。此時恰も、その下にゐたのが錦源五郎といふ者で

「ヤア鮎が降つて来た、こいつたまらねえ」

とばかり、その鮎を悉く獲つて、これを賣り大いに利を得て自分の富を積んだといふが、まさか、何んぼう龍の鱗に悉く喰ひついてゐた鮎だつて、高が鮎のこと、何萬尾を賣つたところで、巨萬の富はちと大袈裟過ぎるが、何しろ若干の富は得たことであらう、その爲めに鮎のこゝとを別に源五郎といふのだといふ。

物を盗んで来た犬が水に寫つた自分の影を見て、それが別の犬だらうと思ひ込み、その犬の啣へてゐる肉片が欲しくなつてワンと一番叫んだ爲めに、あつたら自分の啣へてゐた肉を落した話はある、筆者自身も幼い頃に、茶碗を口を吸ひつけて得意然と歩いてゐる時、母から呼ばれたので不覺にも「ハイ」と返辭をした爲めに落して破つた記憶がある、口を開くべからざる時に開いて「斯の不覺をとる——道話として見なくとも面白い寓意がある。」

白鼠と猫

「いかゞ？このほごでありんすはいと味ですよ」

先日或粹すじの御婦人からこういはれたことがある。そこに出てゐるのは、お茶受け鹽せんべいだ。

「え？」

問ひ返さざるを得ないではないか。ほごでありんすといふものが一體何であるか面喰つてゐる矢先きだ。するとその婦人は、さもいたづらさうな眼から愛嬌をこぼしながら

「お分りにならない？ほごでありんすヨ」

何故に鹽せんべいをほごでありんすとは申しはんべるか、聞いて見れば何のこと、或落語にいづれば、チャチな客であらう、お通しものに鹽せんべいの出た女郎屋の客があつたと思ひ給へ、ところが敵娼がどうもその鹽せんべいを食べたくて仕方がない、さりとて初會のこのお客の前頂戴いたしますとバリ／＼やるわけにも参らず懐紙にそつと包んだのは、ことによせて

室を出てバクリやる氣だつたんだらうが、逸早く見つけた客

「お前それは何だい」

に、花魁は見取られて耻をかいては一大事と、ぐつとそのせんべいの包を呑み

「なアにほごでありんす」

よつて以て鹽せんべいをほごでありんすだといふのだ、分らぬのは尤もな話こうした粹なことがはからず流行となるものだ。

これについて思ひ出すのは、これも落語の材料のやうな話だが、或呉服屋の番頭が至つての白鼠で、懐工合がボカ／＼してゐる、この白鼠番頭が茶屋へ通ふのだが、どうもあぶく錢をためてゐる割合に、出来がケチである、そこで茶屋の女房は何かとチャホヤして料理もとらせ女もよばせたい算段から自分で三味線をとり出し、爪弾で二上りかなんかやりながら

「おうたひ遊ばせよ」

といふ様な調子だつたらしい、そこへ歸つて來たのは此家の亭主で、つまらぬお客に變にチャホヤすると若干甚助を起したのだらう、女房を勝手元へ呼んで

「なんだ馬鹿々々し、肴一つとらぬお客に三味線までひいて勤めなくともいゝではないか」と劍つくを喰はせると女房

「何をいつてるのさ、かうして猫の皮であの白鼠を取込まう謎ぢやないかお前さん」亭主はまだハツキリせぬ。

「だがな女房、その氣だつたら撥を出しとけ、鼠とる猫は爪をかくすー」といふぢやないか」

三井寺の釣鐘

三井寺の釣鐘は辨慶が引づり上げたとか、引づり下したとかとにかくその際にヒビが入つたといふ傳説がある、それは實はこの話について、何れでもよいことで、その三井寺の釣鐘が或日龍宮に遊びに行つたことがある。

ペラ棒なことを申すな、と申すな、辨慶さんにワラレた釣鐘は、ころ／＼とコロンで龍宮まで遠出と洒落こんだものだ、すると乙姫さまは

「あゝらづいぶんしばらくね、かねちゃん、此頃景氣は何う？」

といふやうな歓迎の辭の皮切りをすると、お鐘ちゃんも

「ほんとに御無沙汰ばかりで済みませんわ」

といふ譯、それから後はベチャ／＼、クチャ／＼話はいつゞきるべくも思はれない。

そんな工合で、一體お鐘ちゃんは乙姫さまと女性同盟の相談やら浦島太郎をだました前後の事情など語り合ふこと一日、さて夕景、乙姫さまはいさゝか心配顔になつて

「時に鐘ちゃんや、お前さん、來るときはココンで來たからいゝやうなものゝ一體歸るときは何うして歸る氣？」

いはれてのん氣な鐘ちゃんも

「あら、ほんとにさうね、妾何うしやうかしら」

とベツをかき出した。

その折柄龍宮の庭先きを通かゝつたのは田原藤太秀郷なり、乙姫これを逸早く目にとめて

「オーイ色男のターさん、一寸このお鐘さんを引き上げて連れて歸つてお呉れでないか」藤太早速合點して鐘ちやれを抱へて引上げる。

「いよう、やけますッよ御兩人、鐘ちゃんはターさんに水上げしてもらふたッよ」と乙姫さんが彌次を浴びせる、お鐘はいゝ氣なもので
 「辨慶さんに疾うにワラレたのヨー」

落語 えつせんす

これは落語の筋にでもなりさうな噺「大寄せ話の番附」といふ本にのつてゐる二つを、その儘に轉載する、所の名言葉など古いまゝだから、御推讀をお願する。

所 さぐり

春彌生の頃旅をして宿をとりけるに、合宿の人も皆大阪の人と見へける故、互に言葉をかけると

客「和尚さまあなたは大阪と見へますが、どの邊でござります」

和尚「ハイ私はした寺町の南側でござります」

客「下寺町に南側はござりません」

和「イヤ一番南の遊行寺でござります」

客「ホーンに南側ぢやな、時にこちらの隣りのお客様はどの邊でござります」

隣客「ハイ私はお妓の筋のこいのでござります」

客「お妓の筋のこいといふ所は？」

隣客「ハイ、げんさい橋のつめでござります」

客「コリヤ面白い。もうしあちらの隠居さま、あなたは大阪どの邊でござります」

隠「ハイバ、のお〇〇にしらみがわきまして——」

客「もうし、左様なことたづねてはゐません。お前さまの所は？」

隠「だから、ばゝのお〇〇にしらみがわきました」

客「ハテおかしい所ぢやな、どこでござります」

隠「ハイ、しらが町の観音前ですよ」

彼岸ざくら

春きさらぎの頃にて有けるが、旦那申しけるは

「これさ今日は酒の肴に、いかの木ノ芽あへをして置いてたもや」

下女はかしまつて表へ出て、子供の持遊ぶ風屋へ行き、いろ／＼買ふて戻り、木の芽みそをぬりておきける。旦那はそれとは知らず

「最前頼んでおいた木の芽あへ出来てあるなら出してたも」

と言へば下女はかの風を持出でける。これを見た旦那

「エ、ゑらいことをしたナア扇いかも味噌だらけ、鬼の面にもべつたり附けてある。五右衛門の顔も味噌だらけ、こりやいかへ間違ひである。これは糸つけてのぼすいかぢやがナ」

と言へば下女は

「春の木ノ芽立ちでヨウ上せませす」

芝居湯

道頓堀の芝居近所に始めて風呂屋できけるに、その名を「芝居湯」と名づけ、表の行燈は芝居のやぐらの形にして、幕を書いて紋をつけ、始めの日は門口に「今日より」のびらを張る。

内へ入つて見れば錢取場には大木戸やうの男上り、入人二人這入れば

「二まい——」

三人這入れば

「三枚——」

と呼込みの態にて人を入れる。

入人も芝居の心持して、はき物をぬぎ上に上りて見れば、着物入れの箱は棧敷の形にして、畳の上に芝居の場の通りに仕切りを入れ、一段うしろの方に高い所を拵へ、これは「くり上げ」と名をばつけゝる。

正面の風呂の前垂には大手笹瀬の印あり、誠に芝居の氣になつて待合しける所へ、菓子屋が

「宇治やま水から、山水から……」

と賣り歩くもの有ける故、待合せの人々が

「風呂屋にマア菓子賣が——」

と笑へば傍らに江戸者が居て

「ナアニ江戸ぢや湯屋で菓子賣らねい所はねへ」

といふうち、茶や煙草盆はこぶ女あるに、待合せ人々

「なんと長い幕ぢやナア——」

と洒落だすと、一人が

「その筈ぢやけふは初日なもの」

そのうちに風呂の中から一人出て、肩に手拭をかけ、又腰に手拭を垂れて上下のていにして口上言ひの形となし

「東西く、只今のつゞき、初風呂紋日の大入風呂屋の段、役者かへ名の次第東西く

ふろわいたかと加減をば 三榊大五郎

ふろから戻りに濡手拭は 片々おかん我童

不性者は體洗ふのが 中々邪魔七

禪を越中にする人は 又ぐら簡略

着物入た箱の番附を呼ぶ おぼへ多見藏

あんまり長風呂故に 内からよび十郎

風呂屋で咄のでけた女夫は 實からゑん三郎

ふろから上り風引かぬ呪ひは 乳からふけ十郎

しつくいばで體をふいてるは ふりまら友吉

ふろの中大入で尻が迫り ぎち川團藏

すぐぎの手水鉢に 中には杉右衛門

まへ金着物ゆまき迄とれば 中には〇三

帯をときて着物を箱へ 入たら海老藏

そのほか諸役人取そろへ、紋日の大入風呂屋の段左様」

と言ひ終つて彼の男、腰の手拭ひを開けて幕とスウー／＼と引けば見て居た男の子
 「なるほどゑらい道具ぢや」

女學生の隠語

これから一席申上げるお話しは現代の女學生がお喋り遊ばした言葉をその儘に御紹介する
 ものでございますが、途中、ワンサとわれ／＼舊時代に屬する日本人に判断し兼ねる言語が
 出て來ます、それは追て語源及びその言葉の意味を御知らせいたしますから、判らぬ所は判ら
 ぬなりに御讀みになつて頂き度うございます、東西／＼。

◇場所 銀座街頭

◇人物 どの生徒かは存ぜねど、とにかく現代的に舗道を蹴飛す様に濶歩する極めて御快活
 なる女學生の一團

「あーら××さん、××さんつてば。來たわよ、向ふからチャン／＼(1)モガがやつて來た
 わよ」

「けふはドン・ファン(2)だからオンチ(3)のスタンバイ(4)でも見つけやうとして、モリモ
 リ(5)と隊伍堂々お出掛けなんですよ」

「でもあの洋服はスベ(6)ね」

「あらほんとにオス(7)だわ」

「でもみんなロングジャン(7)ばかりぢやないの」

「だつて非常にアレ(8)的でチチナ(9)であるといふことだけは事實でせう」

「けれどもスタンバイするやうなのは一人もゐないわ」

「でもまん中の一人だけはクララシヤン(10)と思はないこと」

「あれだけはオス(11)だわよ」

以上の話をお分りの方があつたら手を舉げて——これを解説すると

(1)は非常に、といふ意味、或は一生懸命とか、強くとかにも用ふ。

(2)は、はんだんの逆、即ち土曜日のこと。

(3)はお馬鹿さん、これは一高より流行のもの也。

(4) うつとりする、つく／＼見惚れるといふ意味。

(5) チャン／＼と同意味。

(6) 素適、素ばらしい、といふことである。

(7) おゝすてき、といふことでスベの方がこれより新らしい流行語也。

(8) クララボウ主演の映畫「あれ」から出たもので、性的魅力のある人をいふ。

(9) おしやれで浮気で、けば／＼しい上に、性的魅力のあること。

(10) クララボウのやうな感じの美人のことで長二郎に似た美男をヨーシヤンなどといふ、ロングシヤンが遠見の美人、後辨天をバックシヤンなどといふ。

(11) スベと同じく素的の略語である。

何しろ、都會の女學生ほど隠語の造詣に深く、その製造の早く、しかも傳波力の偉大なることラヂオもまた及ばぬ。

「ほんとにあの方はアナウンサー(1)よ、わたしタイガー(2)の××さんにも、い、あはれ(3)なんだけれどダブルフォールト(4)でぢれつたいつて話したらもう皆さんに話してしまつて

んですもの」

これちや何が何のことやら、おそらく泥的でもスリでも、この隠語を解するものはなからうところが女學生間に於ては

「あら随分見たわよ(5)うね」
で通じるのである。

これを翻譯すると

「ほんとにあの方は人の告げ口ばかりして歩く人で、わたしラグビー選手(2)の××さんに初恋の悩みを感じてゐるんだけど、私の氣持が通じない(4)でじつたいつて話した云々」

といふことになり

「あらづいぶん、お羨ましいわ(5)」
といふ譯合なんである。

或女學校の五年生三十八人に就て、先生のあだ名調べを行つたところに據ると、頭のベコベコに禿たのを電氣會社の社長順に毛の多少に従つて副社長、重役、支配人、雇など、區別し

たのや、長いのを「半鐘泥」小さいのを「チョコマン」などは陳々腐々たるもので、笑つてゐれば「ニヤリスト」黙れば「スフィンクス」

「ね浪チン（浪さんといふこと）あの羽子板（角ばつた顔）先生はこの頃花チンにとてもネチ（熱心）にお上げになつてゐらつしやる（逆上せてゐる）だつてね」

「ネチどころか、パウなんだよ（パウはネチと同意の語で尙更らに一段強いもの、而して多少性的の響を有す）」

「じゃクロゲーム（接戦）したの、それともまだクライマックス（絶潮）なの」

「ロケーション（二人連れの散歩）程度でせう」

とまアスの如き有様である、しかし隠語にかけては創造性盛んにしてチャンクしてゐる女學生諸君は昨日のこと、今日は既にない——といふありさまでワンサと後からく出すのだから「ダー」と来るでないか。

忠臣藏十二ヶ月

御承知の通り假名手本忠臣藏といふのは竹田出雲の作つたもので全部で十一段これに泉岳寺を入れて十二段これは一ヶ年の月の數を表したものでござりますといふのはこの「忠臣藏のらくら講談」の演者の前口上である。

大序は鶴ヶ岡、いまのモダンには知らぬでせうが、昔は年越に鶴の羽をかんざしにさしたものです、これは鶴ヶ岡の鶴の羽からとつたもの、また顔世御前の兜あらためから、十日我には兜その他のかぶりものを商つたものでござる。二段目は二月、此場で加古川本藏が松の木を切るが、これは二月の初午に凧が引つかうらぬ用心だ——といふがこれはどんなものでげすか。

三段目は御殿の場、師直の科白に

「判官どの、貴殿のやうに内にばかりゐる者を、妓の雛（井戸の鮎）じやといふたとへがあるひなじや、雛さん柵じや（鮎じや、鮎さむらひじや）」といふのでも分るでござんせう。

四段目は四月、この幕には花かごを並べる、そして判官が腹を斬る、依つてお釋迦様が腹を

破つて出、四月八日は花の下で甘茶供養といふやうな事になつた。

五段目は五月、勘平が鐵砲を持つ故に節句には具足鐵砲などを飾る、また定九郎が傘を持つて見栄を切る、だから五月雨月といふ事になつた。

六段目の六月、與市兵衛の死骸を見て婆あは俄に涙の雨を流す、だから此月雨が多。

七月の七段目は茶屋場、由良之助といふ旦那が、ばた／＼と踊るからこれを旦那ばた踊り、(たなばた踊り)だつていふんだがちと變だ、殊に由良之助が蛸肴を喰ふから蛸坊主が棚經をあげて歩くに至つてはのらくらも與太も極まれり、殊に八段目の八月は親子の道行の場だから月見に芋を飾るは、こじつけも酷過ぎる。

九段目は九月だ、力彌と小浪とが一夜の契りとして、甘酒といふ一夜酒を作る爲め、一晚布團に包む、小浪はこの月、松茸を食ひ、力彌は十三日に豆を食ふ、即ちこれ十五夜のお月見である。十段目は十月天川屋の女房おそのが髪を切る故に此月をかみなし月(神無月)といふのでござる。

十一段目は十一月、敵討ちの芝居部屋をかたどつて此月は火たきをする、敵討ちをしたので泉

岳寺を十二月にとる、師直の首を墓前に備へるに因んで年越しにはいわしの頭をひいら木にさすといふ事になります。

さて年越しの次は厄拂ひでござる、そこで「ヤアラ目出度いな／＼、めでたいことにて拂ふなら、まつ初春の初まりに、新田と笑ふて義貞や、兜も年も改めて、千歳ことほぐ松桐や、御殿は幾代末廣の、扇ヶ谷のかみやしき、たからの山崎、在所の場御名を揚屋の道行で、かの山科へ嫁入りのかほどめでたき折からに、いかなる悪魔師直が來るとも、天川こへて敵討ち泉岳寺へさらり」

「も一つ重ねて祝ひませう、鶴ヶ岡は千年、勘平は萬年、東ぼうさくは九太夫で、浦島太郎は八千崎、三浦の大星百六つ、松竹もりの島臺に、石堂むまの丞と姥かほよ、めでたき折からにいかなる悪魔師直が小浪とも此厄原郷右衛門がひつゝかみ加古川と思へども、義士の海へさらり」

聞いた人々「わらひませう、わらひませう」

むけん地獄

閻魔大王に閻太郎といふひとり息子がある、地獄の沙汰も金次第といふが、いくら地獄でも金ばかりが物をいふ譯ではない、人情と同じ意味で獄情といふものがあり閻魔さまには特別にまたゑん情といふやうなものがあるのでこの一人息子を目の中へも入れたいほど可愛がり、親ばちやんりんは、遂に閻太郎をしてドラ息子に仕立て上げてしまつた。

閻太郎とし二十二歳、親父の大王は頭に妙なしやつぽを被り、笏などを持つて鹿爪らしく所謂閻魔顔をしてゐるが、息子閻太郎に至つては、黒ちりめんの頬かぶり色白の好男子いなせな格好でしやなりくしてゐるので、血の池の女どもがわいわい騒ぎ立てる、殊にその昔千束町にゐた女などは「あーらちよいと閻ちゃん、閻ちゃんてば——」といふやうな有様、とうとう馴染が深くなつて、女房にして呉れとまでなつたのがおさんといふ女だといふのだが、これが紙屋治兵衛の女房だつた女か茂兵衛の女房だつたか、それとも千束町、吉原、或は玉の井の女か、それとも銀座荒しのモガか分らない。

さて娑婆での黄道吉日、地獄での赤道悪日を選んで二人の結婚式が挙げられることになつたが、その料理献立は實に變つたものばかりである。

◇骨うづきのいたみ酒◇漁師のうしほ煮◇耳のきくらげ◇雑兵のぐそく煮◇子供のいひだこ◇さむらひの田樂◇面の皮の厚焼き◇隠亡の焼とり◇女郎のつくり身◇仲人の結びこぶ◇モガの切り身◇息子のどろぼう漬◇小娘の割貝◇後家の酔貝◇役者の天ふら◇かつたいのかまぼこ◇巾着切りのすりみ

その他山海の珍味、苦界の佳肴山ほど用意し、この日ばかりは地獄も釜のふたを明け、いづれもこの婚禮の席で飲めや唄への無禮講だつたといふ。

こうしてさんく、苦勞の盃(三々九度の杯のことを地獄ではこういふ)をした末さてお床入りも無事に鴛鴦の契りを無事に済ました翌る朝になつて女房は新郎閻太郎が包莖であることを發見し、恥づかしながらそのいわれを閻太郎に聞いたところ、閻太郎頭をかきく曰く

「こゝは娑婆とちがつてむけん地獄ぢや」

辨慶の毒見

さるほどに一の谷の坂落し息をもつかせず壇の浦と追ひ攻めて、平家を亡ぼした、九郎判官源義経は、ほつと一息つきけるほどに或日辨慶を呼び寄せ

「こりや辨慶、いくさも一段落永の征戦に心落つて物食ふひまもなかつたが、けふは久しぶりで鯛のつくり身で一杯やりたいから一つ料理を頼む」

といふ命令に、辨慶ハツとかしこまつて勝手元へ入つた。

ところが、びんくしてゐる鯛の料理してる中に辨慶はたまらなくなつて一切れ喰ひ、二つ毒味をしてゐるうち、遂に我を忘れて無我夢中料理どころか食ひ放題、一方義経は、いつまで待つても辨慶が鯛を料理して来ないので待ち切れなくなり、そつと勝手元をのぞいて見ると、この始末

「こは怪しからの奴、生命も果さず己れのみ食ひ食ふ不處存者いでや一刀兩斷」
とは思つたが、イヤ待てしばし叱るも大人氣なしと、暫らく首を捻つた揚句に

「辨慶は料理はよいがむさし坊」

びつくりしたのは辨慶、誰れ見る人もないといふ氣になつてゐたところへ、突然後の方に聲するは主人義経、しかも頭から例の疳癩で怒鳴りでもすることか、ほがらかな聲で狂歌の上の句、遂に泣かぬ辨慶もこの時ばかりは涙も出ないほど嬉しくなり冷汗三斗三升三勺ほど流して目を白黒した末

「それをば知つてくらう判官」

いやはやおもしろいことでございます。

鳥 一 題 話

雀と啄木とは前世では姉妹だつたといふ、そして二人は家が貧しかつたので、人の家に下女に住込んだ、ところが或日、彼女等の父が急病で、どうしても助からぬ、早く来て末期の水をとつて呉れ——といふ使が来た、その時、雀は知らせを聞くや否や、主人の許しを乞ふて、それこそほんとうに取るものも取り敢ず、着のみ着の儘、足も地につかずに飛んで歸つた、そして

やつとのことで父の臨終に間に合ふことが出来た。

これに引かへて啄木の方は、知らせを受けると、まづ顔に白粉などを塗り、着物もよそ行き
の第一等に着かへ、鏡の前に尻の格好など気にしながら、さてこれならよしと自信をつけて出
掛けたので、惜やお父さんは息を引き取つた後、泣いても及ばぬことになつてしまつた、この
孝と不孝の姉妹には、天が賞罰を與へた、即ち雀はいつも飲んで啄んでなほ餘りがあり、啄木
は終日木をコツ／＼と叩いて、日に三疋の蟲を得るに過ぎない、その代り、雀は着たきり雀と
いつて、いつも褐色の平常着、啄木は五彩の着物だけは着てゐる。

同じく鳥の話の一つ。

夜鷹といふやつは晝に寝て、夜は起き、餌を啄んで歩くのだがどうも夜では蚊やホタル位な
ものでそれに腹が六分目位、どうも満腹するといふことがない。そこで、これは僕も矢つ張り
夜寝て、晝起き、そして働いたならば、うまいものを澤山食へるにちがひない、よし一つこれ
を實行してやらうとは思つたが、その時は既に宵、いつものことゝて腹がまたやまだ、たまら
ぬから今晩だけは夜稼いで、明朝から始めやう。

こうして夜鷹は生活革命を企てたまではよかつたが、明日よりといふその朝は、昨夜の疲れ
で夕方まで寝込んでしまつた、翌る日も翌る日も――

二人 権兵衛

愚談、漫談、かぎりもなく跋扈跳梁させることは出来るが、漫談食傷などは時節から療治に
困難するといけない、此邊で打切らうとするに際し、さきごろ、うっかり口が辻つて権兵衛の種
蒔きは文獻がないと申上げたところ、各方面から、なんだこの有名な権兵衛さん知らねえと
は怪しからぬと、まるで権兵衛殿の親類か後裔みたいな人達から、権兵衛は和歌山縣東牟婁郡
の産、獵を業としてゐた男といふことをお知らせに預かつた。更らに「旅」といふ雑誌には折
も折種蒔きと権兵衛の遺跡と傳説といふ一文が掲載され、それを寄贈にあづかつた、そこでこ
の方の権兵衛を先づ御紹介するが僕の調べたのには、も一つ、府下目黒の種蒔き権兵衛がある
それも次手に申上げておくことにしよう。

さて紀州の権兵衛だが「旅」の一文によると和歌山縣北牟婁郡相賀村に現在立派に屋敷跡ま

で残つてゐるといふ、その權兵衛は、本姓を上村といつて、父の兵部はもと大和國に住んでゐたが、中年故あつて川場左近といふものを隨へて國を立のき、紀伊の牟婁郡に來り、兵部は便の山を左近は小山浦に居を構へた（便の山も小山浦も今の相賀村の大字である）そして兵部はこゝで妻を迎へ、寺小屋のお師匠さんとなつて平和な生を終つたのが延寶元年二月四日とまではつきり判つてゐる、察するに兵部は然るべき身分の者であつたらしい。

權兵衛は此の兵部の子で、極めて偉大なる體軀の持主、十人力と稱され、その性恬淡無慾、平生は農業に従事して居たが、鐵砲の名人で、その名聲は遠近に聞え、紀州侯が妙技に感じて褒賞を賜ふたといふ事蹟も有る程だ。

けふも權兵衛君は畑の方が閑なので好きな鐵砲を肩に何かよき獲ものもがなと山野を跋渉したが、とうとう山奥深く迄突き進む、日は暮れる、歸ることも出来ないといふことになつてしまつた、そんなことはビクともせぬ權兵衛君大きな樹の下が結局幸ひの臥床として眠つてしまつたが半夜ふと目を覺まして見ると四邊は闇澹、今にも豪雨の襲來しやうといふ物凄しい光景だ、權兵衛君つらく思ふにはこいつ、さアつと來られてはおたまりこぼしが無い、何處か岩窟

のやうなところがないものかと考へてゐた時はもう遅い、ゴーツと吹き來る一陣の風、スワと思ふ間もなく權兵衛君は身體がふあーと何かに包まれてしまつた。

剛膽無比な權兵衛君もこれには驚いた、そろ／＼と觸つて見ると、夫は軟い毛のやうな感じ如何なる妖怪變化が權兵衛を捉へてゐるのか、よし何ものにもせよ俺も權兵衛一つ引つ捉へてこつちから化物の正體を引ひいてやれと様子を窺つてゐたが風もやみ、雨も晴れ、夜も明けて見ると、これはいかに、化物と思つたのは、實は岩苔の筵が風に吹き飛ばされて權兵衛君を掩つてゐたのであつた。

入れた力も抜けて、張合なくなつた權兵衛は、あは／＼と獨り高笑するのほかなかつたがさて考へて見ると、あの豪雨に身の濡れることを免れ、危く凍死から脱れたのはこの苔の筵のおかげ、屹度これは神の祐けに違ひないと歸つて里人にも告げたが、皆はこれ聞いて「權兵衛苔に驚いた」と囁し立てた。

相賀村の南方、尾鷲町との境に馬越山といふ難所がある、文字通り晝なほ暗い杉木立の峠路であるが、この山に巢を喰つて旅人を怖れさせ惱ました「三太郎狐」を、勇敢なるわが權兵衛

君は退治して、行旅の人々に勇士として賞讃されたこともある。

だがそれにもまして、権兵衛君生涯中に最も勇ましく花々しい壮烈な物語りとして残されたものに大蛇退治の一卷がある、三太郎狐が棲んでゐた馬越山の頂上に、天倉山といふ所がある。その岩窟に數百年もどぐろを巻いて頑張つてゐた大蛇があつた、これには全く人力を以て如何ともすることの出来ぬものとして、只これ近づかぬことを心得としたが、なほ幾多の危害は相ついで起つた。

これを聞いた紀州侯は、曾て権兵衛の勇壯なることと、鐵砲の名人なることを知つてゐるので、この大蛇退治を権兵衛に命じた、殿の御命令であり、人々の難儀を救ふ大役である、権兵衛は男、これを引受けずには居られなかつたが然し、この命を受けた時、権兵衛には悲壯な覺悟があつた「自分は多年山野に狩りをして、殺生を業として來た、水に泳ぐもの水に溺れ、山に狩するものは山に命をおとす、それは覺悟はしてゐる、いまこの命令である、相手は名に負ふ怪物、假りに仕止めたところで、自分の命はないものと思はねばならぬ、これが今生の別れとなるだらう」と訣別の辭をのこして権兵衛は自ら死を覺悟の大蛇征伐に向つたのであつた。

悲壯極まる決心のもとに天倉山の蛇退治に出掛けた権兵衛君は、日頃信心する劍の山寶泉寺の十一面觀世音菩薩を祈念しながら隠れて大蛇の出て來るのを待つてゐること數日、日も黄昏時暮色漸く迫らんとする頃、何處からともなく腥い風、スハと思ふ間もあらせず太さ四斗樽ほどもある大蛇が眼をむき鱗を逆立つて紅蓮の舌を吐きながら権兵衛一呑みとばかり襲ひかゝつた、さては御參なれ、もとより死を覺悟の権兵衛、何條臆すべき。睨ひ定めて引金外した手練の鐵砲玉、續け撃ちの三發は何れも美事に大蛇の口中に命中し、のたうち廻りながら、大蛇は尾鷲の座の下へ蛇の舌といふ處まで逃げのびて遂に死んでしまつた、斯くして大蛇は退治したが、権兵衛も亦氣絶してしまつた、そしてあらゆる治療を施したが遂に起たず、時に元文元年十二月二十六日、慶順と諡した。

そこでこの権兵衛君の種蒔きに就てあるが、このやうに狩りが好きで鐵砲自慢の権兵衛は家に居ることが殆ど稀で、折角種は蒔いても手入れの念がなく徒らに鳥のほじくるに任せてゐた、そこで世人は彼のことを「種蒔き権兵衛」とか「種蒔き殿」とかいつた、そして彼は何としましたのか長さ二寸ばかりの一個の石を愛撫してゐたのでその石を権兵衛のズンペラ石といつ

た、この石から出たニツクネームが權兵衛を「すんべら殿」と稱ばせたのだといふ、この石は權兵衛の子孫である上村金助氏の佛壇にいまでも飾られてあるといふ。

以上が紀州の權兵衛君の事蹟考證であるが、今一つ市外の目黒にある權兵衛君の傳説は次の如くである。

駒場大學三角橋の袂に一軒の百姓家があつた、その主人「三角の源さん」といふのは二代權兵衛さんと親しい仲の人であつた、その源さんの父の村田平助といふのはまた初代權兵衛と友人であつたといふ因縁深い家柄だ。

その初代、二代から現三代目の名譽ある權兵衛君の後裔は鎗太郎氏といふのだが、村では矢張り權兵衛さんの方が通がよい。そこで初代の權兵衛といふのは相撲の生れで養子になつて江戸に出たといふことである、この初代は鳥を飼ふことが巧妙だつたので、將軍狩獵の時には特に鳥飼ひ餌蒔の役を仰付けられ五人扶持を賜はつたもので現在權兵衛さんの家の地面も元は元領地だといふ。

權兵衛の種蒔といふのはこの餌蒔のことで、野菜や穀物の種蒔のことではない、權兵衛は將

軍の狩獵にお伴をするために多くの鳥を飼ひつけてこれに餌をやる、その頃の駒場の一帶は笹が生繁つて所々に松林があつたもの、今日のやうに雑木林などは見られなかつたのだといふ、この一面の笹原で、權兵衛君が蒔く鳥のための餌を、横着非道なる鳥は隙を狙つて飛んで来ては盗み喰ひをする、見つけると權兵衛は怒鳴り立てる、然し鳥のことだ、權兵衛を小バカにして立たうともしない、權兵衛は焦れ出して飛出す、すると漸くアホー〜と啼いて鳥群は退却する、場所が將軍狩獵の地で常人の入るを許さず、鐵砲、弓矢を使用することが出来ぬ、權兵衛はおどかしに鐵砲を向けると最初のうちは驚いて逃げたが、空鐵砲だと知ると鳥は平氣な面であア〜と啼きただけだ、蓋しその圖は見ものだつたらう、爾來權兵衛が餌蒔きや鳥がほぢくる〜といふたのをいつか餌が種になつて、今日に及んだのだといふ、紀州と目黒、果して何れか本家本元の權兵衛さんやら……

あばら骨の悲哀

婿選みの第一選手

身は子爵である。そして岡部長景氏は華やかにも若き外交官である。そして、現に外務省對支文化事業部長として活躍してゐる。もう一つ、そして子の令聞は故加藤高明伯の令嬢悦子さんである。

それは諸君の既に御存知のところ、それをしも新しく御披露に及ぼうといふのではない。茲に、その現岡部子令夫人悦子さんに絡んでの一つの話がある。

加藤伯は最初わがまな娘の婿がねとして、意中に秘めたのは、廣田弘毅君であつた。ところが、世上傳ふる所によると「硬骨漢の廣田君はこれを斷つた」といふことになつてゐる。

廣田君の硬骨なことは、和蘭公使に任命されながら、赴任の時期を延ばして當局をも、世間をもやき／＼させた一事によつても察することが出来るが、いかな硬骨漢でも、婿選みの第一選手に推された當時は、故加藤伯一代の得意の折である。まさか世間の諺通り「小糠三合有つたら婿になるな」

をその儘に、スゲなくお斷り申した譯でもあるまい。

一體なせ廣田君が、あの金佛さまに斯くも見近まれたか、それには今道灌よろしくの即吟機智の一場面がある。話は廻る。まだ帝大在學中に外交官試験に首席で合格し、卒業と同時に外務省に入つた廣田君は、間もなく外交官補として、英國大使館附を命ぜられたものだ。

ところが偶然この船には駐英大使として赴任する故加藤伯が乗つてゐた。

後年の「金佛首相」何も首相になつて金佛様のやうになつた譯でなく、英國大使に赴任の道すがらだつて、矢張り金佛は金佛、無口で傲慢らしくて、尊大ぶつたやうで容易に近づき難いものがあつた。これに對する廣田君、年は若い霸氣縱横だ。

「おらが親分だが、向ふが尊大なら、こつちから頭を下げることはないや」

と、天晴れ幫間化せぬところに廣田君の面目があつた。それをまた

「小癩な小僧。このわしに頭を下げぬ」

と思ふほど、高明伯も成上り者に出來てゐない。この一場の光景はエへ、と額を叩いて膝行すれば、有頂天となる現代の成上り者と、阿諛を常業として我身を守るの楯とする輕薄者揃ひの、今日この頃に比べて、若干溜飲の下るやうな氣もする。

船中、既に金佛さまと睨み合ひの態であつたところのわが廣田君は、ロンドンへ着いた後とも本質的な硬骨が、ふやける筈もない。

彼は命令を遵守して卒がなかつた、尊大傲慢に見へながら、なか／＼神經質の高明伯に、これも細心で、しかも敏速な事務家である廣田君は

「ハ、ハ、却々やるわ」

と思はせたとに相違なかつた、敢て思はせたといふ、金佛さまは、左様思つたとて口には出さぬが本性だつた。

金佛と金佛の睨めつこ

或日のこと、加藤大使は、若い廣田君に某重大問題の調査を命じた、それは後年問題となつた對支二十一ヶ條の基礎案だつた、といふが、それは何うでもよい、兎に角この重大問題の調査を、物の見事に片附け終つた或夕のこと、大使は

「廣田君、今夜どこへ行く約束があるかね」

といふ言葉の調子が、いつもの金佛さまとは變つて、ロンドンの外交舞臺でのみ使ふやうな、如才のない口調だつた。

これは廣田君とにつて意外だつたに相違なく、加藤金佛さまにしても、滅多に出す手ではなかつた、少しくげいんに感じた廣田君は

「いえ……別に……」

と、これは例によつて變哲もない響きを傳へたらしい。「すると、又しても金佛さま、一段と碎けた態度で

「君は獨身者だらう、宿へ歸つたつて面白いこともあるまい、何うだこれから散歩に出やうじやないか——」

といふやうな調子らしかつた、變なこともあればあるものと思つた廣田君は、金佛さまと同道霧の流れるロンドンの街に出た。

元來が、御兩人とも、先づ以て無風流者、無愛嬌者、と正札を付けても、値引きをされる心配のない出来だつた。

おそらく美人の品評も出来なかつたらう、さうかといつて、片苦しい事務の話をした譯でもあるまい、黙りこくつて文字通りぶら／＼と足にまかせて歩いたにちがひない、いつかその足の先きが、ハイドパークのネルソンの銅像の前で停つた。

その時、この銅像を仰ぎ見てゐる加藤大使の様子を、若しも廣田君が茶目公だつたら

「ハ、、、金佛と金佛が睨みつこをしてらア……」

と笑ひを殺すところだつたらうがその暇をも與へず金佛大使は……

「そびえ立つネルソン卿も夢ならめ」

とやつたものだ。

人間といふものは、往々にして全く意外のことをやらかすものである。あのぶつきら棒の加藤高明伯が、敷島の道を學び、三十一文字に親しんだことは曾て聞かぬ、ロンドンの霧の夕べが、金佛さまを詩人としたか、霧と詩神經（若しあつたら）の關係を調べて、醫學上の新發見でもしたら、世界的の榮譽を擔ふかも知れぬが、いま小生にその神妙さも研究心もない。

然し、この金佛さまを襲つた龍神は、忽ち姿を消したものと見へて、上の句の後が續かぬ。

「ネルソン卿も夢ならめ……」

夢ならめ、夢ならめ……まるで彼は夢を追ふ人のやうに、ネルソンの銅像を見上げて苦吟した。

「ハ、、、柄にないことを口走つてしまつて、金佛さま目を白黒させてらア」
と僕なら思ふ所だが、側にゐた廣田君は、さう思つたか何うか分らない。

「トラハルガルに獅子あらんとは」

廣田君は即座の助け船下の句を口ずさんだものである。

「お。トラハルガルに獅子あらんとは……さうだ。そびへたつ、ネルソン卿も夢ならめ、トラハルガルに獅子あらんとは」
思はず両手を拍つた金佛大使は、咽喉に悶えた餅を嚥み下した時のやうな表情をして廣田君を顧みた。

天晴れ名吟

日本人には、歌、俳諧の即吟によつて、出来上つた話がふんだんにある、これも亦その一つで、歌になつてゐるか、ぬだになつたかは知らぬがネルソン卿の銅像前で試みられた一場の茶番じみた光景は、高明伯が廣田君を婿がねに所望するの動機となつたのであつた。

「この男こそ」

と深くも金佛さまは廣田君を信じたのであつた。

へなぶりの下の句が高明伯をして廣田君の前途に折紙を付けさせた、その句の是非善悪は二の次ぎ、三の次ぎとして、うつかり、柄にもない詩情を湧き起せたが因果で後が續かず、ぎう

くいつてゐた高明伯のために、廣田君の即吟はまさに地獄で佛だつたに相違ない。

以來、高明伯のお聲がかりで、廣田君、山座公使の薫陶を受ける身となつた、なにも廣田君山座公使の教を受けた爲めに今日の外交官となつたわけでもあるまい、皮肉家の言に「教育といふものが役にたつものなら、セネカの弟子にネロは出ない」といふこともある、が然し、廣田君の天稟の明が錯誤なしに輝いて行つたとは言へるかも知れない。

「こいつアいけねえや」

そんな口調を若く華やかな外交官であるわが廣田君が使つたか何うかは知らぬが、加藤伯の愛嬢を

「家柄がちがふ、俺はいやしくも石屋様の俸だ釣合はぬは不縁の因、といふのはこのことぢやねえか、そんな立派なお嬢さんは俺向きぢやねえや」

とばかり一言の下に斷つた、何うも廣田君の口調がべらんめいになるが、茲の調子はべらんめいでないと、小生の筆がうまく行かぬ。

折角の縁談を——なんかと思ふ奴はモボの類だらう、嬪左衛門の尉のために身の榮華を希ふ